

令和5年度

学校における地域活性化のための文化芸術子供鑑賞・体験事業

—統括団体による高校・過疎地域等学校派遣モデル事業—

高校生の ための 巡回公演

調査研究報告書



公益社団法人 Association of
日本劇団協議会 JAPANESE THEATRE COMPANIES

令和5年度

学校における地域活性化のための文化芸術子供鑑賞・体験事業
—統括団体による高校・過疎地域等学校派遣モデル事業—

『高校生のための巡回公演』

調査研究報告書

< 目 次 >

はじめに	4
すべての学校に演劇を 福島明夫 ((公社) 日本劇団協議会専務理事/青年劇場)	
第1章 報告書の概要	5
1. 調査全体の趣旨	
(1) 調査研究の趣旨・目的	
(2) 調査研究全体の枠組み	
(3) 調査研究の実施体制及び研究会の開催状況	
2. 「高校生のための巡回公演」鑑賞者アンケートの概要	
(1) ～ (9) 調査概要の詳細	
(10) 回答者情報	
3. 「高校生のための巡回公演」実施校アンケートの概要	
(1) ～ (9) 調査概要の詳細	
(10) 回答者情報	
4. 「学校における芸術鑑賞会に関するアンケート」の概要	
(1) ～ (9) 調査概要の詳細	
(10) 回答者情報	
第2章 「高校生のための巡回公演」鑑賞者アンケート 集計・分析結果	19
1. 巡回公演鑑賞前における演劇鑑賞経験の有無	
2. 鑑賞作品への満足度	
3. 鑑賞作品の家族・友人への推奨度	
4. 鑑賞後に感じたこと	
第3章 「高校生のための巡回公演」実施校アンケート 集計・分析結果	24
1. 芸術鑑賞会の開催頻度	
2. 芸術鑑賞会のジャンル	
3. 芸術鑑賞会において重視していること	
4. 演劇の芸術鑑賞会において希望する実施会場	
5. 芸術鑑賞会実施にあたっての困りごと	
6. 鑑賞による生徒の変化	
7. 芸術鑑賞会に対する意見・要望	
第4章 「学校における芸術鑑賞会に関するアンケート」集計・分析結果	31
1. 芸術鑑賞会(演劇以外を含む)の実施状況	
2. 芸術鑑賞会(演劇)の実施状況	
3. 劇団・作品の決定方法	
4. 開催の形態、場所、会場の準備	
5. 公演料負担の状況	
6. 芸術鑑賞会(演劇)への意向	

補論1. 定時制高校・特別支援学校以外の小規模校の状況	52
(1) 芸術鑑賞会（演劇以外を含む）の実施状況	
(2) 芸術鑑賞会（演劇）の実施状況	
(3) 劇団・作品の決定方法	
(4) 開催の形態、場所、会場の準備	
(5) 公演料負担の状況	
(6) 芸術鑑賞会（演劇）への意向	
補論2. 平成15年度調査との比較	64
(1) 平成15年度調査の概要	
(2) 芸術鑑賞会（演劇以外を含む）の実施状況	
(3) 芸術鑑賞会（演劇）の実施状況	
(4) 劇団・作品の決定方法	
(5) 開催の形態、場所、会場の準備	
(6) 公演料負担の状況	
(7) 芸術鑑賞会（演劇）への意向	
第5章 調査結果全体の振り返り	74
1. 鑑賞者アンケートと実施校アンケートより	
2. 「学校における芸術鑑賞会に関するアンケート」について	
3. 「学校における芸術鑑賞会に関するアンケート」の全体集計結果	
4. 芸術鑑賞会における様々な格差	
5. 平成15年度調査からの変化	
6. 調査結果の総括	
おわりに	80
「すべての学校に演劇を！」実現するために	
田辺素子（（公社）日本劇団協議会教育事業部部长）	
寄稿	82
観劇体験、すすめましょう	
平林正男（東京都立保谷高等学校校長／全国高等学校演劇協議会会長）	
参考資料	83
・「高校生のための巡回公演」鑑賞者（生徒）アンケート（質問紙／紙面回答用）	
・「高校生のための巡回公演」鑑賞者（生徒）アンケート（質問紙／オンライン回答用）	
・「高校生のための巡回公演」実施校アンケート（質問紙）	
・「学校における芸術鑑賞会に関するアンケート」（質問紙）	
令和5年度 上演作品基本情報・鑑賞者（生徒）アンケート感想	92

※執筆者記載のない章・節（ただし参考資料は除く）は、分析受託先である堀川裕介（関西学院大学社会学部）が執筆を担当した。

はじめに

すべての学校に演劇を

福島明夫（(公社)日本劇団協議会専務理事／青年劇場）

（公社）日本劇団協議会では、1974年度に文化庁国庫補助事業として『高校生・中学生のための巡回公演』をスタート。その後、1990年度から芸術文化振興基金助成事業に移管され、「高校生のための巡回公演」として行われてきました。しかし芸術文化振興基金の運用が厳しくなったことから、2023年度から文化庁委託事業（学校における地域活性化のための文化芸術子供鑑賞・体験事業—統括団体による高校・過疎地域等学校派遣モデル事業—）として実施されることとなりました。当法人としては、ほぼ50年間にわたって、高等学校における演劇鑑賞事業を行ってきたこととなります。

この文化庁への移管を機に、当法人としては高等学校における演劇鑑賞体験事業がさらに広がりを持てるように、7劇団7作品による計66回の公演に加えて、調査研究活動を独自に行うこととしました。というのも少子化の進行による学校の小規模化もあり、劇団、学校の双方にとってこの事業の実施が困難になり、正会員団体による高等学校公演は、年間1,300校を超えていた1990年代から、2016年以降は500校を切る状況となっていたからです。またそのことによって地域間格差が進行していることは毎年の公演報告でも明らかでした。そこでその詳細を把握するために、各都道府県教育委員会に鑑賞事業実施状況についてのアンケートを依頼し、23府県の教育委員会にご協力いただきました。その結果、2,100票を配布し、1,278票の有効回答を得ることが出来たのです。そのアンケートを分析検討したものが、この報告書の第一の内容となります。この調査にご協力いただいた各府県教育委員会及び各校の皆様にはこの場を借りて心より御礼申し上げます。

その調査に加えて、今年度本事業の公演を鑑賞した生徒へのアンケートを行うとともに、参加劇団の搬入仕込み～公演実施～撤収までを相互に視察する調査を、のべ7劇団22名の参加で42回行いました。

今年度事業は前述のように7作品によるものとなりますが、これは当法人正会員団体が高等学校公演として行っている作品の中から、外部審査委員会による選考を経て選ばれたものです。コロナ禍等もあって一時的に大幅に減少しましたが、それでも会員団体による高等学校公演は年間500ステージに迫る規模があります。私たちとしては本事業だけでなく、すべての公演を高校生にとってより豊かで魅力的なものとしていきたいと願っています。そのために相互の視察によって、公演をより安全に、円滑に実施するための研鑽の場が作られたことは今後生きるものと確信しています。

本事業についても宿泊費等の経費上昇に襲われており、思いだけでは実現できない状況が加速化していることは確かですが、この報告書に現れている高校生の声にぜひ耳を傾けていただきたいのです。当法人としては本調査を一つのエビデンスとしながら次年度に向けて小規模校への働きかけなどを行うことで、「すべての高校生に演劇を」届ける一助となればと願っています。ご一読いただき、ご意見ご感想をお寄せいただければ幸いです。

第1章 報告書の概要

1. 調査全体の概要

(1) 調査研究の趣旨・目的

本報告は文化庁の委託により公益社団法人日本劇団協議会（以下、劇団協）が実施した、「令和5年度学校における地域活性化のための文化芸術子供鑑賞・体験事業—統括団体による高校・過疎地域等学校派遣モデル事業—『高校生のための巡回公演』」の一環として行われた。

同事業では、①公演活動：劇団協所属劇団（7団体・7演目）による全国各地の高校での演劇公演、②普及活動：都道府県の教育委員会等に対する事業紹介、③調査研究：高校における演劇の鑑賞・体験機会に対するニーズ把握、公演活動における事後調査（実施校アンケートおよび鑑賞者アンケート）等による事業実施後の効果検証および課題抽出、の3点を大きな柱としており、本報告書はこのうちの③調査研究活動に焦点を当ててその成果を報告するものである。

(2) 調査研究全体の枠組み

調査研究は、①「高校生のための巡回公演」鑑賞者（生徒）に対するアンケート、②「高校生のための巡回公演」実施校アンケート、③「学校における芸術鑑賞会に関するアンケート」の3本を柱として行われた。

「高校生のための巡回公演」に付随して行われた①②のアンケートは、巡回公演の効果検証や課題抽出を目的として、実際に巡回公演を行った学校ならびに鑑賞者の生徒に質問紙を配布して調査を行った。

これに対し③の調査は、巡回公演実施の有無にかかわらず、広く一般の高等学校における芸術鑑賞会の取り組み状況やニーズの把握を行うための調査として実施された。

(3) 調査研究の実施体制

本調査について、調査内容の充実や調査結果の適切な分析を実施するため、劇団協内外のメンバーによる実施体制を構築し、調査計画の立案・調査実施方法の検討・関連作業の実施・進捗状況の確認・分析結果の解釈等に係る討議を行った。実施メンバーは図表 1.1 の通り、実施日程は図表 1.2 の通りである。

図表 1.1 実施メンバー

役職	氏名	所属等
コーディネーター	田辺素子	(公社) 日本劇団協議会 教育事業部部長
アシスタントコーディネーター	宮澤一彦	俳優座劇場
アドバイザー	細淵文雄 松永亜規子	青年劇場 青年劇場
分析受託	堀川裕介	関西学院大学社会学部
事務局	中原 恵	(公社) 日本劇団協議会

図表 1.2 調査研究日程

	開催日	開催目的
第1回	2023年5月29日（月）	全体協議
第2回	2023年6月15日（木）	調査項目・実施方法等協議
第3回	2023年7月26日（水）	打合せ（関係機関への協力依頼開始）
第4回	2023年8月7日（月）	打合せ（協力の得られた県から、アンケート回答随時開始）
第5回	2023年8月24日（木）	打合せ（期間中、各都道府県への協力依頼活動を継続。実施府県では随時回答受付）
第6回	2023年9月12日（火）	打合せ（期間中、各都道府県への協力依頼活動を継続。実施府県では随時回答受付）
第7回	2023年10月5日（木）	打合せ（期間中、各都道府県への協力依頼活動を継続。実施府県では随時回答受付）
第8回	2023年12月6日（水）	打合せ（12月末の最終締切に向けて回答状況確認、リマインド等実施）
第9回	2024年1月11日（木）	集計状況の共有
第10回	2024年1月18日（木）	分析結果（地域別集計）の共有及び討議
第11回	2024年2月1日（木）	分析結果（学校属性別集計）の共有および討議
第12回	2024年2月12日（月）	調査研究報告会資料の内容検討
第13回	2024年2月23日（金）	視察報告会・調査研究報告会にて、概要報告の実施
第14回	2024年3月5日（火）	調査報告書の内容協議

2. 「高校生のための巡回公演」鑑賞者アンケートの概要

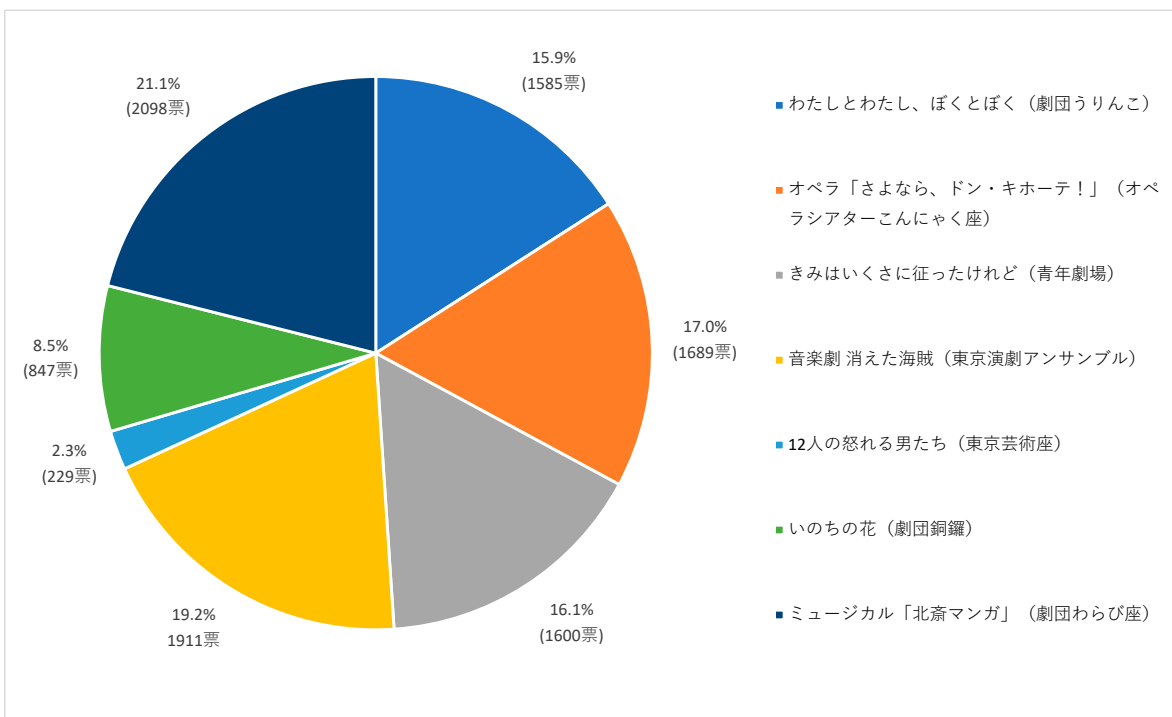
- (1) 調査目的 「高校生のための巡回公演」鑑賞者に事後アンケートを行うことにより、公演事業の効果検証ならびに課題抽出を行う。
- (2) 調査対象 「高校生のための巡回公演」（7団体・7演目）の鑑賞者たる高校生
- (3) 抽出方法 実施校で協力が得られる限り、鑑賞者全員又は一部に配布
- (4) 調査方法 配布質問紙への記入、もしくはウェブ回答フォーム（Google フォーム）への入力
※いずれの場合も回答者本人による記入または入力
- (5) 質問項目 ①公演以前の演劇鑑賞経験の有無、②鑑賞作品への満足度（5段階評価）、③鑑賞作品の家族・友人への推奨度（10段階評価）、④鑑賞後に感じたこと（複数回答8項目）、⑤自由記述 ※計5問
- (6) 調査時期 2023年5月～2023年12月 ※公演日に合わせて実施
- (7) 配布票数 69校の鑑賞者のうち33,284票
※生徒への案内が行われたか不明な一部の学校については鑑賞者数を配布票数として計上している。

(8) 回収票数 9,963 票 (回収率 29.9%)

(9) 有効票数 9,959 票 ※欠損の多い回答を無効とした。

(10) 回答者情報 質問紙では、率直な回答を促す意図から鑑賞者の属性（性別、年齢、所属高校、居住地等）を尋ねていないため、どの作品の鑑賞者が回答したかが回答者情報として唯一のものである。結果は図表 1.3 に示した通りであるが、「12人の怒れる男たち」（東京芸術座）に関しては学校ごとに一定枚数に限って配布したため、本来の鑑賞者数よりも票数が少なめとなっている。

図表 1.3 鑑賞者アンケート回答者における鑑賞作品



3. 「高校生のための巡回公演」実施校アンケートの概要

(1) 調査目的 「高校生のための巡回公演」実施校にアンケートを行うことにより、状況把握ならびに課題抽出を行う。

(2) 調査対象 「高校生のための巡回公演」(7 団体・7 演目) の実施校

(3) 抽出方法 実施校全体

(4) 調査方法 配布質問紙への記入 ※各学校担当教員による記入、ウェブ回答フォームは使用せず

(5) 質問項目 ①芸術鑑賞会の開催頻度、②直近5年間の公演ジャンル、③ジャンル選択の方法、④作品選択の基準、など計9問

- (6) 調査時期 2023年5月～2023年12月 ※公演日に合わせて実施
- (7) 配布票数 69票
- (8) 回収票数 60票(回収率87.0%)
- (9) 有効票数 60票
- (10) 回答者情報 実施校の都道府県別の回答数を図表1.4に示した。

図表 1.4 都道府県別回答数

北海道	3校	岐阜県	3校
岩手県	6校	静岡県	4校
宮城県	1校	愛知県	4校
福島県	3校	三重県	3校
栃木県	3校	滋賀県	8校
群馬県	2校	京都府	6校
東京都	1校	大阪府	2校
石川県	2校	岡山県	2校
福井県	1校	香川県	1校
長野県	3校	熊本県	2校
		計	60校

4. 「学校における芸術鑑賞会に関するアンケート」の概要

- (1) 調査目的 全国の高等学校(定時制及び特別支援学校の高等部を含む、通信制を除く)に対して質問紙調査を行うことにより、芸術鑑賞会の取り組み状況やニーズの把握を行う。
- (2) 調査対象 全国45都道府県の高等学校
※当初は10都道府県程度での実施を計画していたため、芸術鑑賞会(特に演劇)を毎年頻繁に実施していることが判明している山形県、長野県については、回収率や回答分布への影響が大きいと考えられるため、敢えて調査対象に含めなかった。
- (3) 抽出方法 各都道府県の教育委員会等を通じて協力の得られる限りのすべての高等学校
- (4) 調査方法 ウェブ回答フォームへの入力、または自記式質問紙をFAXで返信
※いずれも各校担当者による入力・記入
- (5) 質問項目 芸術鑑賞会の開催頻度、直近3年間の公演ジャンル、ジャンル選択の方法、作品選択の基準、芸術鑑賞会の開催形態、公演料負担など計20問 ※このほか学校属性を別途質問
- (6) 調査時期 2023年7月～2024年1月

- (7) 配布票数 23 府県 2,100 票
- (8) 回収票数 1,315 票 (回収率 62.6%)
- (9) 有効票数 1,278 票 ※同一校で二重回答されているケース (誤回答または回答の事後修正による) を無効とした。

(10) 回答者情報 本調査では回答した学校について、所在地域 (市区町村まで)、学校区分 (全日制高校、定時制高校、中高一貫校、特別支援学校の 4 カテゴリー)、学校設置主体 (国立、公立、私立の 3 カテゴリー)、生徒数 (実数) などの属性情報を、回答フォーム経由で取得した。調査協力が得られた府県と学校区分の状況は図表 1.5、図表 1.6 の通りである。

図表 1.5 調査協力を得られた府県・学校区分ならびに配布・有効票数

府県	協力が得られた学校区分			配布票数	有効票数 (有効回収率)
	国公立	私立	特別支援		
岩手県	○ 県立	○	○	92票	68票 (73.9%)
福島県	○ 県立	○		87票	52票 (59.8%)
群馬県	○ 県立/市立	○	○	97票	91票 (93.8%)
埼玉県	○ 県立	○	○	235票	117票 (49.8%)
神奈川県	○ 県立	○	○	252票	104票 (41.3%)
石川県	○ 国立/県立/ 市立	○	○	53票	49票 (92.5%)
岐阜県	○ 県立/市立	○	○	108票	100票 (92.6%)
滋賀県	○ 県立	○	○	78票	59票 (75.6%)
京都府	○ 市立	○		51票	28票 (54.9%)
兵庫県	○ 県立/市立	○	○	270票	177票 (65.6%)
奈良県	○ 県立	○		50票	20票 (40.0%)
和歌山県	○ 県立/市立	○		43票	24票 (55.8%)
鳥取県	○ 県立	○		32票	24票 (75.0%)
山口県	○ 県立	○		69票	57票 (82.6%)
徳島県	○ 県立			36票	23票 (63.9%)
香川県	○ 県立			39票	18票 (46.2%)
愛媛県	○ 県立	○	○	79票	43票 (54.4%)
高知県	○ 県立	○	○	69票	33票 (47.8%)
長崎県	○ 県立		○	86票	27票 (31.4%)
熊本県	○ 県立/市立	○	○	98票	55票 (56.1%)
大分県	○ 県立	○	○	71票	46票 (64.8%)
宮崎県	○ 県立		○	37票	23票 (62.2%)
鹿児島県	○ 県立/市立		○	68票	39票 (57.4%)
計				2,100票	1,278票 (60.9%)

※本来回収率は有効票確定以前の回収票数でカウントするが、本調査では回収票の中に同じ学校が二度以上重複して回答したケースがもたらであるため、重複を除いた有効票数を分子とした「有効回収率 (有効票÷回収票)」としてカウントした。

図表 1.6 有効票数の内訳 (学校区分・設置者による)

府県	学校区分				設置者			有効票計
	全日制	定時制	中高一貫	特別支援	国立	公立	私立	
岩手県	47票	5票	4票	12票	0票	59票	9票	68票
福島県	48票	3票	1票	0票	0票	46票	6票	52票
群馬県	62票	8票	5票	16票	0票	81票	10票	91票
埼玉県	84票	12票	7票	14票	0票	95票	22票	117票
神奈川県	75票	3票	16票	10票	0票	69票	35票	104票
石川県	39票	4票	1票	5票	1票	41票	7票	49票
岐阜県	60票	12票	3票	25票	0票	90票	10票	100票
滋賀県	43票	5票	2票	9票	0票	52票	7票	59票
京都府	20票	0票	8票	0票	0票	5票	23票	28票
兵庫県	126票	12票	21票	18票	0票	135票	42票	177票
奈良県	17票	2票	1票	0票	0票	16票	4票	20票
和歌山県	15票	6票	3票	0票	0票	20票	4票	24票
鳥取県	19票	4票	1票	0票	0票	19票	5票	24票
山口県	53票	3票	1票	0票	0票	41票	16票	57票
徳島県	18票	5票	0票	0票	0票	23票	0票	23票
香川県	18票	0票	0票	0票	0票	18票	0票	18票
愛媛県	33票	2票	2票	6票	0票	40票	3票	43票
高知県	11票	9票	4票	9票	0票	28票	5票	33票
長崎県	23票	2票	0票	2票	0票	27票	0票	27票
熊本県	40票	5票	2票	8票	0票	52票	3票	55票
大分県	29票	3票	0票	14票	0票	39票	7票	46票
宮崎県	20票	3票	0票	0票	0票	23票	0票	23票
鹿児島県	37票	2票	1票	0票	0票	40票	0票	40票
計	937票	110票	83票	148票	1票	1,059票	218票	1,278票

回答を得られた県や学校区分が一部分にとどまり、しかも無作為抽出ではないため、サンプルがどの程度母集団の状況を反映しているか（逆に言えばずれているか）を検証する必要があるため、以下では文部科学省の「学校基本調査」（令和5年度版）を母集団情報として参照しながら、本調査サンプルの地域分布、学校区分、設置主体、生徒数について検討する。学校基本調査データについては政府統計公式サイト（e-Stat）にて次の統計データを参照した。

- ① 高等学校 都道府県別学校数（表番号 122）
- ② 高等学校 中高一貫教育を行う学校数（再掲）（表番号 130）
- ③ 高等学校 生徒数別課程数（表番号 123）
- ④ 特別支援学校 都道府県別学校数（表番号 199）
- ⑤ 特別支援学校 幼・小・中・高別学校数（表番号 200）
- ⑥ 特別支援学校 児童・生徒数別学校数（表番号 202）

データ①によると、令和5年度時点で全国の高等学校数は4,791校で、内訳は全日制高校4,170校（うち国立15校、公立2,860校、私立1,295校）、定時制高校173校（国立0校、公立169校、私立4校）、全日制・定時制併置448校（国立0校、公立426校、私立22校）である。またデータ②によると、令和5年度時点の中高一貫校は併設型・連携型の合計で621校（国立1校、公立184校、私立436校）となっており、これらは前掲の高等学校総数4,791校に含まれると考えられる。

しかし本調査では、全日制と定時制を併置する学校については、これを別個のサンプルとして扱った。これは本調査では定時制高校や特別支援学校など、従来の調査では十分に把握されてこなかった教育課程の学校における芸術鑑賞会の普及度合いや実施にあたっての課題を明らかにすることが一つの重要な目標であったため、併置校を1つのサンプルとして扱ってしまうと、定時制高校の状況が全日制高校の影に隠れてしまうのではないかと懸念したためである。そこで今回母集団の集計を行うにあたっては、変則的な方法ではあるが、全日制/定時制併置の学校（448校）を本調査の設計にあわせてダブルカウントした上で集計を行い、母集団と本調査サンプルの比較を行うこととした。従って、母集団集計における高等学校の総数は、本来の総数である4,791校に全日制・定時制併置校448校を再加算し、 $4,791 + 448 = 5,239$ 校として扱うこととした。

さてこれに対し、特別支援学校は高等学校数とは別途計上されており、データ⑤に基づくと、そのうち高等部にあたるのは本校953校（うち国立44校、公立897校、私立12校）、分校73校（すべて公立）あわせて1,026校である。しかしこちらでは、高等部の都道府県別学校数を確認できる統計表が存在せず、各都道府県の情報（特別支援学校出願状況など）を参照しても学校基本調査による総計と合致しないため、代理的に幼・小・中を含んだ特別支援学校の総数を母数とすることとした。こちらの場合は統計表で都道府県別の学校数が確認できるためである。高等部以外を含めた特別支援学校の総数は全国1,178校であり、高等部の1,026校はその87.1%と大半を占めていることから、完全ではないものの特別支援学校の概況を反映する代理的なデータとして十分であると判断した。

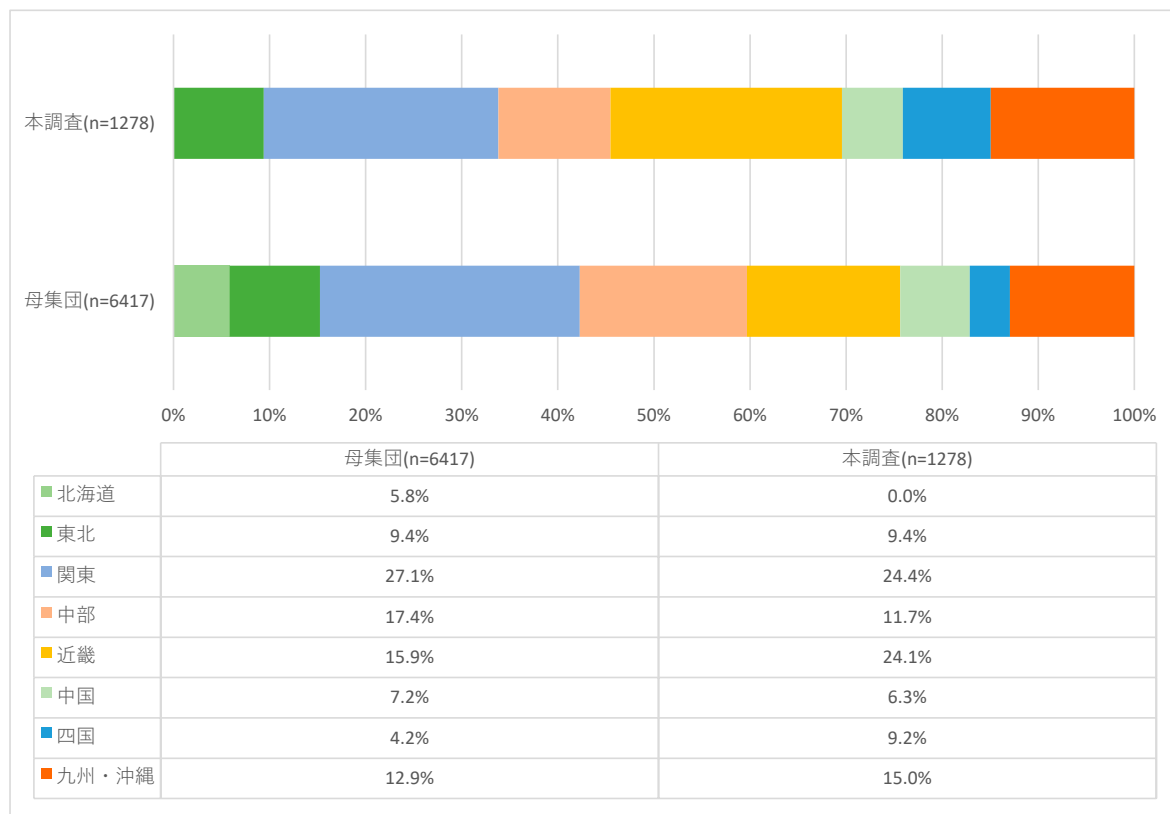
以上より、母集団（全高等学校）は全体で6,417校、構成は次の通りとなった。

全日制高校（全日制のみ） うち中高一貫校	4,170校 (621校)
定時制高校（定時制のみ）	173校
全日制 / 定時制併設校	896校 ※本来の448校を2倍に計上
特別支援学校（高等部）	1,178校
計	6,417校

① 地域分布

有効回答 1,278 校について 8 地域区分に基づく分布を示した (図表 1.7)。全国の実態と比べた時、まず北海道の票を得られていない点が大きく異なるほか、東北・関東・中部・中国の 4 地方について構成都府県の抜け漏れが大きいことが本調査サンプルの特徴である。その結果、全体として近畿以西の西日本に偏った構成になっているほか、欠損が多い地域では一部の府県の結果が地域全体の結果として過剰に代表される恐れが高い。したがって地域的特徴を分析・考察しようとする際には相当慎重に臨む必要がある。

図表 1.7 回答校の地域分布



図表 1.8 調査協力の得られた府県の地理的イメージ

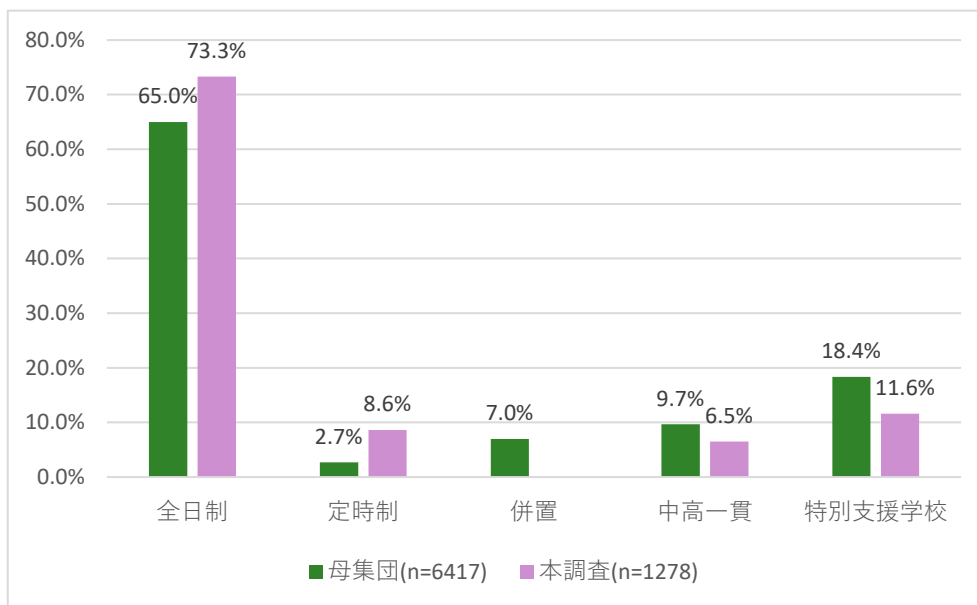


② 学校区分

母集団について先述した通り、本調査での学校区分の尋ね方は学校基本調査等の公的統計データとかなり異なっているため、学校区分の構成についてサンプルと母集団の厳密な比較はできない。しかし敢えて本調査の考え方（全日制と定時制については同じ学校であっても別サンプルとして計上する）に基づいて比較すると図表 1.9 の通りとなる。なお、図表に示した割合は 5 項目の合計を 100%とした場合の構成比ではなく、あくまでそれぞれの母数を 100%とした際の存在割合を示したものである。例えば中高一貫校のように全日制に含まれる（重複する）カテゴリが存在するため注意されたい。

グラフを一見すると、全日制と定時制では本サンプルが母集団よりも多めに、中高一貫や特別支援学校は本サンプルが母集団よりも少なめに含まれているように見受けられる。ただ、母集団において「併置」と計上されているものが本調査では全日制・定時制それぞれに二重で計上されていることから、そうした集計上の違いを加味すれば全日制・定時制の存在比率は母集団とさほど大きくかけ離れたものではないと考えて良いのではないだろうか。

図表 1.9 学校区分の構成



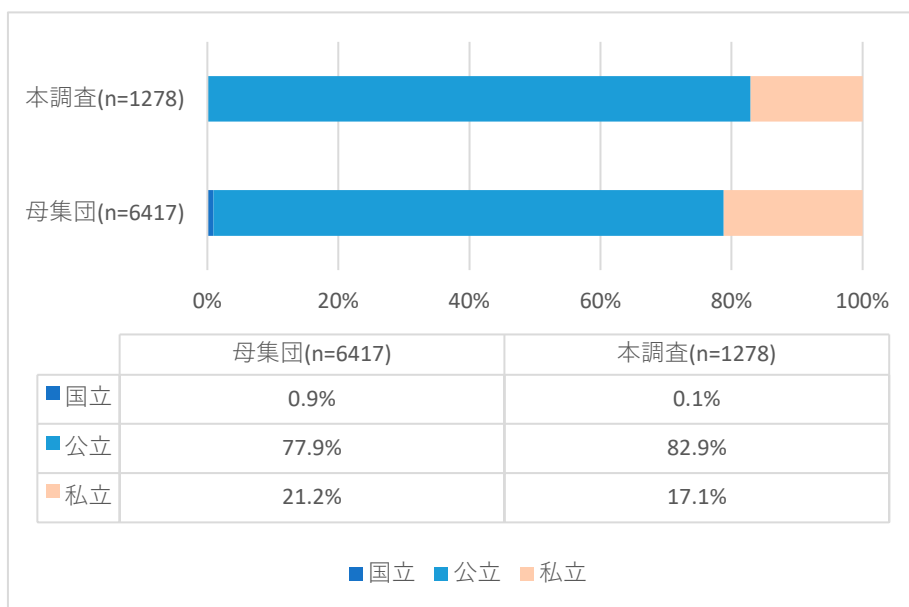
※カテゴリ重複があるため（全日制と中高一貫など）5項目の合計は100%とならない。
また全日制・定時制併置は本調査の質問項目にないため図表内では無表示となっている。

③ 設置主体

図表 1.10 では国立・公立・私立の構成比を検討した。こちらを見ると、本サンプルの公立の割合が母集団の実態と比べてやや高めであり、私立が逆に少なめであることが見て取れる。私立の場合、元々協力を得られなかった府県があったほか、協力が得られた場合でも回答率が低めにとどまってしまったため、このような結果になったと考えられる。

なお国立高校は元々の配布自体があまり行われなかったことや、結果的に回答が1校にとどまったためサンプル中で過小なカテゴリとなった。パーセンテージ表記に伴う誤読を避けるため以降のクロス集計では公立校と併せて集計し「国公立」として扱う。

図表 1.10 設置主体の構成



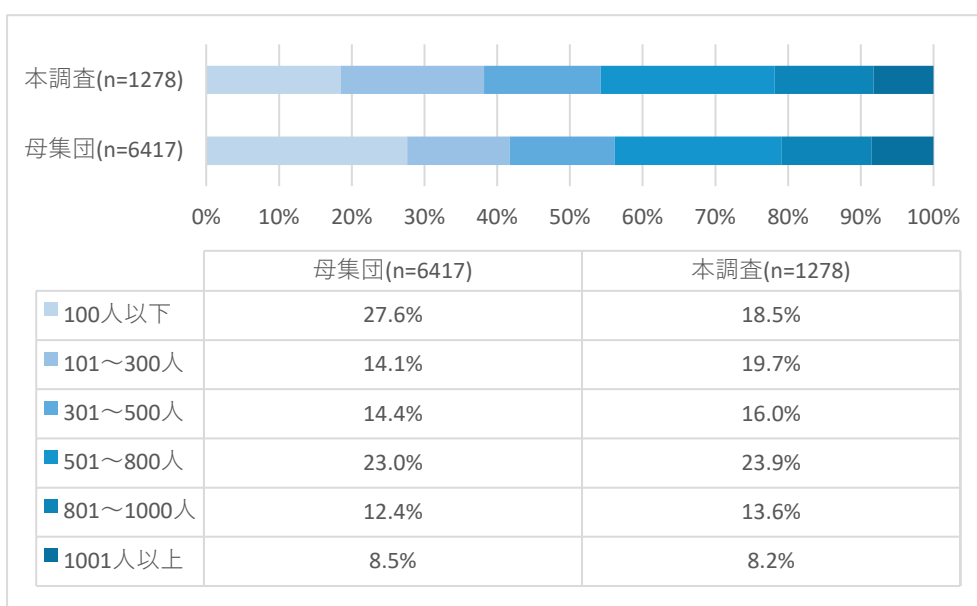
④ 生徒数

図表 1.11 の通り、学校の生徒数を 6 段階に区分して構成比を検討した。なお母集団の算出には「学校基本調査」(R5) より「高等学校生徒数別課程数」および「特別支援学校 児童・生徒数別学校数」を用いており、同統計の人数区分を用いたため、後述のクロス集計で用いた区分とは微妙に異なっている点注意されたい。

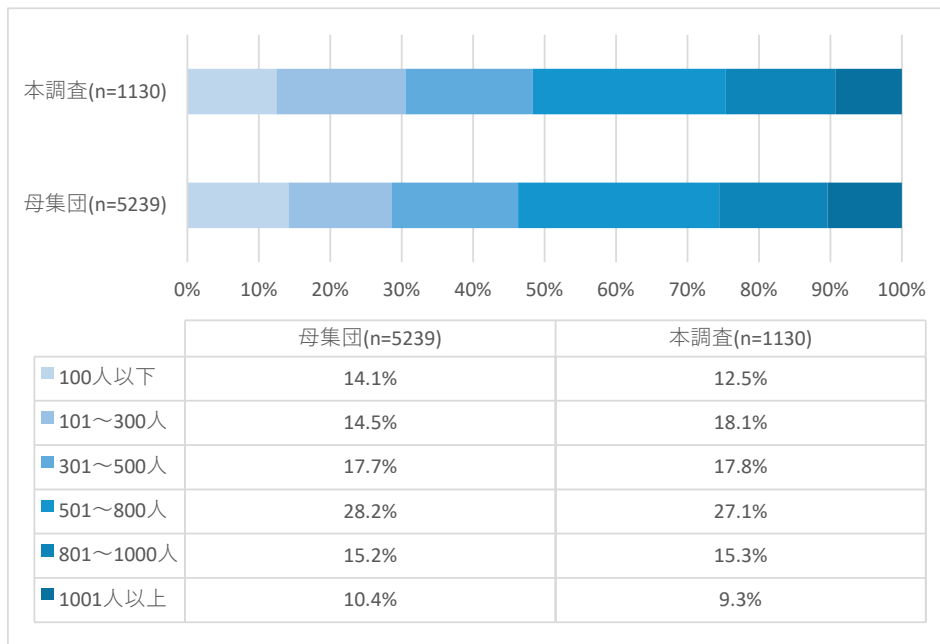
本サンプルと母集団を比較してみると、「100 人未満」および「1001 人以上」ではサンプル側の構成比が母集団側より少なめなのに対し、それ以外の中位帯の区分ではサンプル側の構成比が母集団側より少しづつ高めになっていた。ただし「100 人以下」が 27.6% となっているのは特別支援学校の全 1,178 校のうち 1,032 校がここに集中しているためである。

特別支援学校を除いた高等学校の構成比をみると図表 1.12 の通りとなる。完全には一致しないが、(文科省定義による狭義の) 高等学校に関する限り本サンプルは母集団を概ね反映した構成になっていると考えてよいだろう。

図表 1.11 生徒数の構成



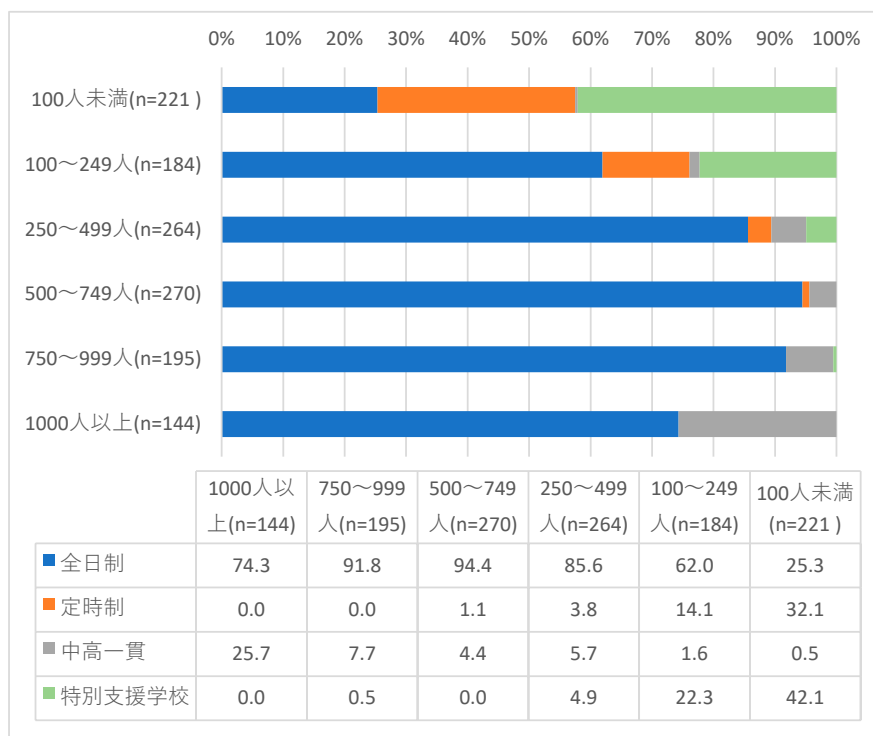
図表 1.12 生徒数の構成 (特別支援学校を除いた集計)



生徒数と学校区分・設置者の関連を検討するため、本調査のサンプルに限って生徒数の段階ごとに学校区分と設置者がどのような構成になっているかを検討した。

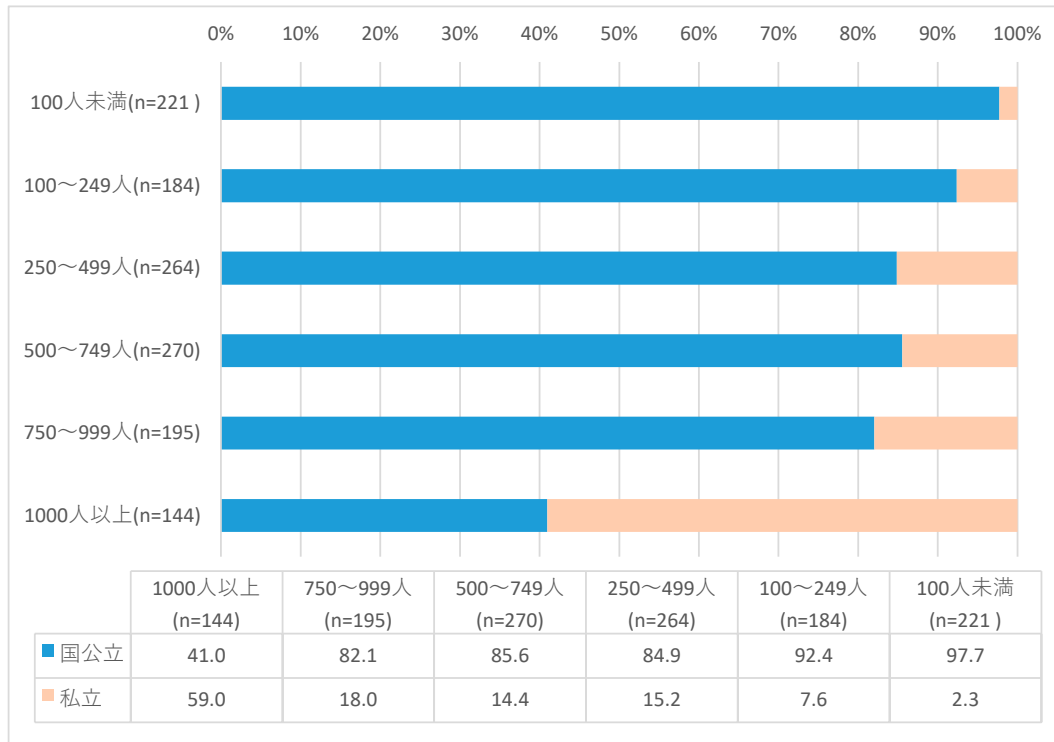
生徒数の段階ごとに学校区分の構成を見ると(図表 1.13)、100人未満のグループではそのうちの42.1%が特別支援学校であり、32.1%が定時制高校、合わせると75%近くが両カテゴリで占められていることが分かる。つまり小規模校の結果を見る場合には、その大部分が特別支援学校ないし定時制高校の傾向を反映したものとして解釈する必要があるということだ。100～249人の区分でも、100人未満ほどではないが特別支援学校及び定時制高校の反映度が高いと見るべきである。他方で1000人以上の区分になると中高一貫校の割合が25.7%まで伸びてくる。大規模校の結果を解釈する際にも注意が必要である。

図表 1.13 生徒数の段階ごとに見た学校区分



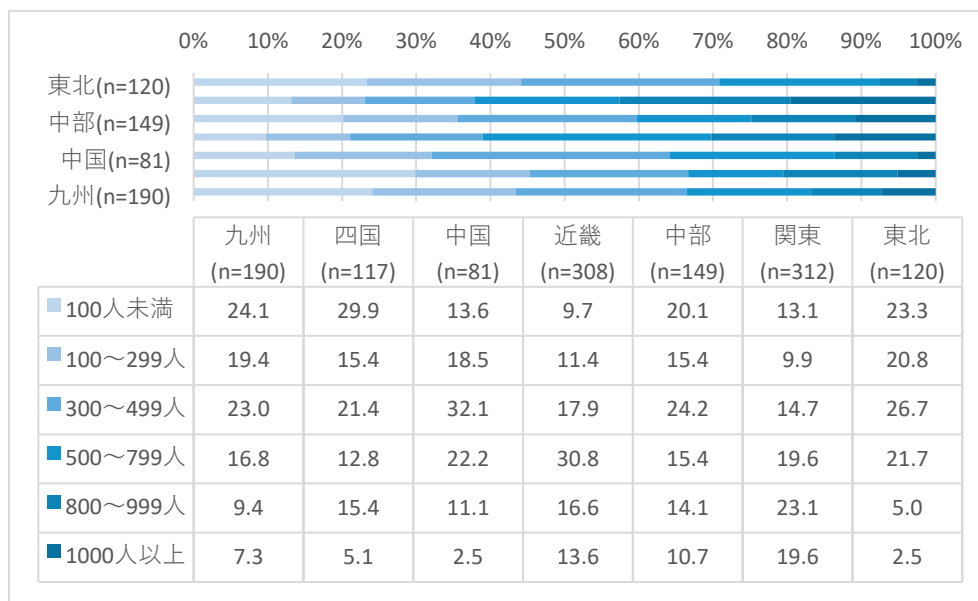
続いて図表 1.14 は生徒数の段階ごとに設置者の構成を見たものである。こちらでは生徒数が低いほど国公立校の割合が多くなっていく傾向が見られる。そして特に 1000 人以上の区分になると私立校の割合が跳ね上がり、区分中の 59.0% に達している。もちろん私立高のすべてが中高一貫校であるわけではないが、大規模学校の傾向を解釈する上では「私立&中高一貫校」というクラスターが存在することに留意する必要がある。

図表 1.13 生徒数の段階ごとに見た設置主体



最後に、地域ごとの生徒数の構成比を図表 1.15 で確認する。関東と近畿では大規模校がより多く含まれ、東北・中部・四国・九州沖縄地域では中小規模校が多く含まれる傾向が見られた。

図表 1.15 地域ごとに見た生徒数の構成



⑤本サンプルの全体的評価

本調査では芸術鑑賞会（特に演劇）が盛んな一部の県を除いた45都道府県の教育委員会等に協力を仰ぎ、約半分に当たる23府県の協力を得ることができた。しかし協力が得られた府県には地域的な偏りがあり、またそれぞれの地域において私立高校や特別支援学校への依頼が困難な場合が少なからずあった。

そこで実際の高等学校の全体像（文科省「令和5年度版学校基本調査」による）と比較対照してサンプルの偏り具合を検討したところ、地域構成では近畿以西に偏っており、各地域区分の中でも欠落の多い地域（東北、関東、中部、中国）については回答した府県の状況が過大に反映される可能性が高いことが明らかとなった。

本サンプルは無作為抽出ではなく、上記の通り母集団の実態からみて偏った点があることから、本サンプルは日本全国を代表するサンプルとみなすことは困難であり、あくまでサンプルが得られた地域および学校区分における結果として解釈する必要がある。

しかし敢えて弁護できる点があるとすれば、無作為抽出でないとは言え、配布票数に対して60%を上回る比較的良好な回収率を上げており、一部の県では90%を超える回収率もマークしている。また地域的偏りがあるとはいえ、大都市やその近郊地域（埼玉、神奈川、兵庫など）から中四国などの人口の少ない地域に至るまで各地をカバーして、地域的偏りを比較的軽減できた。そしてまた定時制高校や特別支援学校など、公的統計を別とすれば各種社会調査から漏れがちな学校区分についても一定の票数を得られたことなど、評価できる点も多いと考えられる。そもそも学校調査自体が困難な昨今の状況において、教育委員会、実施校のそれぞれにおいて多大なご協力をいただけたこと自体が稀有な事であり、本調査データはその得難さにおいて（調査方法の厳密さは不十分であるとしても）貴重なものと言ってよいのではないだろうか。

第2章
「高校生のための巡回公演」
鑑賞者アンケート
集計・分析結果

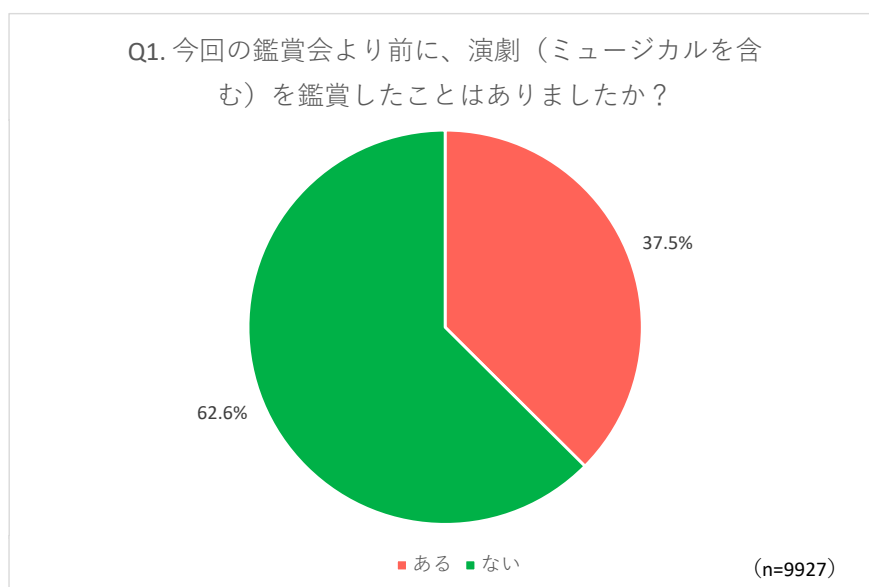
第1章の調査概要で紹介した通り、本鑑賞者アンケートは実際に巡回公演を鑑賞した生徒に対して鑑賞後に尋ねたものである。回答負荷を軽減するため質問は5問に絞り、率直な回答を促せるよう回答者の個人的属性（性別、年齢、居住地等）に関する質問は盛り込まなかった。

このため鑑賞者アンケートについて可能な分析には限りがあるが、最後の自由回答を除く4つの設問の集計結果を紹介しつつ、事前の演劇鑑賞経験の有無によって鑑賞作品への満足度や（家族・友人への）推奨度がどのように異なるかの観点から分析を試みる。

1. 巡回公演鑑賞前における演劇鑑賞経験の有無

質問紙のQ1として、今年度の巡回公演鑑賞以前に演劇（ミュージカルを含む）を見たことがあるかを尋ねた。結果は図表2.1の通りであり、鑑賞経験のある生徒が全体の37.5%、ない生徒が62.6%となった。

図表2.1 巡回公演鑑賞前における演劇鑑賞経験の有無



※ n数が有効票数に満たないのは回答に欠損があるため

この結果をそのまま受け止めるとすれば、鑑賞者生徒の6割強が保育園・幼稚園や小学校、中学校など高校進学までの間に演劇に触れる機会がなかったということになる。「それはいくら何でも実態と違いすぎるのではないか」と思われる面もあろうが、劇団協が平成15年度（2003年度）に行った小・中・高校比較調査では、「舞台芸術鑑賞教室」（※演劇以外を含む）の実施率について、小学校75.8%、中学校53.6%、高校（全日制）84.1%という結果が残されている。また、日本児童・青少年演劇劇団協同組合（児演協）が実施した「2022年度全国小学校舞台芸術鑑賞会実施状況調査」によると、小学校での舞台芸術鑑賞会実施率は2021年度で38.2%（そのうち演劇の実施率※1は55.9%）、2022年度で55.2%（うち演劇57.2%）、2023年度（予定）で47.2%（うち演劇45.2%）といった結果も見られる。つまり、元々小中学校での舞台芸術鑑賞会の実施率はそれほど高いわけではなく※2、むしろ大学以前の教育課程では高校が最後かつ最大の機会になっているということである。したがって、Q1のように高校まで演劇鑑賞経験がなかったという生徒が多いのもあながちおかしい結果ではない。また見方を変えれば、この巡回公演が行われなかった場合、本格的な演劇に触れることの無いまま社会に出てしまう青少年が少なからずいた可能性もあり、改めて高校での舞台芸術鑑賞教室の重要性を示す結果とも考えられよう。

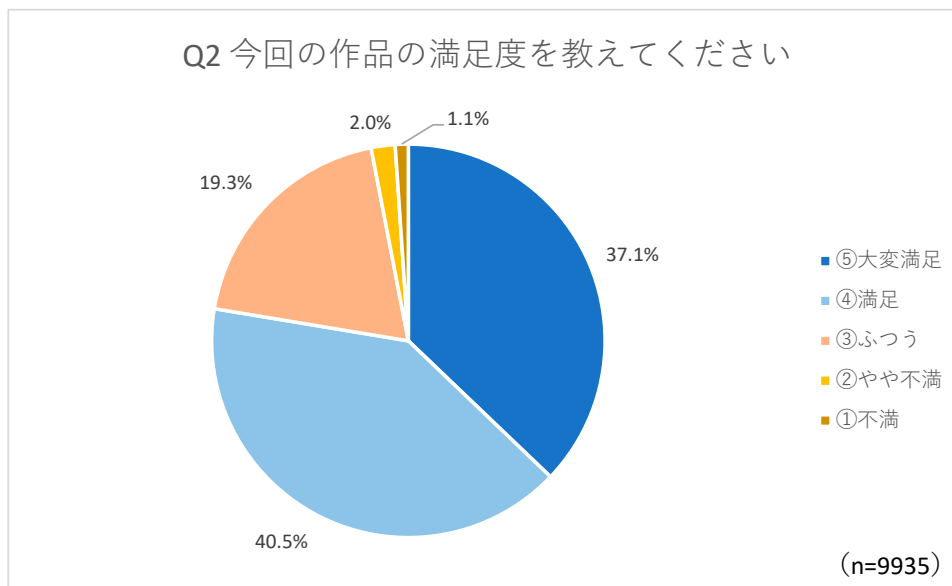
※1 演劇の実施率は、元資料では21年度51.7%、22年度52.1%、23年度42.0%と記載されているが、母数を「芸術鑑賞会を実施している学校」として独自に集計し直したところ本文中の数値となった。

※2 ただし児演協の調査結果はコロナ禍による中止の影響が表れている可能性がある。

2. 鑑賞作品への満足度

Q2では各生徒が鑑賞した巡回公演の演目について、5段階評価で満足度を尋ねた。結果は図表2.2の通りで、「不満」「やや不満」は合わせても3.1%にとどまり、逆に合計で8割近くの回答者が「満足」「大変満足」と回答した。

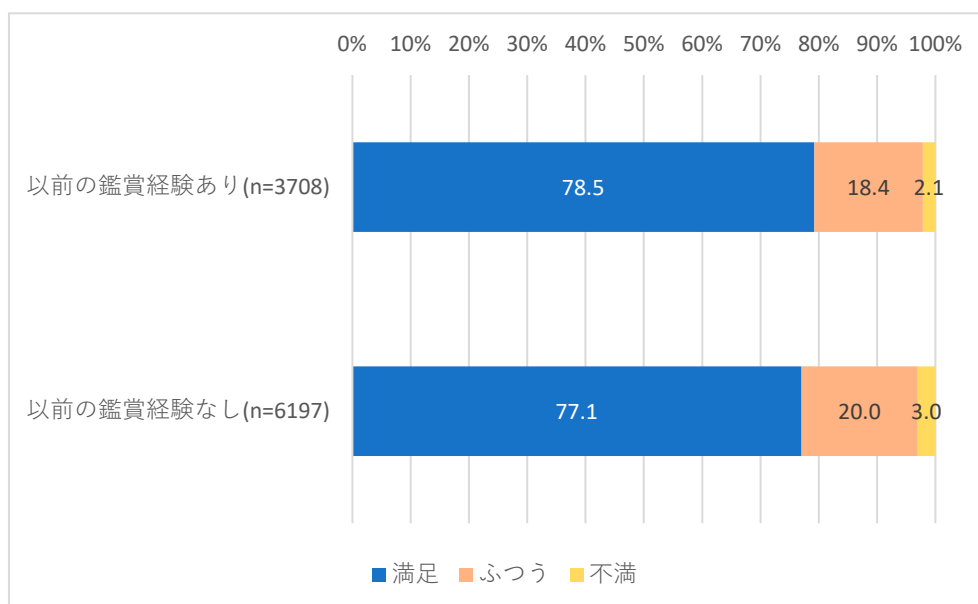
図表 2.2 鑑賞作品への満足度



※ n数が有効票数に満たないのは回答に欠損があるため

これについて、巡回公演以前の鑑賞経験の有無による違いがあるか比較を試みた結果が図表2.3である。鑑賞経験がない生徒ほど未知の体験によって満足度が（鑑賞経験がある生徒より）高まるのではないかという仮説であったが、結果的には数値上顕著な違いは見られず、どちらかと言えば「鑑賞経験あり」の生徒の満足度の方がわずかに高かった。

図表 2.3 鑑賞作品への満足度 ※鑑賞経験の有無による比較

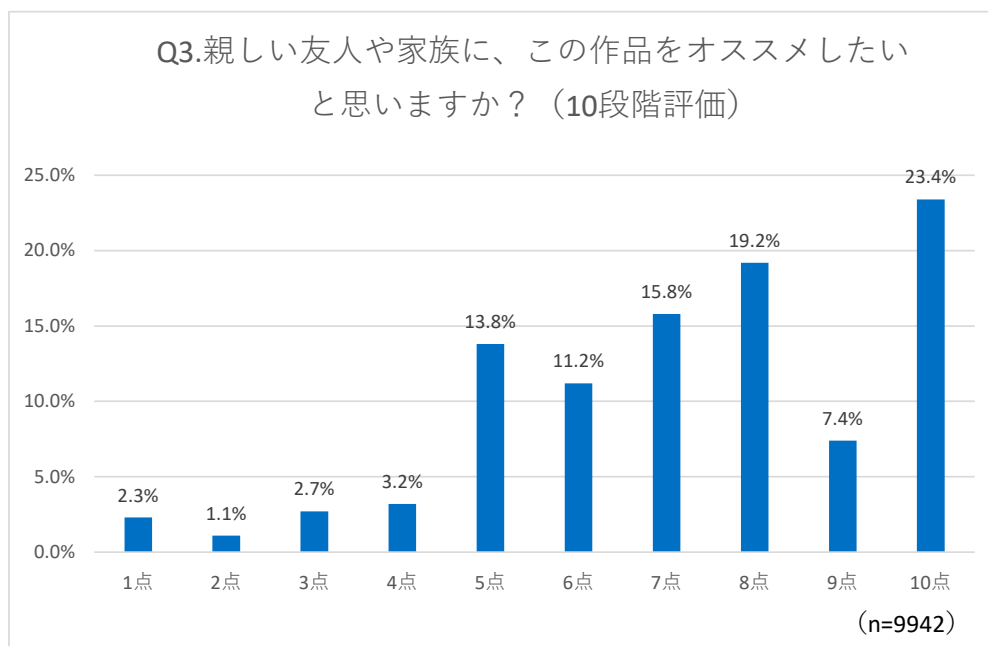


※ n数が有効票数に満たないのは回答に欠損があるため

3. 鑑賞作品の家族・友人への推奨度

Q3では今回鑑賞した作品について、親しい友人や家族にどの程度推奨するか1点から10点の間で尋ねた。結果は図表2.4の通りで、7点以上は全体の65.8%に及んだ。全体として本格的な演劇の良さがしっかり評価された結果とみてよいだろう。

図表 2.4 鑑賞作品の家族・友人への推奨度



※ n 数が有効票数に満たないのは回答に欠損があるため

これについても鑑賞経験の有無による比較を行ったところ、以前の鑑賞経験ありの場合は平均 7.34 点(n=3713)、以前の鑑賞経験なしの場合は平均 7.21 点で、Q2 の場合と同じく鑑賞経験ありの生徒の方が推奨度がやや高かった。ちなみに全体の平均点は 7.26 点 (n=9942) である。

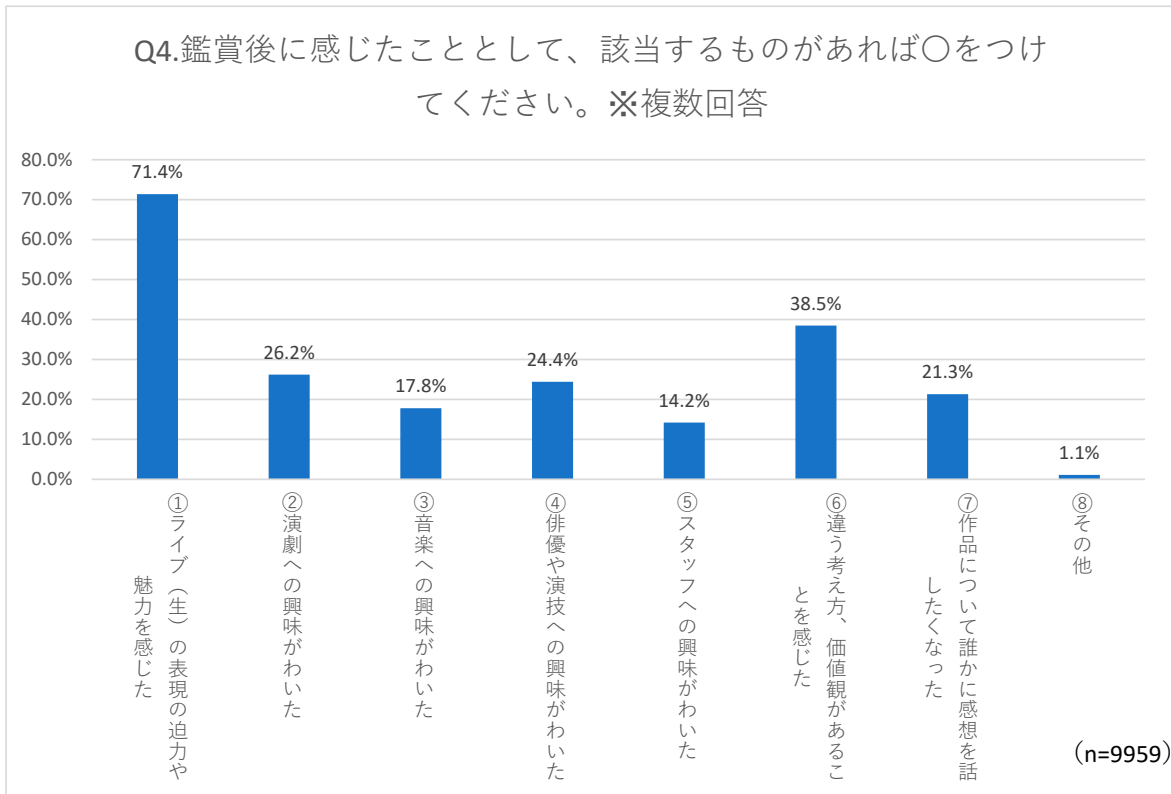
4. 鑑賞後に感じたこと（複数回答）

Q4では鑑賞後に感じたことを複数回答8項目で尋ねた。最も該当率が高かったのは「①ライブ（生）の表現の迫力や魅力を感じた」（71.4%）であり、これは本格的な演劇体験が生徒の心に感動を与える力を持っていたことに加え、7団体・7演目のいずれにもあてはまる点であるだけに回答が集まりやすかったと考えられる。

次に回答が集まったのは「⑥違う考え方、価値観があることを感じた」（38.5%）である。これもすべての演目で感じ取れる事柄ではあるが、性的少数者などマイノリティを主要なテーマとした演目において特に回答が集まりやすかったことも考えられる。

興味深いのは上演内容に関する回答だけではなく、「②演劇への興味がわいた」（26.2%）、「④俳優や演技への興味がわいた」（24.4%）、「③音楽への興味がわいた」（17.8%）、「⑤スタッフへの興味がわいた」（14.2%）など、演劇というジャンルそのものやその担い手の人々に注目して鑑賞した生徒が少なからずいたことである。この作品との出会いそのものは偶然だったかもしれないが、単に「この話が面白かった」といった一過性の感想にとどまらず演劇の面白さやその担い手への関心が刺激されたとするなら、将来の演劇鑑賞の裾野を広げていく上でも一定の効果が期待できるのではないだろうか。

図表 2.5 鑑賞後に感じたこと (複数回答)



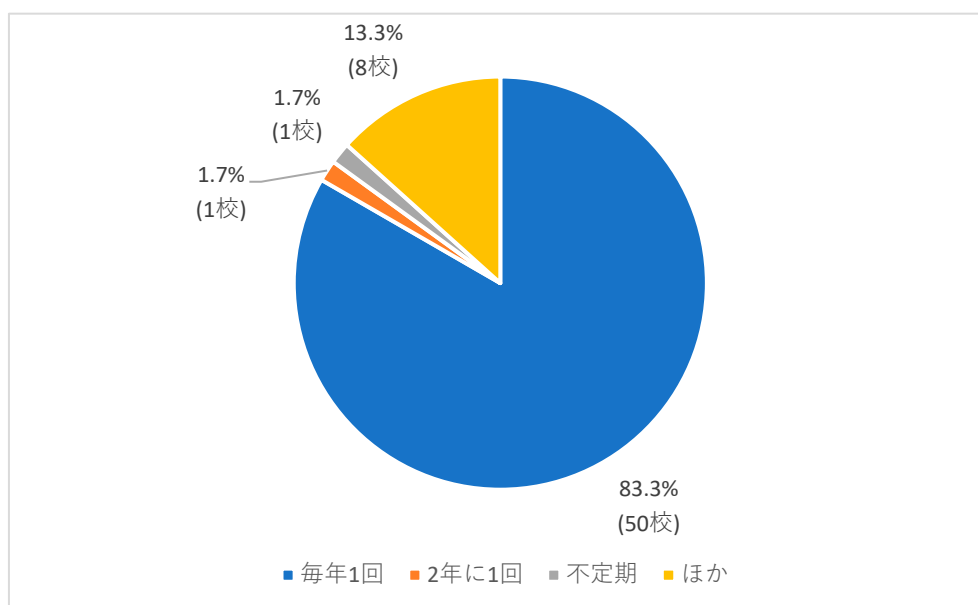
第3章
「高校生のための巡回公演」
実施校アンケート
集計・分析結果

本アンケートは「高校生のための巡回公演」実施校に対してアンケートを行うことにより、状況把握ならびに課題抽出を行う目的で実施されたものである。概要は第1章で示した通りだが、劇団7団体によって公演を実施した69校のうち60校から回答を得ることができた。回答数が少ないため、劇団ごとあるいは地域ごとに集計しても信頼できる比較結果を得ることが困難であることから、本章では各質問の全体集計を示し、そこから読み取れる限りの知見を提示するにとどめたい。

1. 芸術鑑賞会の開催頻度

「Q1 貴校における芸術鑑賞会の開催頻度を教えてください。(※文化祭等の発表会を除く)」の回答結果が図表 3.1 である。60校中50校が「毎年1回」に回答しているが、うち1校は「基本的に年1回ですが、新型コロナウイルス感染症のため中止となる期間がありました。」との回答を寄せていた。「ほか」の中には「3年に1回」が7件、「3年に1～2回」が1件含まれていた。

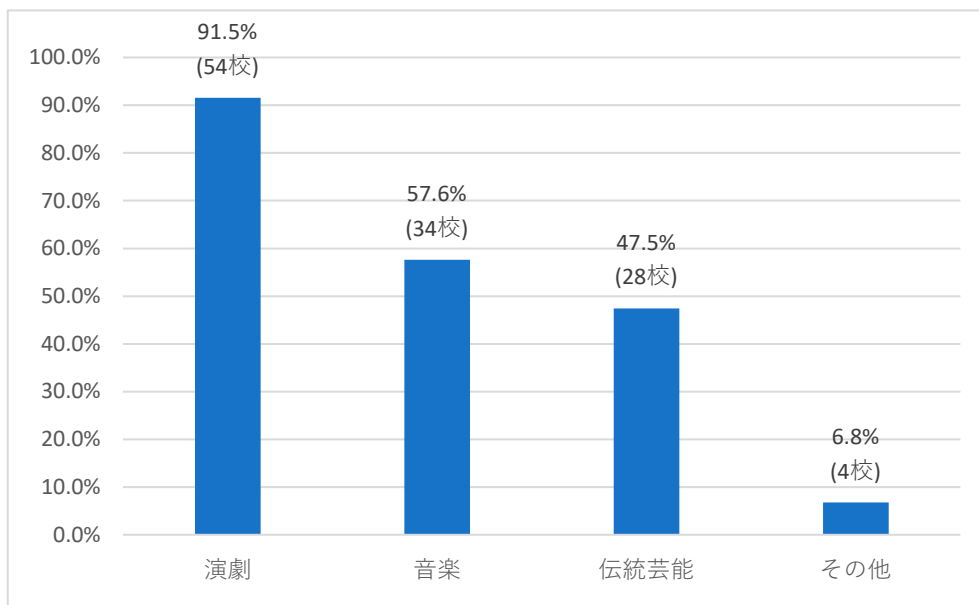
図表 3.1 芸術鑑賞会の開催頻度 (n=60)



2. 芸術鑑賞会のジャンル

「Q2 芸術鑑賞会として、近年(直近5年程度)実施されたジャンルを教えてください。」との質問項目で複数回答により尋ねた結果を図表 3.2 に示す。該当率は演劇が91.5%(54校)で最も高く、音楽(57.6%、34校)、伝統芸能(47.5%、28校)と続いた。「その他」(6.8%、4校)にはオペラ、バレエ、ミュージカル、マジックなどが各1件ずつ含まれていた。演劇の該当率が100%とならなかったのは今年度の演劇公演について計上しなかった学校があったためと考えられる(より正確に言えば、アンケート対象となった今年度の演劇公演を回答に含めるべきかどうかの教示自体が質問文中でなされていない)が、回答したジャンルの中に演劇が含まれなかった学校の割合は回答校中の10.2%(6校)であった。なお、他のジャンルの実施率が演劇に比べて低いのは、今回の演劇巡回公演を行った学校だけがこのアンケートに回答しているためと考えられ、全国的な傾向と必ずしも一致するとは限らない。

図表 3.2 直近5年程度の芸術鑑賞会のジャンル (n=59) ※複数回答

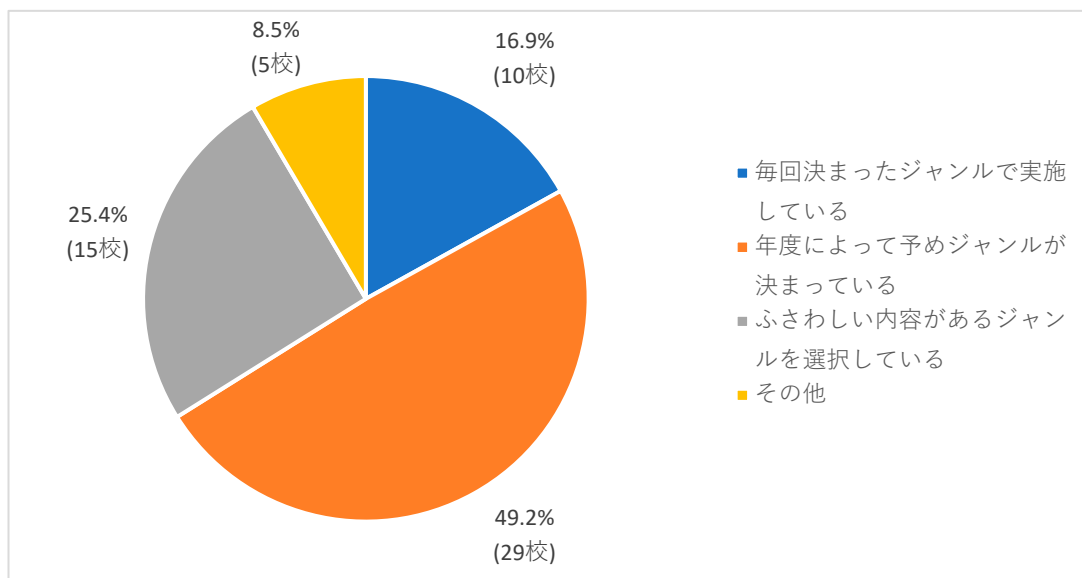


※回答なしが1件

ジャンルに関連して、その選択方法について尋ねたところ、「年度によって予めジャンルが決まっている」が全体の49.2% (29校) で最多であり、「ふさわしい内容があるジャンルを選択している」(25.4%、15校)、「毎回決まったジャンルで実施している」(16.9%、10校)と続いた。「その他」の自由回答の中には、「演劇・音楽・伝統芸能を順番に実施」というものもあり、これは(集計では別個に計上したが)「年度によって予めジャンルが決まっている」の1つの形を示している可能性もある。他の自由回答では「候補をいくつか挙げて、その後職員間の投票にかけて決定している。」「地域内の学校で決定する※」といったものもあった。

※実際の回答では具体的な地域名に言及されていたが、回答校の特定を避けるため記載を改めた。

図表 3.3 ジャンルの選択方法 (n=59)



※回答なしが1件

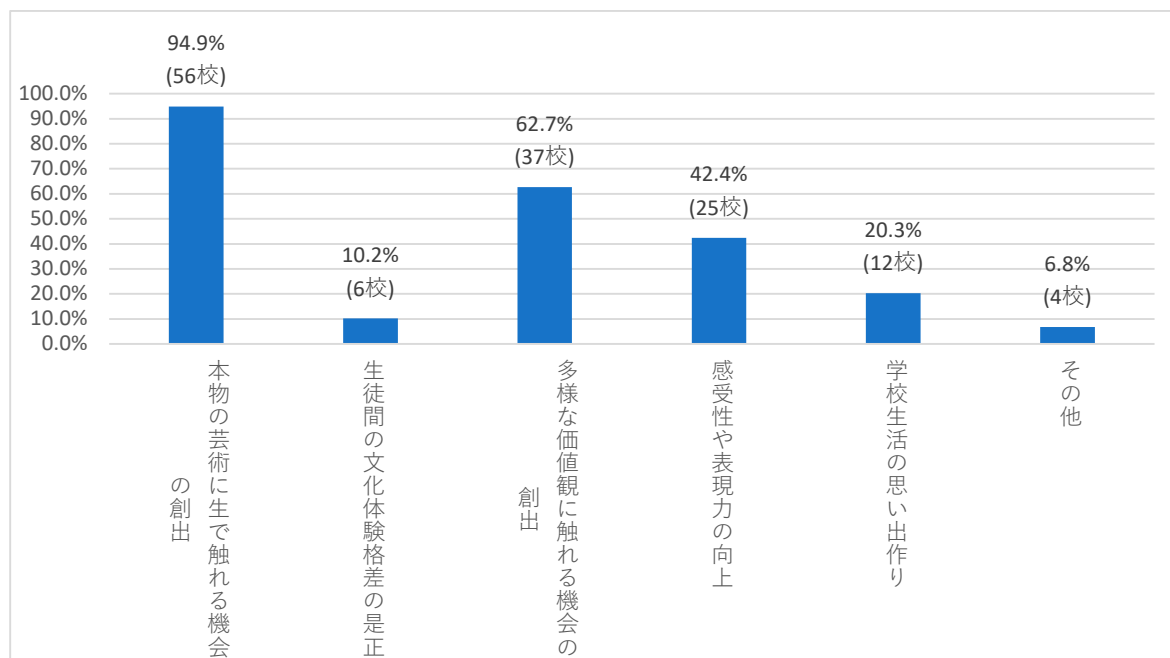
3. 芸術鑑賞会において重視していること

「Q4 芸術鑑賞会の実施意義として、重視されていることを教えてください。」との質問項目で複数回答により尋ねた結果が図表 3.4 である。「本物の芸術に生で触れる機会の創出」(94.4%、56校)が最多項目で、「多様な価値観に触れる機会の創出」(62.7%、37校)、「感受性や表現力の向上」(42.4%、25校)などと続いた。

興味深いのは「生徒間の文化体験格差の是正」(10.2%、6校)の該当率の低さである。今回の実施校では60校中50校が毎年1回は芸術鑑賞会を実施し、不定期はわずか1校にとどまっている。芸術鑑賞会の機会はどの学年にもいきわたっていることから、格差是正の観点は(元々ある程度均等な機会創出が達成されたものとして)比較的希薄になったものと考えられる。

「その他」の回答では、「人権教育」が2件あげられ、人権教育の一環として芸術鑑賞会が組まれている実態も見えた。他には「芸術鑑賞におけるマナーやTPOの学習」「文化祭での演劇のため」といった回答があった(各1件)。

図表 3.4 芸術鑑賞会の実施意義 (n=59) ※複数回答



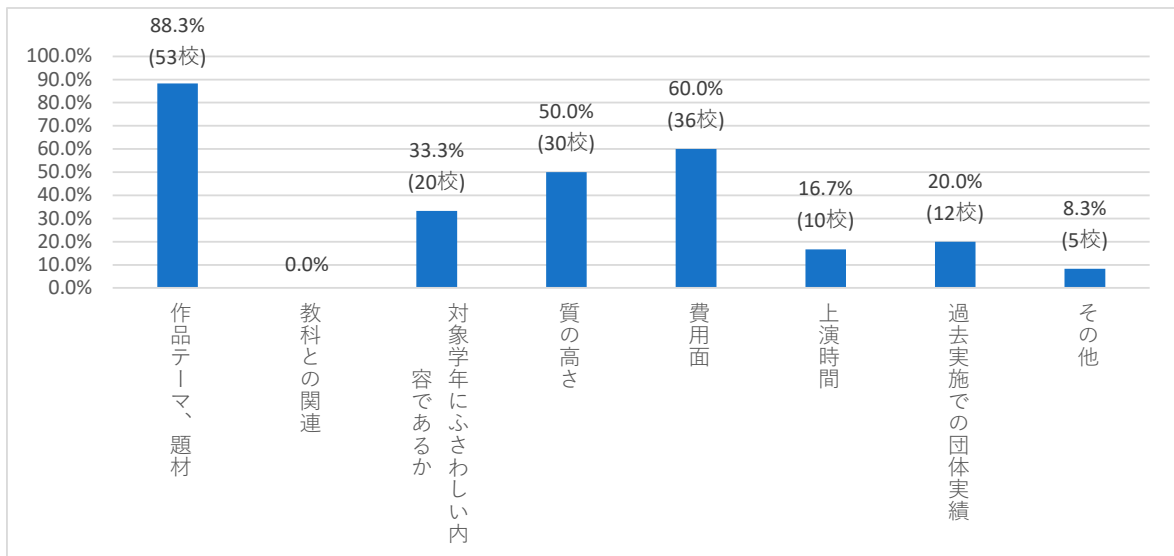
※回答なしが1件

次に「Q5 演劇の芸術鑑賞会を実施される際、作品選定において重視されていることを教えてください。」との質問で複数回答により尋ねた結果を示す(図表 3.5)。「作品テーマ、題材」が88.3%(53校)で最も多く、「その他」自由回答の中にも「生徒の興味をひく内容であるか(楽しかったと思えるもの)」、「作品の面白さ、教育的配慮など」など、同様の意味を表す回答が見られた。「対象学年にふさわしい内容であるか」(33.3%、20校)や「質の高さ」(50.0%、30校)とも重複するが、作品のテーマ、題材および内容が最も重視されている点であることが示されている。

これに対し、2番目に該当が多かったのは「費用面」(60.0%、36校)であることも見逃せない。題材や内容が最も重要でありつつも、やはり予算の制約は避けられないため、考慮の際の優先順位としてどうしても高くなってしまいがちであることがあらわれている。

既に述べた以外の自由回答としては「人権的観点」、「できるだけ下見をして選定するようにしている」、「生徒アンケートの結果」といったものが見られた(各1件)。

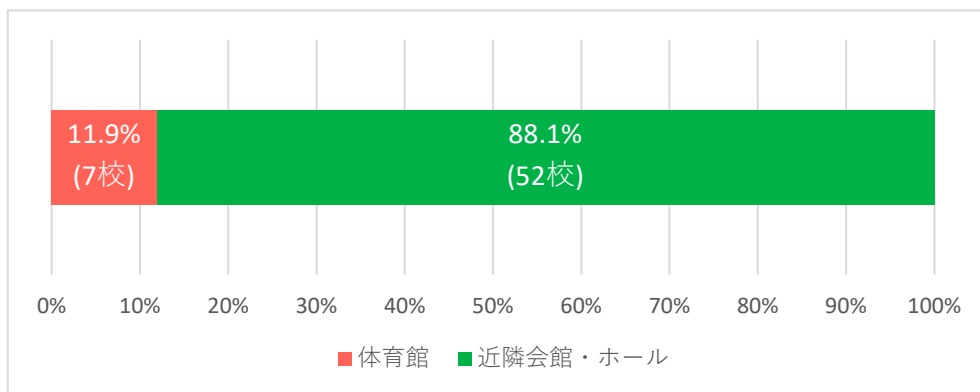
図表 3.5 演劇作品選定において重視している点 (n=60) ※複数回答



4. 演劇の芸術鑑賞会において希望する実施会場

「Q6 演劇の芸術鑑賞会を実施される際、どちらの会場を希望されますか。理由とともに教えてください。」と尋ねたところ、大多数の52校が「近隣会館・ホール」を希望するとの回答であった。

図表 3.6 演劇の芸術鑑賞会において希望する実施会場 (n=59)



※回答なしが1件

近隣会館・ホールを希望する理由としては、「本格的な設備、空間の中で鑑賞する必要があるから」、「本物に触れる実感が増し、生徒たちの感動体験につながる」、「生徒が落ち着いた環境の中で観ることができるから」「ステージや音響設備が整っており、本物を見せるには良い場所である」、「座席がある、空調設備が整って、舞台がある」など、設備的・環境的利点が多数挙げられた(31件)。要約すると、専用の会場の方が演出用の設備・機材が整っているほか、座席・音響・空調などの面で最適な視聴覚体験ができる。それによって生徒に質の高い本格的な演劇体験を提供することにもつながるとのことである。関連して「ホールで聴く・観るという経験」、「ホールでのマナーや雰囲気を感じてもらうため」など、単に演劇の鑑賞というだけでなく公共ホールでのマナーなどある種の社会教育的な観点も挙げられていた。

また上記の裏返しとして、体育館など自校の設備が本格的な演劇鑑賞に不適であることを理由に挙げる学校も見られた(7件)。具体的には「本校の体育館が狭いため」、「全校生徒が一度に入るため。本校体育館には入らない」など、設備的な観点というよりは収容人数の面で難点があるとの認識が多かった。また関連して、「体育館だ

と体育の授業や部活動等に影響が出てしまうため」、「当校の体育館が演劇に向かない。授業や部活で体育館はフルに使用する」など、学校行事や部活動への支障を避けるためとの回答（3件）、「7月実施なので暑さ対策」（1件）といった回答も見られた。

これらの他には、「近隣に適当なホールがある」、「〇〇市には〇〇〇（※会館名）があるので、利用したい」など、近隣に利用に適したホールがあるためとする回答（3件）、「近隣の学校との共同鑑賞なので」、「例年市民会館で実施しているから」、「他校と合同実施のため」、「〇〇市との共催のため」など共同開催など慣例化していることを挙げる回答（5件）などが見られた。

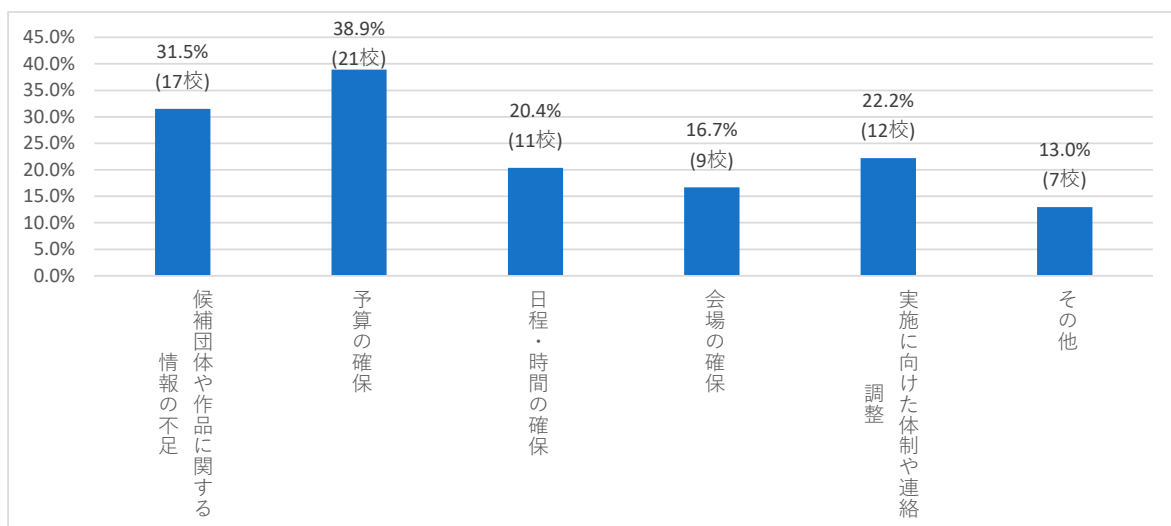
逆に体育館を希望する声としては、「近隣に大きなホールがない」など近隣の会館・ホールの不在をあげたのが3校、「他の施設への生徒の移動方法がない」、「（自校の体育館であれば）生徒の移動がないから」など移動の便をあげたのが3校あり、1校は理由について無回答であった。

5. 芸術鑑賞会実施にあたっての困りごと

「Q7 実施にあたり、お困りのことがあれば教えてください。」の質問文で複数回答により尋ねた結果が図表 3.7 である。最多の項目は「予算の確保」（38.9%、21校）であり、Q5（図表 3.5）でも示された通り、予算上の制約が各校の悩みの種であることが分かる。続いては「候補団体や作品に関する情報の不足」（31.5%、17校）で、「その他」自由回答にも「田舎なので事前に見に行くのが困難」、「多くの実施団体があり、営業 PR も多く選別が大変」など、これと関連するような回答も見られた。3 番目が「実施に向けた体制や連絡調整」（22.2%、12校）であった。

基本的には予算の確保が最大のネックであるのだが、候補団体の選定や実施上・支払い上の事務連絡・手続きなど、実施団体の選定や決まった後の調整にも少なくない学校が苦慮していることがうかがわれる。

図表 3.7 芸術鑑賞会実施にあたっての困りごと (n=54) ※複数回答



※回答なしが1件

6. 鑑賞による生徒の変化

「Q8 芸術鑑賞会の実施後、生徒さんについて感じられた変化があれば、教えてください。」と複数回答で尋ねた結果、図表 3.8 の通りとなった。

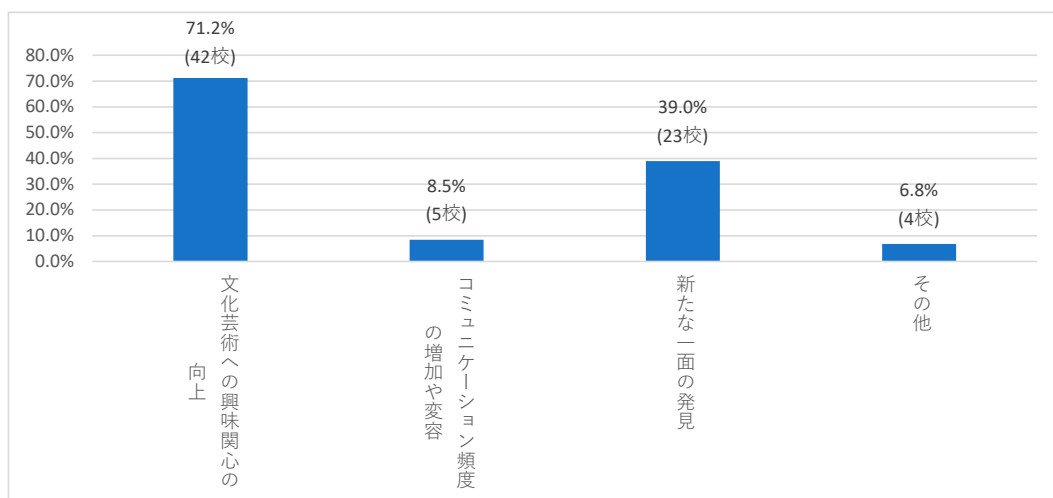
最多は「文化芸術への興味関心の向上」（71.2%、42校）である。これは第2章で鑑賞者が感じたこととして「②演劇への興味がわいた」（回答者 9,959人中 26.2%）、「④俳優や演技への興味がわいた」（同 24.4%）、「③音楽

への興味がわいた」(同 17.8%)、「⑤スタッフへの興味がわいた」(同 14.2%)などを挙げた点とも一致する(第2章の図表 2.5 を参照)。鑑賞によって演劇というジャンルや演者・スタッフなどの担い手に対する関心が高まったことが教員の側でもある程度見て取れたのではないと思われる。

次に多かった「新たな一面の発見」(39.0%、23校)の具体的な意味合いは選択肢の文言が曖昧であるため判然としないが、敢えて生徒側の表情・態度などに見える考え方や感情の変化と捉えてみるとするなら、それまで芸術的なことに関心がなかった(ように見えていただけなのか実際にそうだったのかは判然としないが)生徒の新たな一面の発見と感じられたとも考えられる。

ちなみに「その他」の自由回答では、「生徒は真剣に鑑賞していたので、心に響くものがあったと思われる」、「多様性を認める方向・態度の推進」、「作品を正しく解釈できる素直な感性がある」など、総じて生徒のポジティブな変化を感じ取っている様子が見られた。

図表 3.8 芸術鑑賞会の実施後、生徒に見られた変化 (n=59) ※複数回答



※回答なしが1件

7. 芸術鑑賞会に対する意見・要望

最後に自由回答として芸術鑑賞会の実施に関する意見・要望を尋ね、全体としては60校中29校から回答があった。このうち、単純な感謝のメッセージや「特にありません」などの回答を除いた19件について内容を見てみよう。

まず費用負担との関連で本巡回公演を評価する声が見られた(3件)。具体的には「今回、会館使用料を劇団協議会の方で負担していただき助かった。劇団の担当者の方は、こちらの要望等に柔軟に対応していただいた」といったものである。

次に公演の内容や当日の実施状況に対する評価の声も上がっている(4件)。例えば「演劇は質・内容ともに高く、とても良かったです。また、演劇後のバラシ体験とキャストとの交流も大変良かったです」、「他校の教員にも、機会があれば作品紹介をしていきたいと思っています」といった回答が見られた。

しかしその一方、候補作品に関する情報提供のあり方に関しては学校側から多くの要望が提起されていた(5件)。「学校にたくさんのパンフレットや冊子がいろいろなところから届きます。少しもったいないと思うのでHPや何かしら別の方法でわかりやすく宣伝ができるといいと思います。また、カテゴリー(テーマ等)別にまとめてあると助かります。(選ぶのに)」、「さまざまな公演団体から、個別に営業のお電話をいただいたり、チラシ等をいただいたりしているが、全てに対応し目を通すのは難しい。総花的に公演団体を知ることができるような資料等があればありがたい。(難しいとは思いますが…)」といった声である。劇団が個々別々に情報提供を行うこと、それ自体は前向きな普及活動ではあるのだが、学校側としては情報が煩雑になり、却ってその整理が負担になってしまっている様子が見られた。

第4章
**「学校における芸術鑑賞会
に関するアンケート」
集計・分析結果**

本章では「学校における芸術鑑賞会に関するアンケート」について、①学校区分（全日制、定時制、中高一貫校、特別支援学校の4カテゴリ）、②学校の設置者（国立、公立、私立の3カテゴリ）、③生徒数（100人未満、100～249人、250～499人、500～749人、750人～999人、1000人以上の6カテゴリ）、④地域（東北、関東、中部、近畿、中国、四国、九州の7カテゴリ）の4つの比較の視点から、芸術鑑賞会の実施にあたって学校の種類や所在地によって格差や脆弱性が生じていないかを検討することを主眼とする。

第1章でも述べたことだが、本調査では結果的に都道府県の教育委員会で協力の得られた地域および学校区分に対する調査となったため、サンプルの地域構成には無視できない偏りが生じている。従って地域区分を表記する際には具体的にどの府県が含まれているかを明示しているので、図表の数値を見る際には留意していただければ幸いである。

また、回答対象者を限定した質問が多数あり、それに対してクロス集計をかけると必然的に回答母数が過少になるカテゴリが生じてしまっている（例えば地域区分での中四国地方など）。比較の便宜上そうした母数過少なカテゴリもパーセンテージ表記をしていることがあるが、これもやはり誤読されないよう、図表に併記した集計母数（n数）に留意しながらお読みいただければ幸いである。

1. 芸術鑑賞会（演劇以外を含む）の実施状況

「Q1. 貴校では芸術鑑賞会を行っていらっしゃいますか」（全員回答）に対する回答を全体、学校区分、設置者、生徒数、地域の別に集計したものが図表 4.1 である。全体では 68.2% が実施となっているが、学校区分では「定時制」「特別支援学校」の実施率が低めとなっており、生徒数で見ても小規模校ほど実施率が低下する傾向が明瞭である。また地域的には中四国の実施率が他の地域の半分程度となっていた。

図表 4.1 芸術鑑賞会（演劇以外を含む）の実施有無

	n数	行っている	行っていない
全体	1278	68.2	31.9
学校区分			
高校：全日制	937	70.4	29.6
高校：定時制	110	50.0	50.0
中高一貫校	83	81.9	18.1
特別支援学校	148	59.5	40.5
設置者			
国公立	1060	66.2	33.8
私立	218	77.5	22.5
生徒数			
100人未満	221	51.1	48.9
100人以上～250人未満	184	63.0	37.0
250人以上～500人未満	264	71.2	28.8
500人以上～750人未満	270	75.6	24.4
750人以上～1000人未満	195	67.7	32.3
1000人以上	144	81.9	18.1
地域			
東北 ※岩手,福島	120	85.0	15.0
関東 ※群馬,埼玉,神奈川	312	71.2	28.9
中部 ※石川,岐阜	149	79.9	20.1
近畿 ※滋賀,京都,兵庫,奈良,和歌山	308	73.7	26.3
中国 ※鳥取,山口	81	35.8	64.2
四国 ※徳島,香川,愛媛,高知	117	34.2	65.8
九州 ※長崎,熊本,大分,宮崎,鹿児島	191	69.1	30.9

※n数以外の数値はすべて%

芸術鑑賞会（演劇以外を含む）を実施していない学校（1278校中の407校）に対して、「Q1-SQ1.芸術鑑賞会を行っていらっしゃる理由をお知らせください。（〇はいくつでも）」と尋ねた結果を図表4.2に示した。複数回答であるため、各カテゴリの該当率の合算が100%にならない点に注意されたい。

全体では「1.もともと学校の計画にない」（61.4%）、「2.費用負担が大きい」（45.7%）、「6.芸術鑑賞会のための時間を割きにくい」（28.3%）などが上位となっていた。

このうち「費用負担」についての比較結果を見ると、定時制高校で全体より突出して高い該当率になっているほか、小規模校ほど該当率が高くなる傾向が明瞭であった。小規模校ほど芸術鑑賞会の実施にあたって費用負担が重荷になっている状況がうかがわれる。

一方、「時間を割きにくい」については、中高一貫校や私立校、そして大規模校ほど該当率が高い傾向があった。これらの属性は概ね共通したクラスターを形成している可能性が高いと思われ、そうした学校では費用負担のような問題は少ない反面、私立校に見られる独自の教育方針や学力重視の姿勢から、芸術鑑賞会をカリキュラムに組み込むのが困難な状況にあると推察される。ここから見えてくるのは、芸術鑑賞会実施の阻害要因が学校の特徴によって異なっていることであり、それぞれのニーズに合わせた施策を行う必要性である。具体的には、定時制高校や小規模校などには費用面での負担軽減策が有効であり、私立校や大規模校にはカリキュラムに組み込みやすい公演形態や演目を提案していくことがより有効であろうということだ。

近年の出来事として注目されるコロナ禍の影響だが、全体では「9.コロナの影響で中止した」が14.0%であり、トップ3と比べるとやや低い値だが、10項目中で4位とまずまず高い該当率を示している。学校区分では定時制高校が1.8%とかなり低い数値だが、定時制高校の場合は「もともと学校の計画にない」や「費用負担が大きい」といった理由が大きく、コロナ禍にかかわらず実施困難であったためと推察される。これ以外にも、生徒数との関連で大規模校ほど該当率が高い傾向が見受けられた。

図表4.2 芸術鑑賞会（演劇以外を含む）を行っていない理由（複数回答）

	1. もともと学校の計画にない	2. 費用負担が大きい	3. 他の先生の同意を得るのが難しい	4. 保護者の理解を得るのが難しい	5. 仕事の負担が大きい	6. 芸術鑑賞会のための時間を割きにくい	7. 何をみせたらいいかわからない	8. 開催中の生徒の態度が心配	9. コロナの影響で中止した	10. その他	
全体	407	61.4	45.7	2.5	0.7	7.4	28.3	2.9	3.7	14.0	11.3
学校区分											
高校：全日制	277	60.3	45.1	3.3	0.7	7.9	31.8	3.3	3.6	15.9	7.9
高校：定時制	55	72.7	67.3	1.8	1.8	0.0	21.8	1.8	5.5	1.8	14.6
中高一貫校	15	40.0	40.0	0.0	0.0	6.7	46.7	0.0	0.0	13.3	6.7
特別支援学校	60	61.7	30.0	0.0	0.0	11.7	13.3	3.3	3.3	16.7	25.0
設置者											
国公立	358	64.0	46.1	2.2	0.8	7.5	26.3	3.1	3.6	11.7	11.2
私立	49	42.9	42.9	4.1	0.0	6.1	42.9	2.0	4.1	30.6	12.2
生徒数											
100人未満	108	63.9	63.0	0.9	0.9	6.5	15.7	3.7	1.9	7.4	15.7
100人以上～250人未満	68	61.8	57.4	2.9	1.5	8.8	27.9	4.4	7.4	8.8	7.4
250人以上～500人未満	76	61.8	40.8	2.6	1.3	7.9	25.0	2.6	6.6	19.7	7.9
500人以上～750人未満	66	62.1	34.9	3.0	0.0	7.6	37.9	1.5	4.6	21.2	10.6
750人以上～1000人未満	63	65.1	27.0	3.2	0.0	6.4	36.5	3.2	0.0	12.7	11.1
1000人以上	26	38.5	30.8	3.8	0.0	7.7	46.2	0.0	0.0	23.1	15.4
地域											
東北 ※岩手,福島	18	50.0	44.4	0.0	0.0	0.0	33.3	0.0	0.0	5.6	22.2
関東 ※群馬,埼玉,神奈川	90	67.8	35.6	3.3	2.2	10.0	30.0	3.3	3.3	7.8	13.3
中部 ※石川,岐阜	30	70.0	43.3	6.7	3.3	6.7	26.7	0.0	3.3	13.3	13.3
近畿 ※滋賀,京都,兵庫,奈良,和歌山	81	58.0	46.9	1.2	0.0	2.5	28.4	1.2	7.4	16.0	8.6
中国 ※鳥取,山口	52	68.5	48.1	3.8	0.0	5.8	36.5	9.6	1.9	15.4	7.7
四国 ※徳島,香川,愛媛,高知	77	66.2	54.5	2.6	0.0	9.1	27.3	2.6	2.6	10.4	7.8
九州 ※長崎,熊本,大分,宮崎,鹿児島	59	47.5	47.5	0.0	0.0	11.9	18.6	1.7	3.4	27.1	15.3

※n数以外の数値はすべて%

次に、芸術鑑賞会（演劇以外を含む）を行っている学校（1278校中の871校）に対して「Q2. 貴校での芸術鑑賞会の開催頻度をお知らせください。※文化祭等の発表会を除く」と尋ねた結果を図表4.3に示す。

「毎年1回」が全体で66.6%、「その他」が同じく23.4%などとなっている。「その他」の自由回答を見るとほとんどは「3年に1回」と回答していることから、3年に1度実施することでどの学年も高校3年間のうちに最低1回は芸術鑑賞会を体験する設計にしている学校が多い模様である。

学校区分で比較すると、特別支援学校が他とは大きく異なっており、「毎年1回」が50.0%である反面、「不定期」が35.2%と他の学校区分より突出している。特別支援学校では生徒の数が毎年一定しないことが考えられるほか、生徒の個性なども一人一人が異なるために毎年同じような行事として企画・実行することが困難な状況にあるものと推察される。

生徒数では大規模校ほど「毎年1回」の割合が高まり、小規模校ほど低い傾向が見られたが、これはある程度特別支援学校の傾向を反映した結果とみられる。

地域別では中国地方で「毎年1回」の割合が低い結果となった。

図表4.3 芸術鑑賞会（演劇以外を含む）の実施頻度

	n数	1. 毎年1回	2. 2年に1回	3. 不定期	4. その他
全体	871	66.6	2.3	7.7	23.4
学校区分					
高校：全日制	660	67.1	2.1	3.9	26.8
高校：定時制	55	70.9	0.0	12.7	16.4
中高一貫校	68	79.4	2.9	4.4	13.2
特別支援学校	88	50.0	4.6	35.2	10.2
設置者					
国公立	702	64.8	2.1	7.8	25.2
私立	169	74.0	3.0	7.1	16.0
生徒数					
100人未満	113	58.4	1.8	23.0	16.8
100人以上～250人未満	116	55.2	4.3	17.2	23.3
250人以上～500人未満	188	59.0	3.2	6.4	31.4
500人以上～750人未満	204	71.6	1.5	1.5	25.5
750人以上～1000人未満	132	75.0	0.8	1.5	22.7
1000人以上	118	79.7	2.5	3.4	14.4
地域					
東北 ※岩手,福島	102	83.3	0.0	2.0	14.7
関東 ※群馬,埼玉,神奈川	222	68.0	2.3	5.9	23.9
中部 ※石川,岐阜	119	67.2	0.8	6.7	25.2
近畿 ※滋賀,京都,兵庫,奈良,和歌山	227	69.6	1.8	7.5	21.2
中国 ※鳥取,山口	29	27.6	10.3	27.6	34.5
四国 ※徳島,香川,愛媛,高知	40	60.0	2.5	22.5	15.0
九州 ※長崎,熊本,大分,宮崎,鹿児島	132	56.1	4.6	7.6	31.8

※n数以外の数値はすべて%

2. 芸術鑑賞会（演劇）の実施状況

芸術鑑賞会（演劇以外を含む）を実施している学校（1278校中の871校）に対して、「Q4-1. 貴校で過去3年間に開催された芸術鑑賞会の作品種類の中に、「演劇」は含まれていますか。」と尋ねた結果が図表4.4である。

演劇は芸術鑑賞会実施校の全体中52.9%が「含まれている（過去3年間の間に実施した）」と回答したが、学校区分別で見ると定時制高校が20.0%、特別支援学校が40.9%と全体に比べて低い実施率にとどまっていた。

設置者別では大きな違いは見られないが、生徒数では小規模校ほど（特に500人を下回る辺りから）実施率が下がっていく傾向が明瞭である。地域別でも中国地方（20.7%）、四国地方（37.5%）で実施率が低めであった。

芸術鑑賞会（演劇以外を含む）の実施率と同様に、演劇で見た場合にも、鑑賞機会の乏しい学校や地域のあることが見て取れる。

図表 4.4 芸術鑑賞会（演劇）の実施有無

	n数	含まれている	含まれていない
全体	871	52.9	47.1
学校区分			
高校：全日制	660	57.1	42.9
高校：定時制	55	20.0	80.0
中高一貫校	68	54.4	45.6
特別支援学校	88	40.9	59.1
設置者			
国公立	702	52.6	47.4
私立	169	54.4	45.6
生徒数			
100人未満	113	29.2	70.8
100人以上～250人未満	116	38.8	61.2
250人以上～500人未満	188	53.7	46.3
500人以上～750人未満	204	63.2	36.8
750人以上～1000人未満	132	61.4	38.6
1000人以上	118	61.0	39.0
地域			
東北 ※岩手,福島	102	47.1	52.9
関東 ※群馬,埼玉,神奈川	222	52.7	47.3
中部 ※石川,岐阜	119	60.5	39.5
近畿 ※滋賀,京都,兵庫,奈良,和歌山	227	55.1	44.9
中国 ※鳥取,山口	29	20.7	79.3
四国 ※徳島,香川,愛媛,高知	40	37.5	62.5
九州 ※長崎,熊本,大分,宮崎,鹿児島	132	59.1	40.9

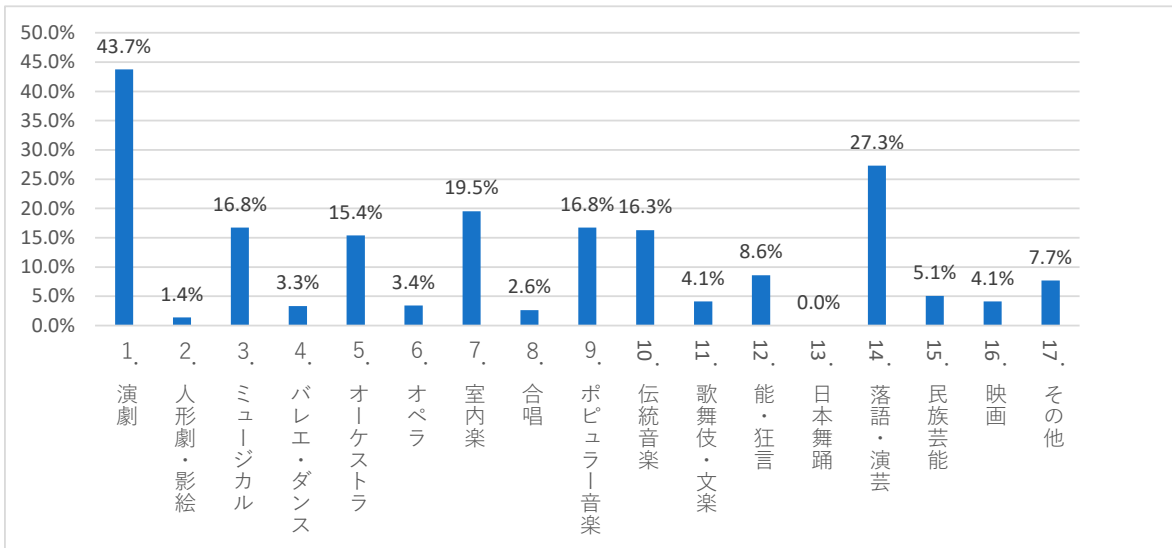
※n数以外の数値はすべて%

続いて、同じく芸術鑑賞会（演劇以外を含む）の実施校（1278校中の871校）を対象に、「Q4-2. 貴校で過去3年間に開催された芸術鑑賞会のすべての作品種類をお知らせください。（〇はいくつでも）」の質問文で、芸術鑑賞会のジャンルを尋ねた。

全体集計（図表 4.5）を見ると、演劇が43.7%で最多を占め、落語・演芸（27.3%）、室内楽（19.5%）、ミュージカル（16.8%）、ポピュラー音楽（16.8%）、伝統音楽（16.3%）、オーケストラ（15.4%）などと続いた。なお、前掲 Q4-1 で見た実施率（図表 4.1）と本質問での演劇該当率は、本来であれば一致していなければならないが、別々の質問で尋ねたことによって一部の回答者がチェックを忘れてしまったためと考えられる。なお、これ以降で「芸術鑑賞会（演劇）実施校」に限定した質問については、Q4-1の結果に基づく461校を母数として集計している点、ご留意ありたい。

さて、学校の属性および地域別の集計だが、全てに言及すると煩雑に過ぎるためここでは演劇の傾向に絞って紹介する。まず学校区分別の集計（図表 4.6）を見ると、演劇において定時制高校（18.2%）と特別支援学校（35.2%）が低めの該当率となっていた。設置者別ではほとんど同率であった（図表 4.7）。生徒数別（図表 4.8）では大規模校ほど演劇の該当率が高く、小規模校ほど低い傾向が見られたが、これもまた定時制高校や特別支援学校での低該当率を背景にしたものと考えられる。地域別（図表 4.9）では中国地方（20.7%）、四国地方（30.0%）の該当率が低かった。

図表 4.5 過去3年間の芸術鑑賞会 上演ジャンル (複数回答, n=871) ※全体集計



図表 4.6 過去3年間の芸術鑑賞会 上演ジャンル (複数回答) ※学校区分別集計

	高校：全日 制 (n=660)	高校：定時 制 (n=55)	中高一貫校 (n=68)	特別支援学 校 (n=88)
1. 演劇	47.1	18.2	42.6	35.2
2. 人形劇・影絵	1.1	0.0	1.5	4.5
3. ミュージカル	16.8	10.9	26.5	12.5
4. バレエ・ダンス	2.9	3.6	5.9	4.5
5. オーケストラ	16.2	3.6	16.2	15.9
6. オペラ	2.7	1.8	11.8	3.4
7. 室内楽	16.5	20.0	19.1	42.0
8. 合唱	2.0	1.8	5.9	5.7
9. ポピュラー音楽	16.1	20.0	14.7	21.6
10. 伝統音楽	16.1	25.5	13.2	14.8
11. 歌舞伎・文楽	3.2	0.0	22.1	0.0
12. 能・狂言	9.2	3.6	16.2	1.1
13. 日本舞踊	0.0	0.0	0.0	0.0
14. 落語・演芸	30.9	14.5	30.9	5.7
15. 民族芸能	5.0	9.1	0.0	6.8
16. 映画	3.0	23.6	4.4	0.0
17. その他	7.7	12.7	7.4	4.5

※n数以外の数値はすべて%

図表 4.7 過去3年間の芸術鑑賞会 上演ジャンル (複数回答) ※設置者別集計

	国公立 (n=702)	私立 (n=169)
1. 演劇	43.7	43.8
2. 人形劇・影絵	1.6	0.6
3. ミュージカル	14.1	27.8
4. バレエ・ダンス	3.1	4.1
5. オーケストラ	14.5	18.9
6. オペラ	2.6	7.1
7. 室内楽	19.8	18.3
8. 合唱	2.6	3.0
9. ポピュラー音楽	17.9	11.8
10. 伝統音楽	17.2	12.4
11. 歌舞伎・文楽	1.3	16.0
12. 能・狂言	7.5	13.0
13. 日本舞踊	0.0	0.0
14. 落語・演芸	28.1	24.3
15. 民族芸能	5.4	3.6
16. 映画	3.4	7.1
17. その他	7.7	7.7

※n数以外の数値はすべて%

図表 4.8 過去3年間の芸術鑑賞会 上演ジャンル (複数回答) ※生徒数別集計

	100人未満 (n=113)	100人以上～ 250人未満 (n=116)	250人以上～ 500人未満 (n=188)	500人以上～ 750人未満 (n=204)	750人以上～ 1000人未満 (n=132)	1000人以上 (n=118)
1. 演劇	25.7	30.2	47.3	51.5	50.0	48.3
2. 人形劇・影絵	4.4	0.9	0.5	1.5	0.8	0.8
3. ミュージカル	13.3	9.5	16.0	15.7	18.9	28.0
4. バレエ・ダンス	3.5	6.9	2.7	2.9	0.8	4.2
5. オーケストラ	15.0	9.5	14.4	17.6	18.9	15.3
6. オペラ	4.4	4.3	2.1	1.5	4.5	5.9
7. 室内楽	31.9	28.4	10.6	17.6	18.2	17.8
8. 合唱	5.3	1.7	1.1	1.5	4.5	3.4
9. ポピュラー音楽	16.8	19.8	20.7	13.7	17.4	11.9
10. 伝統音楽	16.8	24.1	12.2	15.2	11.4	22.0
11. 歌舞伎・文楽	1.8	0.0	4.3	3.4	4.5	11.0
12. 能・狂言	5.3	2.6	8.0	12.3	10.6	10.2
13. 日本舞踊	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
14. 落語・演芸	13.3	24.1	26.6	31.9	34.1	29.7
15. 民族芸能	6.2	3.4	4.8	4.9	5.3	5.9
16. 映画	10.6	2.6	3.2	1.0	6.1	4.2
17. その他	8.8	8.6	8.0	5.4	9.8	6.8

※n数以外の数値はすべて%

図表 4.9 過去3年間の芸術鑑賞会 上演ジャンル (複数回答) ※地域別集計

	東北 (n=102)	関東 (n=222)	中部 (n=119)	近畿 (n=227)	中国 (n=29)	四国 (n=40)	九州 (n=132)
1. 演劇	41.2	42.3	50.4	43.2	20.7	30.0	52.3
2. 人形劇・影絵	1.0	0.0	1.7	2.2	0.0	0.0	3.0
3. ミュージカル	13.7	20.3	12.6	22.0	0.0	32.5	6.8
4. パレエ・ダンス	4.9	3.6	2.5	4.0	0.0	2.5	2.3
5. オーケストラ	11.8	33.3	14.3	8.8	13.8	2.5	4.5
6. オペラ	1.0	4.5	1.7	4.0	13.8	2.5	2.3
7. 室内楽	26.5	15.8	15.1	17.6	27.6	22.5	25.0
8. 合唱	2.0	2.3	2.5	4.0	3.4	0.0	2.3
9. ポピュラー音楽	21.6	10.4	26.1	15.0	24.1	20.0	15.9
10. 伝統音楽	30.4	14.9	12.6	14.1	3.4	10.0	19.7
11. 歌舞伎・文楽	1.0	8.1	0.0	7.0	0.0	0.0	0.8
12. 能・狂言	10.8	10.4	2.5	8.4	13.8	5.0	9.8
13. 日本舞踊	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
14. 落語・演芸	44.1	31.1	13.4	26.9	10.3	17.5	28.0
15. 民族芸能	6.9	5.4	1.7	4.4	3.4	2.5	8.3
16. 映画	2.0	3.6	5.0	5.7	6.9	0.0	3.8
17. その他	4.9	6.3	8.4	7.5	17.2	10.0	9.1

※n数以外の数値はすべて%

次に、芸術鑑賞会(演劇)を実施している学校(1278校中の461校)を対象に、「Q5.過去3年間に実施した「演劇」の芸術鑑賞会の合計回数をお知らせください。」と尋ねた結果について全体と集計カテゴリごとに見た平均値を図表 4.10 に示した。

全体では平均 1.48 回であり、3年に1度よりはやや高い頻度の学校が多分に含まれることを示している。平均値ではなく、回答(「1回」「2回」…など)の分布を確認すると(図表 4.11)、1回又はそれ以下と答えたのが全体の75.9%、2回が9.1%、3回が13.2%、4回以上が1.7%といった構成になっており、全体の約1/4は3年間で2回以上実施していた。集計母数は異なるが、演劇以外を含む芸術鑑賞会の実施頻度で「年に1回」が66.6%であったこと(図表 4.3)を思い起こせば、演劇の芸術鑑賞会は、実施している場合にはある程度の頻度を確保できていると言えるかもしれない。

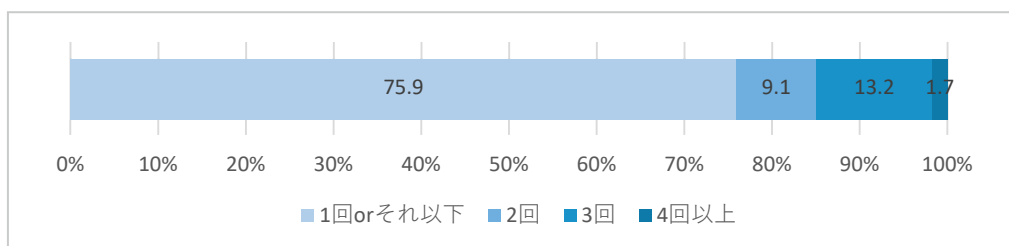
学校区別の比較では、特別支援学校が平均 2.11 回と他の区分より高い値を示している。ちなみに生徒数で100人未満の区分も平均 2.18 回となっているが、これは特別支援学校の傾向を反映したものと考えられる。

図表 4.10 過去3年間における芸術鑑賞会(演劇)の実施回数 ※平均値

	n数	回数
全体	461	1.48
学校区分		
高校：全日制	377	1.42
高校：定時制	11	1.36
中高一貫校	37	1.46
特別支援学校	36	2.11
設置者		
国公立	369	1.46
私立	92	1.55
生徒数		
100人未満	33	2.18
100人以上～250人未満	45	1.22
250人以上～500人未満	101	1.34
500人以上～750人未満	129	1.59
750人以上～1000人未満	81	1.32
1000人以上	72	1.49
地域		
東北 ※岩手,福島	48	1.21
関東 ※群馬,埼玉,神奈川	117	1.46
中部 ※石川,岐阜	72	1.22
近畿 ※滋賀,京都,兵庫,奈良,和歌山	125	1.77
中国 ※鳥取,山口	6	1.00
四国 ※徳島,香川,愛媛,高知	15	1.73
九州 ※長崎,熊本,大分,宮崎,鹿児島	78	1.42

※n数以外の数値はすべて回数

図表 4.11 過去3年間における芸術鑑賞会（演劇）の実施回数 ※回答分布



※集計母数は芸術鑑賞会（演劇）の実施校（n=461）

3. 劇団・作品の決定方法

設問が前後するが、芸術鑑賞会（演劇以外を含む）の実施校（1278校中の871校）を対象に「Q3. 芸術鑑賞会を開催するにあたって、実施するジャンルの選択方法についてお知らせください。」との質問をしている。

結果を見ると（図表 4.12）、全体では「2. 年度によって、予めジャンルが決まっている」（39.8%）、「3. ふさわしい内容があるジャンルを選択している」（38.1%）が上位で拮抗しており、必ずしもジャンル固定が生じているわけではないことがうかがわれる。

学校区分による違いを見ると、「予めジャンルが決まっている」では全日制高校、中高一貫校、大規模校ほど該当率が高いのに対し、「ふさわしい内容があるジャンルを選択している」では定時制高校、特別支援学校、小規模校ほど該当率が高かった。

図表 4.12 芸術鑑賞会（演劇以外を含む）のジャンル選択方法

	n数	1. 毎回決まったジャンルで実施している	2. 年度によって、予めジャンルが決まっている	3. ふさわしい内容があるジャンルを選択している	4. その他
全体	871	15.5	39.8	38.1	6.5
学校区分					
高校：全日制	660	14.2	47.4	32.6	5.8
高校：定時制	55	16.4	10.9	63.6	9.1
中高一貫校	68	19.1	33.8	38.2	8.8
特別支援学校	88	21.6	5.7	63.6	9.1
設置者					
国公立	702	14.1	42.0	37.3	6.6
私立	169	21.3	30.8	41.4	6.5
生徒数					
100人未満	113	21.2	7.1	59.3	12.4
100人以上～250人未満	116	14.7	21.6	56.0	7.8
250人以上～500人未満	188	16.0	36.7	40.4	6.9
500人以上～750人未満	204	11.8	57.4	27.0	3.9
750人以上～1000人未満	132	12.9	55.3	25.8	6.1
1000人以上	118	19.5	46.6	29.7	4.2
地域					
東北 ※岩手, 福島	102	5.9	54.9	28.4	10.8
関東 ※群馬, 埼玉, 神奈川	222	24.3	37.8	32.9	5.0
中部 ※石川, 岐阜	119	10.9	35.3	45.4	8.4
近畿 ※滋賀, 京都, 兵庫, 奈良, 和歌山	227	16.3	39.2	41.4	3.1
中国 ※鳥取, 山口	29	6.9	13.8	65.5	13.8
四国 ※徳島, 香川, 愛媛, 高知	40	32.5	20.0	37.5	10.0
九州 ※長崎, 熊本, 大分, 宮崎, 鹿児島	132	7.6	48.5	36.4	7.6

※n数以外の数値はすべて%

次に、芸術鑑賞会（演劇）実施校（1278 校中 461 校）を対象に、「Q6.「演劇」の芸術鑑賞会の内容は、どのように決めておられますか。」と尋ねた結果が図表 4.13 である。

全体では自校独自（教師主体）が 88.1% と圧倒的多数だが、学校区分別では特別支援学校が 72.2% とやや低く、代わりに「その他」が 25.0%（9 件）となった。特別支援学校における「その他」自由回答の中身を見ると、「劇団からの提案・話し合い」（3 件）、「地域の団体が決める」（1 件）、「隣接する小学校と相談」（1 件）、「高校人権連絡協議会」（1 件）、「文化庁事業」（1 件）、「外部からの紹介」（1 件）などとなっていた。

図表 4.13 芸術鑑賞会（演劇）の内容決定主体

	n数	1. 本校で 独自に決め る（教師主 体）	2. 本校で 独自に決め る（生徒主 体）	3. 本校で 独自に決め る（PTA主 体）	4. 地区の 教育研究会 等で決める	5. 教育委 員会で決め られる	6. その他
全体	461	88.1	2.6	0.2	3.0	0.2	5.9
学校区分							
高校：全日制	377	89.9	2.4	0.3	3.5	0.0	4.0
高校：定時制	11	81.8	0.0	0.0	9.1	0.0	9.1
中高一貫校	37	86.5	8.1	0.0	0.0	0.0	5.4
特別支援学校	36	72.2	0.0	0.0	0.0	2.8	25.0
設置者							
国公立	369	87.0	2.7	0.3	3.5	0.3	6.2
私立	92	92.4	2.2	0.0	1.1	0.0	4.4
生徒数							
100人未満	33	66.7	0.0	0.0	6.1	3.0	24.2
100人以上～250人未満	45	86.7	0.0	0.0	2.2	0.0	11.1
250人以上～500人未満	101	85.2	3.0	0.0	6.9	0.0	5.0
500人以上～750人未満	129	91.5	0.0	0.8	2.3	0.0	5.4
750人以上～1000人未満	81	90.1	8.6	0.0	1.2	0.0	0.0
1000人以上	72	94.4	2.8	0.0	0.0	0.0	2.8
地域							
東北 ※岩手,福島	48	79.2	4.2	0.0	14.6	0.0	2.1
関東 ※群馬,埼玉,神奈川	117	95.7	0.9	0.0	0.0	0.0	3.4
中部 ※石川,岐阜	72	79.2	9.7	0.0	2.8	0.0	8.3
近畿 ※滋賀,京都,兵庫,奈良,和歌山	125	87.2	0.8	0.8	4.0	0.0	7.2
中国 ※鳥取,山口	6	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
四国 ※徳島,香川,愛媛,高知	15	73.3	0.0	0.0	0.0	0.0	26.7
九州 ※長崎,熊本,大分,宮崎,鹿児島	78	93.6	1.3	0.0	0.0	1.3	3.9

※n数以外の数値はすべて%

Q6と同じく、芸術鑑賞会（演劇）実施校（1278 校中 461 校）に「Q7.「演劇」の作品や劇団を決める際にどのような情報を参考にされますか。（○はいくつでも）」と尋ねた結果が図表 4.14 である。

全体では「2. 劇団等の人の話」（54.9%）、「1. ダイレクトメール」（47.5%）、「5. 他校からや研究会で得た情報」（34.1%）、「4. インターネット・SNS」（24.1%）、「7. 実際に見聞きした」（20.0%）などが上位となった。全体的には劇団からの情報提供が学校側にとって有益であることが示されている。一方で、定時制高校や特別支援学校においては「他校からや研究会で得た情報」の比重が他の学校区分と比べてやや高い（定時制高校が 54.6%、特別支援学校が 36.1%）結果も見られた。

図表 4.14 劇団・作品選考の際に参考とする情報（複数回答）

	n数	1. ダイ レクト メール	2. 劇団 等の人の 話	3. 専門 雑誌、研 究雑誌	4. イン ターネッ ト・SNS	5. 他校 からや研 究会で得 た情報	6. 知人 の紹介	7. 実際 に見聞き した	8. 例年 決まって いる	9. その 他
全体	461	47.5	54.9	4.1	24.1	34.1	6.1	20.0	8.0	11.5
学校区分										
高校：全日制	377	50.7	55.4	4.8	23.6	35.0	4.5	19.1	8.2	10.6
高校：定時制	11	54.6	54.6	0.0	36.4	54.6	9.1	9.1	9.1	9.1
中高一貫校	37	37.8	54.1	2.7	21.6	16.2	16.2	29.7	10.8	8.1
特別支援学校	36	22.2	50.0	0.0	27.8	36.1	11.1	22.2	2.8	25.0
設置者										
国公立	369	50.4	54.5	3.8	24.1	38.5	5.7	19.5	7.6	12.5
私立	92	35.9	56.5	5.4	23.9	16.3	7.6	21.7	9.8	7.6
生徒数										
100人未満	33	18.2	51.5	3.0	21.2	30.3	9.1	24.2	9.1	24.2
100人以上～250人未満	45	48.9	57.8	2.2	31.1	33.3	11.1	6.7	4.4	15.6
250人以上～500人未満	101	50.5	53.5	3.0	20.8	37.6	4.0	19.8	7.9	7.9
500人以上～750人未満	129	49.6	51.9	7.0	22.5	33.3	7.0	22.5	7.8	10.1
750人以上～1000人未満	81	50.6	64.2	3.7	29.6	37.0	2.5	22.2	8.6	9.9
1000人以上	72	48.6	51.4	2.8	22.2	29.2	6.9	19.4	9.7	12.5
地域										
東北 ※岩手,福島	48	60.4	70.8	4.2	12.5	14.6	4.2	10.4	0.0	8.3
関東 ※群馬,埼玉,神奈川	117	49.6	51.3	5.1	29.1	32.5	7.7	21.4	10.3	6.0
中部 ※石川,岐阜	72	52.8	47.2	4.2	34.7	36.1	2.8	12.5	1.4	12.5
近畿 ※滋賀,京都,兵庫,奈良,和歌山	125	42.4	48.0	4.8	20.0	33.6	6.4	28.8	14.4	16.8
中国 ※鳥取,山口	6	16.7	50.0	0.0	16.7	33.3	0.0	16.7	0.0	33.3
四国 ※徳島,香川,愛媛,高知	15	6.7	53.3	0.0	13.3	33.3	6.7	13.3	20.0	13.3
九州 ※長崎,熊本,大分,宮崎,鹿児島	78	50.0	69.2	2.6	23.1	47.4	7.7	17.9	3.8	10.3

※n数以外の数値はすべて%

4. 開催の形態、場所、会場の準備

芸術鑑賞会（演劇）実施校（1278校中の461校）を対象に、「Q10.「演劇」の芸術鑑賞会の開催形態は、次のうちどれですか。」と尋ねた。

結果（図表 4.15）を見ると、全体では「1. 自校の単独」が81.1%と圧倒的多数だが、学校区分では定時制高校が63.6%と低く、100人未満の小規模校も54.6%となった。

「1. 自校の単独」以外で高めの該当率となっているのは、定時制高校および特別支援学校における「2. 他校との共同」（定時制高校：18.2%、特別支援学校：13.9%）であり、100人未満および100人以上～250人未満の小規模校も同様であった。

図表 4.15 芸術鑑賞会（演劇）の開催形態

	n数	1. 自校の単独	2. 他校との共同	3. 公立文化施設と共同	4. 教育委員会と共同	5. 地域の団体と共同	6. 民間の文化施設と共同	7. その他
全体	461	81.1	7.8	3.5	0.9	0.2	4.1	2.4
学校区分								
高校：全日制	377	83.0	6.9	3.5	0.5	0.0	4.0	2.1
高校：定時制	11	63.6	18.2	0.0	0.0	0.0	9.1	9.1
中高一貫校	37	75.7	8.1	8.1	0.0	0.0	8.1	0.0
特別支援学校	36	72.2	13.9	0.0	5.6	2.8	0.0	5.6
設置者								
国公立	369	81.8	8.1	3.0	1.1	0.3	3.0	2.7
私立	92	78.3	6.5	5.4	0.0	0.0	8.7	1.1
生徒数								
100人未満	33	54.6	18.2	0.0	9.1	3.0	6.1	9.1
100人以上～250人未満	45	75.6	13.3	2.2	0.0	0.0	2.2	6.7
250人以上～500人未満	101	84.2	9.9	4.0	0.0	0.0	2.0	0.0
500人以上～750人未満	129	82.2	7.8	3.1	0.8	0.0	3.9	2.3
750人以上～1000人未満	81	87.7	2.5	3.7	0.0	0.0	3.7	2.5
1000人以上	72	83.3	2.8	5.6	0.0	0.0	8.3	0.0
地域								
東北 ※岩手,福島	48	79.2	10.4	6.3	2.1	0.0	0.0	2.1
関東 ※群馬,埼玉,神奈川	117	88.9	0.9	0.9	0.9	0.0	6.8	1.7
中部 ※石川,岐阜	72	72.2	15.3	6.9	1.4	0.0	0.0	4.2
近畿 ※滋賀,京都,兵庫,奈良,和歌山	125	77.6	8.8	4.8	0.0	0.0	6.4	2.4
中国 ※鳥取,山口	6	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
四国 ※徳島,香川,愛媛,高知	15	53.3	20.0	0.0	0.0	6.7	20.0	0.0
九州 ※長崎,熊本,大分,宮崎,鹿児島	78	88.5	6.4	1.3	1.3	0.0	0.0	2.6

※n数以外の数値はすべて%

次に芸術鑑賞会（演劇）の開催場所について、「Q11.「演劇」の芸術鑑賞会の実施場所はどこですか。」と尋ねた結果をみる（図表 4.16）。こちらは公立文化施設での実施が全体の 54.0% で最多となり、自校（29.3%）、民間の文化施設（13.0%）と続く。

ここでも定時制高校と特別支援学校が特異な傾向を示しており、定時制高校の場合は公立文化施設の割合が 36.4%と全体よりやや低く、逆に自校の割合が 36.4%と高めであった。ここから、公立文化施設での実施には一定以上の生徒数を要する状況が推察される。さらに、この傾向がより顕著なのが特別支援学校で、自校実施率は 72.2%にも上る。この背景には特別支援学校が抱える特殊事情があると考えられる。後ほどにも紹介するが、芸術鑑賞会（演劇以外を含む）を実施していない学校に対して今後の意向を尋ねたところ、特別支援学校からあがった自由回答の中には、「会場の確保と車いすの児童生徒の移動手段が確保できれば、実施を検討したい」「一般のお客様と一緒に鑑賞することは難しいのではないかと思います」といった回答が見られた。特別支援学校での実現には、バリアフリーなどより多くの困難が認識されているとうかがわれる。

図表 4.16 芸術鑑賞会（演劇）の開催場所

	n数	1. 自校	2. 他校	3. 公立文化施設	4. 民間の文化施設	5. その他
全体	461	29.3	0.0	54.0	13.0	3.7
学校区分						
高校：全日制	377	26.0	0.0	58.1	13.0	2.9
高校：定時制	11	36.4	0.0	36.4	18.2	9.1
中高一貫校	37	18.9	0.0	54.1	16.2	10.8
特別支援学校	36	72.2	0.0	16.7	8.3	2.8
設置者						
国公立	369	32.3	0.0	55.8	9.5	2.4
私立	92	17.4	0.0	46.7	27.2	8.7
生徒数						
100人未満	33	57.6	0.0	21.2	15.2	6.1
100人以上～250人未満	45	64.4	0.0	28.9	4.4	2.2
250人以上～500人未満	101	32.7	0.0	56.4	8.9	2.0
500人以上～750人未満	129	27.1	0.0	58.9	10.9	3.1
750人以上～1000人未満	81	16.1	0.0	66.7	14.8	2.5
1000人以上	72	8.3	0.0	58.3	25.0	8.3
地域						
東北 ※岩手,福島	48	33.3	0.0	60.4	2.1	4.2
関東 ※群馬,埼玉,神奈川	117	18.0	0.0	61.5	18.8	1.7
中部 ※石川,岐阜	72	25.0	0.0	63.9	8.3	2.8
近畿 ※滋賀,京都,兵庫,奈良,和歌山	125	19.2	0.0	53.6	18.4	8.8
中国 ※鳥取,山口	6	33.3	0.0	66.7	0.0	0.0
四国 ※徳島,香川,愛媛,高知	15	26.7	0.0	26.7	46.7	0.0
九州 ※長崎,熊本,大分,宮崎,鹿児島	78	64.1	0.0	34.6	1.3	0.0

※n数以外の数値はすべて%

その意味で、会場の準備などにあたって自校以外の主体からどの程度支援が及んでいるかが重要なポイントとなる。そこで「Q12.Q11でお答えになった会場を用意したのは、下記のどちらでしたか。」の結果を参照したい。

全体で見ると、自校が71.7%と最多であり、場所自体は(Q11の結果によると)公立文化施設で行う場合が多いのだが、その準備は学校側で行っている状況が見て取れる。

これに対して自校以外の主体による助力が得られている可能性も部分的には示されている。例えば定時制高校の場合、公立文化施設が18.2%、劇団も18.2%の該当率であり、ホールや劇団側から一定のアプローチがなされている結果ではないだろうか。

図表 4.17 芸術鑑賞会(演劇)の開催場所を準備した主体

	n数	1. 自校	2. 他校	3. 公立文化施設	4. 民間の文化施設	5. 教育委員会	6. 地域の団体	7. 劇団	8. その他
全体	460	71.7	2.6	4.6	2.4	2.0	0.7	11.3	4.8
学校区分									
高校：全日制	376	73.4	2.7	3.7	2.7	1.6	0.3	10.9	4.8
高校：定時制	11	54.6	9.1	18.2	0.0	0.0	0.0	18.2	0.0
中高一貫校	37	64.9	0.0	10.8	2.7	2.7	0.0	16.2	2.7
特別支援学校	36	66.7	2.8	2.8	0.0	5.6	5.6	8.3	8.3
設置者									
国公立	369	75.6	3.3	4.1	2.4	1.6	0.5	7.6	4.9
私立	91	56.0	0.0	6.6	2.2	3.3	1.1	26.4	4.4
生徒数									
100人未満	33	54.6	9.1	3.0	0.0	9.1	3.0	15.2	6.1
100人以上～250人未満	45	77.8	2.2	2.2	2.2	4.4	2.2	6.7	2.2
250人以上～500人未満	100	73.0	4.0	3.0	2.0	2.0	1.0	10.0	5.0
500人以上～750人未満	129	75.2	2.3	6.2	1.6	0.0	0.0	12.4	2.3
750人以上～1000人未満	81	76.5	1.2	6.2	4.9	0.0	0.0	3.7	7.4
1000人以上	72	62.5	0.0	4.2	2.8	2.8	0.0	20.8	6.9
地域									
東北 ※岩手,福島	48	81.3	6.3	10.4	0.0	2.1	0.0	0.0	0.0
関東 ※群馬,埼玉,神奈川	117	75.2	0.9	4.3	3.4	0.0	0.0	13.7	2.6
中部 ※石川,岐阜	72	59.7	2.8	2.8	0.0	9.7	1.4	6.9	16.7
近畿 ※滋賀,京都,兵庫,奈良,和歌山	124	63.7	3.2	6.5	3.2	0.0	0.8	18.6	4.0
中国 ※鳥取,山口	6	66.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	16.7	16.7
四国 ※徳島,香川,愛媛,高知	15	33.3	6.7	0.0	20.0	0.0	6.7	26.7	6.7
九州 ※長崎,熊本,大分,宮崎,鹿児島	78	92.3	1.3	1.3	0.0	1.3	0.0	3.9	0.0

※n数以外の数値はすべて%、本質問では一部の学校から回答が得られなかった。

さて、設問が前後するが、芸術鑑賞会（演劇）実施校（1278 校中 461 校）を対象に「Q9.実施の際の鑑賞対象学年をお知らせください。（〇はいくつでも）」と尋ねた結果を図表 4.18 に示す。特に回答を加工せずそのまま掲載したが、「1. 全学年」に回答している場合には自動的に後の項目（1 年生～3 年生）は含まれていると解釈して差し支えないと思われる。結果は回答対象校の 9 割近くが全学年と回答しており、学校の特徴や地域による特筆すべき傾向の違いは見られなかった。

図表 4.18 芸術鑑賞会（演劇）の鑑賞対象学年（複数回答）

	n数	1. 全学年	2. 1年生	3. 2年生	4. 3年生	5. その他
全体	461	88.9	3.9	4.3	4.3	3.3
学校区分						
高校：全日制	377	89.9	3.5	4.0	4.8	1.3
高校：定時制	11	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0
中高一貫校	37	78.4	10.8	8.1	5.4	5.4
特別支援学校	36	86.1	2.8	5.6	0.0	22.2
設置者						
国公立	369	91.1	3.5	3.5	3.8	2.7
私立	92	80.4	5.4	7.6	6.5	5.4
生徒数						
100人未満	33	87.9	0.0	3.0	3.0	12.1
100人以上～250人未満	45	93.3	0.0	2.2	2.2	8.9
250人以上～500人未満	101	95.1	2.0	3.0	2.0	0.0
500人以上～750人未満	129	89.2	3.9	2.3	8.5	1.6
750人以上～1000人未満	81	88.9	3.7	4.9	4.9	2.5
1000人以上	72	77.8	11.1	11.1	1.4	4.2
地域						
東北 ※岩手,福島	48	100.0	0.0	2.1	0.0	0.0
関東 ※群馬,埼玉,神奈川	117	84.6	6.8	6.8	6.8	3.4
中部 ※石川,岐阜	72	97.2	0.0	1.4	0.0	1.4
近畿 ※滋賀,京都,兵庫,奈良,和歌山	125	80.0	6.4	5.6	8.8	5.6
中国 ※鳥取,山口	6	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0
四国 ※徳島,香川,愛媛,高知	15	73.3	6.7	6.7	6.7	6.7
九州 ※長崎,熊本,大分,宮崎,鹿児島	78	97.4	1.3	2.6	0.0	2.6

※n数以外の数値はすべて%

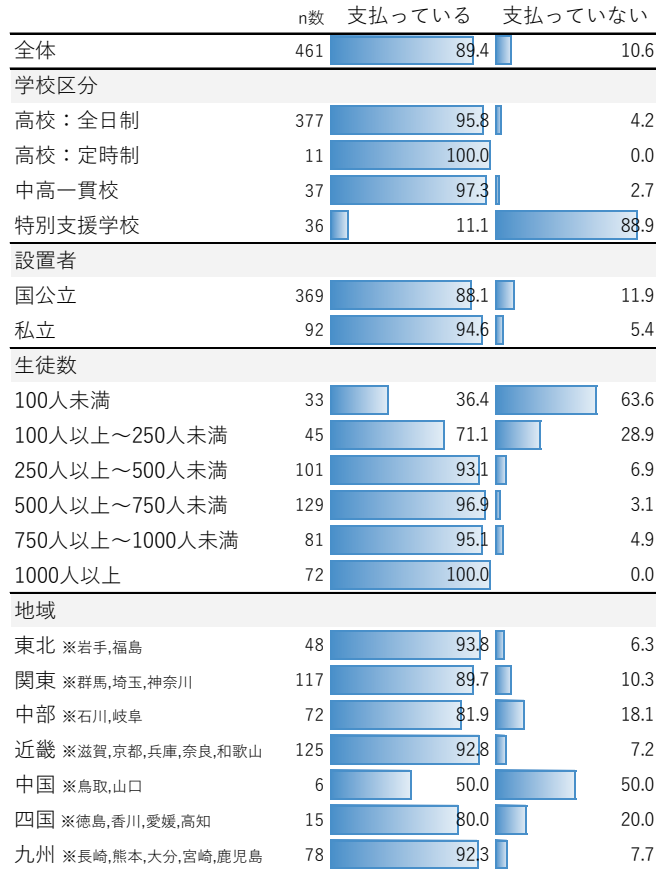
5. 公演料負担の状況

芸術鑑賞会(演劇)実施校(1278 校中の 461 校)に対して、公演料支払いの有無を尋ねた結果が図表 4.19 である(質問文は「Q13.「演劇」の芸術鑑賞会で、貴校は劇団等または文化施設等に公演料を支払っていますか。」)。

全体では 89.4% が支払っていると回答したが、学校区分では特別支援学校が 11.1% と少なく、生徒数 100 人未満の区分も 36.4%と低い該当率であった。

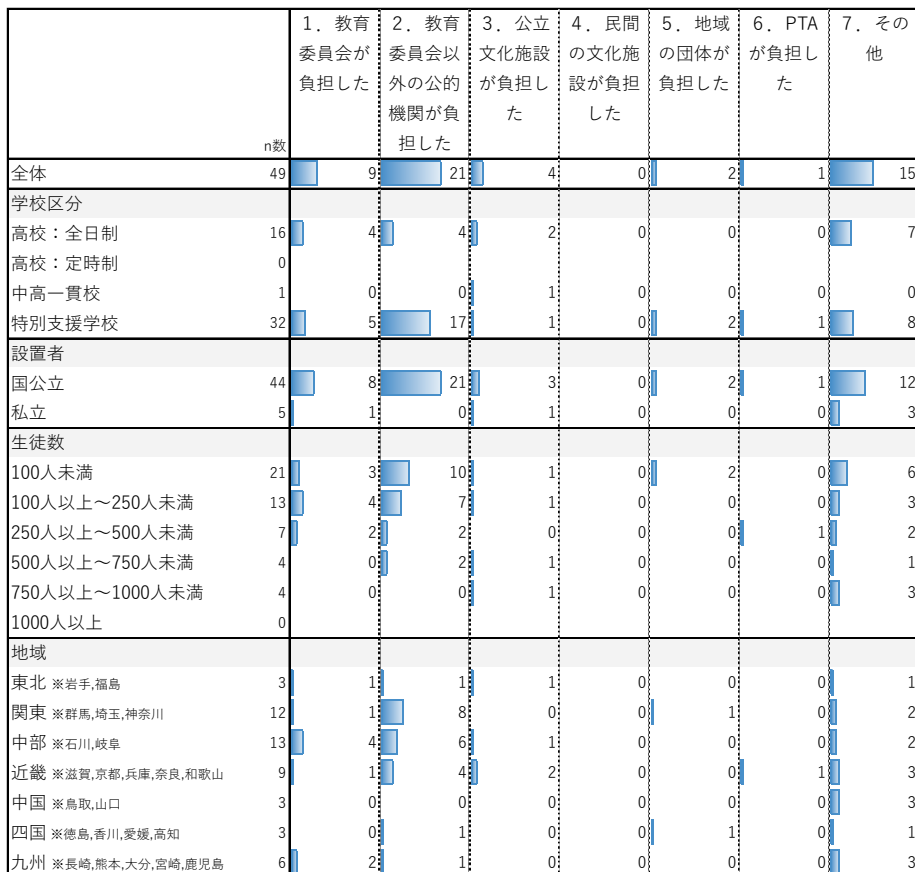
特別支援学校については文化庁による「文化芸術による子供育成推進事業(ユニバーサル公演事業)」など特別支援学校に重点を置いた助成制度があることから、回答者の中でそうした助成を活用して芸術鑑賞会を行っている学校が多かった可能性が考えられる。ちなみに公演料を負担していない学校に対して、代わりに負担した主体を尋ねたところ(Q13-SQ1、図表 4.20)、全体及び特別支援学校において「2. 教育委員会以外の公的機関が負担した」の回答件数が最も高かったが、これは文化庁や地方自治体などの助成を示す結果であろう。

図表 4.19 芸術鑑賞会（演劇）への公演料支払いの有無



※n数以外の数値はすべて%

図表 4.20 公演料を負担した主体（公演料を負担していない学校）



※n数以外の数値はすべて該当件数（集計母数が小さすぎるため%表記は採らず）

それでは、公演料を負担している学校の負担金額はどのようになっているのだろうか。本調査では「Q13-SQ2. 生徒が負担した金額は1人当たりおおよそいくらでしたか。」という形で具体的な金額を尋ねた。注意されたいのは、質問文では詳細な算出方法を教示していないため、割り算の分子・分母をどのように定義するかは回答する学校ごとに認識の差があると思われる点である。結果だけを示すと単純に「公演開催にあたって生徒1人1人が実際に支払っている金額」といったイメージで把握される恐れがあるが、本調査ではそうした厳密な形で測定したわけではないため、数値自体を厳密かつ客観的な事実と誤認されないよう注意されたい。ただそれでは、この結果に何の意味もないかと言えば必ずしもそうではない。確かに数値そのものは実態とずれた部分があるかもしれないが、学校区分や地域などによって比較した際の傾向にはある程度の実態を反映した部分があると思われる。したがって数値そのものではなく、いろいろな切り口で比較してみるとどのような金額の多寡の傾向があるかに注目してご覧いただくと幸いである。

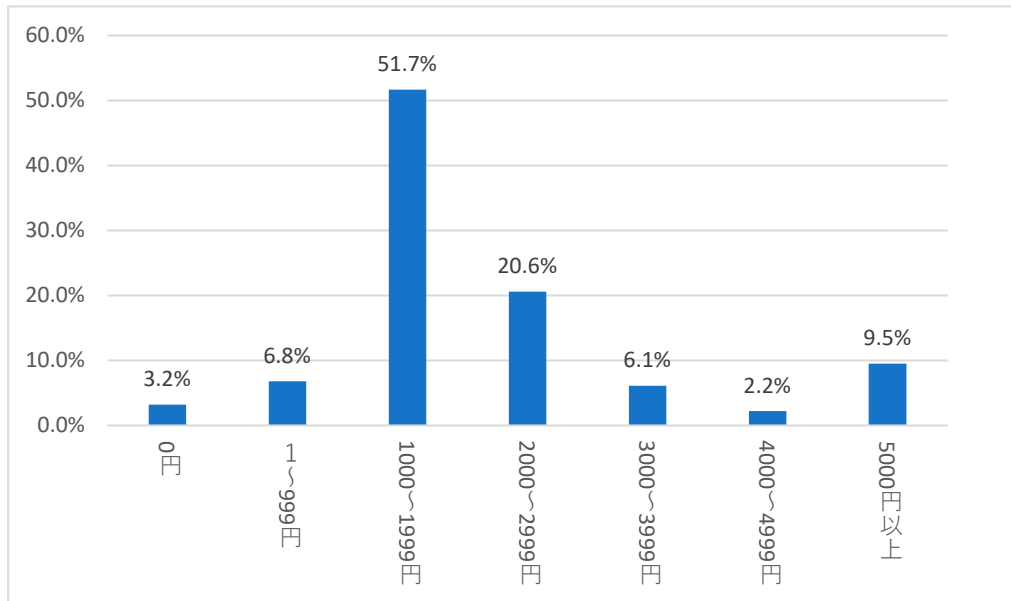
さて、重々注意を促したうえで各区分における平均金額を見てみよう(図表 4.21)。全体では1校平均 2098.5円となった。ちなみに金額の偏りをイメージできるよう1000円刻みで回答分布を見たのが図表 4.22 である。こちらを見ると1000円以上～2000円未満が全体の51.7%を占めて最頻値になっているが、2000円以上の区分も合わせれば38.4%にも上り、1000円未満の比較的安価な公演料負担で済んでいる学校は全体の10%に過ぎない。

図表 4.21 芸術鑑賞会(演劇)への公演料負担(生徒1人あたり) ※平均値

	n数	金額
全体	412	2098.5
学校区分		
高校：全日制	361	2090.1
高校：定時制	11	1600.0
中高一貫校	36	2368.6
特別支援学校	4	1800.0
設置者		
国公立	325	1939.6
私立	87	2692.2
生徒数		
100人未満	12	2288.3
100人以上～250人未満	32	2746.9
250人以上～500人未満	94	2147.4
500人以上～750人未満	125	1851.7
750人以上～1000人未満	77	1788.4
1000人以上	72	2475.3
地域		
東北 ※岩手,福島	45	1682.2
関東 ※群馬,埼玉,神奈川	105	2569.4
中部 ※石川,岐阜	59	2101.1
近畿 ※滋賀,京都,兵庫,奈良,和歌山	116	2283.7
中国 ※鳥取,山口	3	866.7
四国 ※徳島,香川,愛媛,高知	12	1400.0
九州 ※長崎,熊本,大分,宮崎,鹿児島	72	1539.4

※n数以外の数値はすべて金額(円)

図表 4.22 芸術鑑賞会（演劇）への公演料負担（生徒1人あたり）※分布



では、こういった学校が高い公演料を負担しているのだろうか。図表 4.21 を手掛かりにこれを見てみると、学校区分では中高一貫校（平均 2368.6 円）、設置者では私立校（平均 2692.2 円）、生徒数では 100 人以上～250 人未満（平均 2746.9 円）、1000 人以上（2475.3 円）、100 人未満（平均 2288.3 円）などが平均水準の 2000 円より高い区分となった。地域的には関東・中部・近畿が 2000 円を超えている。これらのうち中高一貫校・私立校・大規模校（生徒数 1000 人以上）の場合は、生徒数が多く財政余力のある私学ほど高い公演料を負担する力があることを示す結果として理解可能と思われる。

しかし、サンプル構成として定時制高校や特別支援学校を多く含む小規模校のカテゴリでも 2000 円を超えるのはどのような理由によるのだろうか。学校区分で見ると定時制高校は平均 1600.0 円、特別支援学校は平均 1800.0 円であり、これら以外の小規模校の負担が高いということではなければつじつまが合わない。

そこで、地域と生徒数をかけ合わせて公演料の比較を行った（図表 4.23）。これを見ると、東北と九州において、地域全体の平均こそ低いものの、学校規模が小さくなるほど公演料負担が高まる傾向が見られた。また関東でも、100～249 人のやや小規模に位置する学校の平均金額が突出して高い（4300.0 円）状況が見られた。

この結果からは東北や九州など一部の地域では小規模な学校ほど高い公演料を負担しなければならない状況にあることが浮かび上がってくる。確かに、同じ規模の公演なら生徒数が多いほど 1 人当たりの負担を軽減できるのは道理ではある。しかし財政力の乏しい小規模校が高額の負担をせざるを得ない状況があるとすれば、演劇の普及にとって喫緊に解決すべき課題ではないだろうか。

図表 4.23 芸術鑑賞会（演劇）への公演料負担（生徒1人あたり）※地域×生徒数

	地域全体		100人未満		100～249人		250～499人		500～749人		750～999人		1000人以上	
	平均金額	n数	平均金額	n数	平均金額	n数	平均金額	n数	平均金額	n数	平均金額	n数	平均金額	n数
東北	1682.2	45	2200.0	3	2400.0	9	1786.7	15	1269.2	13	1066.7	3	500.0	2
関東	2569.4	108	3000.0	1	4300.0	5	2075.0	20	2376.7	28	2263.8	29	3254.0	22
中部	2101.1	59	1700.0	1	3080.0	5	2457.1	21	2335.6	9	1295.0	10	1638.1	13
近畿	2263.7	118	1950.0	2	2200.0	3	2793.7	19	1918.5	49	1853.0	20	3055.2	23
中国	866.7	3	—	0	—	0	—	0	750.0	2	1100.0	1	—	0
四国	1400.0	12	0.0	1	—	0	1166.7	3	1500.0	4	1250.0	2	2400.0	2
九州	1539.4	72	3065.0	4	2280.0	10	1585.7	16	1294.2	20	1270.8	12	927.0	10

6. 芸術鑑賞会（演劇）への意向

芸術鑑賞会（演劇）実施校（1278 校中の 461 校）に対して、芸術鑑賞会（演劇）に期待する効果を尋ねた結果が図表 4.24 である。

全体では「1. 情操教育」（80.5%）、「4. 創造力を養う」（60.7%）、「6. 精神面でのゆとり、癒し」（39.9%）、「コミュニケーション能力を養う」（36.2%）、「3. 道徳・モラルを養う」（34.7%）などの順で高かった。「9. あまり期待していない」は該当ゼロで、既に実施している学校への質問だけに、全ての学校が演劇の鑑賞会になにがしかの効果を実期待していることが明らかとなった。

図表 4.24 芸術鑑賞会（演劇）に期待すること

n数	1. 情操教育	2. 知識を高める	3. 道徳・モラルを養う	4. 創造力を養う	5. コミュニケーション能力を養う	6. 精神面でのゆとり、癒し	7. 遊び、娯楽	8. 学校行事のひとつ	9. あまり期待していない	10. その他
461	80.5	28.0	34.7	60.7	36.2	39.9	10.0	30.8	0.0	5.4
377	79.8	27.6	36.3	59.4	31.8	39.5	9.8	31.0	0.0	6.1
11	81.8	27.3	27.3	63.6	45.5	54.6	0.0	36.4	0.0	0.0
37	78.4	35.1	29.7	59.5	48.7	51.4	8.1	35.1	0.0	2.7
36	88.9	25.0	25.0	75.0	66.7	27.8	16.7	22.2	0.0	2.8
369	81.8	26.3	33.9	61.5	36.0	40.1	10.0	30.1	0.0	5.7
92	75.0	34.8	38.0	57.6	37.0	39.1	9.8	33.7	0.0	4.3
33	93.9	27.3	30.3	69.7	63.6	36.4	12.1	21.2	0.0	3.0
45	77.8	33.3	31.1	64.4	42.2	35.6	13.3	31.1	0.0	6.7
101	77.2	22.8	34.7	58.4	34.7	32.7	6.9	24.8	0.0	7.9
129	79.8	29.5	35.7	64.3	32.6	40.3	12.4	33.3	0.0	3.9
81	84.0	24.7	37.0	54.3	33.3	54.3	7.4	37.0	0.0	4.9
72	77.8	33.3	34.7	58.3	31.9	37.5	9.7	31.9	0.0	5.6
48	81.3	35.4	39.6	60.4	25.0	41.7	12.5	27.1	0.0	2.1
117	83.8	26.5	35.0	53.8	33.3	41.9	10.3	34.2	0.0	6.8
72	80.6	20.8	37.5	58.3	25.0	41.7	12.5	30.6	0.0	4.2
125	75.2	31.2	31.2	62.4	45.6	38.4	6.4	32.0	0.0	7.2
6	66.7	50.0	16.7	83.3	66.7	50.0	0.0	33.3	0.0	0.0
15	73.3	40.0	20.0	60.0	33.3	33.3	6.7	33.3	0.0	6.7
78	85.9	23.1	38.5	69.2	41.0	37.2	12.8	25.6	0.0	3.8

それでは今後の芸術鑑賞会（演劇）への意向はどのようなものであろうか。まず実施校（1278 校中の 461 校）に尋ねた結果を図表 4.25 に示す。こちらも実施校に対して尋ねただけに「減らしていく」「実施しない」といった回答は極めて少数であり、「3. 従来と変わらない」が全体の 56.8% を占めた。ただ、「2. 費用等の制約の範囲内でできるだけ実施する」が全体の 33.0%、「6. 未定」が全体の 6.1% と、合わせると約 4 割が費用その他の条件によっては今後の実施に何らかの制約が出てくる可能性を示唆する回答であったことも注意を要する。細かく見ると、「費用等の制約」では 100 人以上～250 人未満をピーク（42.2%）として大規模校ほど該当率が下がっていく傾向が見られた。100 人未満の最小規模カテゴリで該当率がやや落ち着いているのは、ここに多く含まれる特別支援学校が国や自治体の助成事業に採択されれば費用面でのネックはある程度解消される見込みがあるためであろう。他方でそうした可能性の薄い学校では、規模が小さいほど費用面を考慮せざるを得なくなる状況にあると考えられる。

図表 4.25 芸術鑑賞会（演劇）今後の実施意向（実施校対象）

	n数	1. 鑑賞 教室を いっそう 積極的に 実施する	2. 費用 等の制約 の範囲内 でできる だけ実施 する	3. 従来 と変わら ない	4. 鑑賞 教室は減 らしてい く	5. 鑑賞 教室は実 施しない	6. 未定
全体	461	3.5	33.0	56.8	0.7	0.0	6.1
学校区分							
高校：全日制	377	2.7	34.2	57.3	0.8	0.0	5.0
高校：定時制	11	0.0	36.4	45.5	0.0	0.0	18.2
中高一貫校	37	8.1	27.0	64.9	0.0	0.0	0.0
特別支援学校	36	8.3	25.0	47.2	0.0	0.0	19.4
設置者							
国公立	369	3.3	31.4	57.7	0.8	0.0	6.8
私立	92	4.4	39.1	53.3	0.0	0.0	3.3
生徒数							
100人未満	33	9.1	33.3	45.5	0.0	0.0	12.1
100人以上～250人未満	45	0.0	42.2	37.8	0.0	0.0	20.0
250人以上～500人未満	101	2.0	39.6	49.5	0.0	0.0	8.9
500人以上～750人未満	129	2.3	33.3	58.9	1.6	0.0	3.9
750人以上～1000人未満	81	7.4	27.2	63.0	1.2	0.0	1.2
1000人以上	72	2.8	23.6	73.6	0.0	0.0	0.0
地域							
東北 ※岩手,福島	48	2.1	41.7	54.2	0.0	0.0	2.1
関東 ※群馬,埼玉,神奈川	117	3.4	34.2	57.3	0.9	0.0	4.3
中部 ※石川,岐阜	72	4.2	20.8	66.7	0.0	0.0	8.3
近畿 ※滋賀,京都,兵庫,奈良,和歌山	125	4.0	40.0	49.6	0.8	0.0	5.6
中国 ※鳥取,山口	6	0.0	66.7	16.7	0.0	0.0	16.7
四国 ※徳島,香川,愛媛,高知	15	0.0	13.3	60.0	6.7	0.0	20.0
九州 ※長崎,熊本,大分,宮崎,鹿児島	78	3.9	26.9	62.8	0.0	0.0	6.4

※n数以外の数値はすべて%

芸術鑑賞会の意向については、実施校だけでなく非実施校にも尋ねている（図表 4.26）。これは「演劇以外を含む」芸術鑑賞会の実施意向となるので図表 4.25 の結果とは厳密には一致しないが、費用負担が最大のネックになっている点（全体での該当率が 45.5%）では同様である。他に「1. 学校の計画として時間が確保できれば実施を検討したい」が 45.0% で費用負担とほぼ同じ割合であったが、該当率が 3 番目に高かったのは「6. 実施を検討するつもりはない」（27.3%）であった。

「時間確保」の内訳を見ると、学校区分では特別支援学校が特に高く（53.3%）、定時制高校や中高一貫校では低めの該当率となっていた。また生徒数との関係では 750 人以上～1000 人未満を例外として、生徒数が多くなるほど該当率が高まる傾向が見られた。また「費用負担」では、定時制高校が高めの該当率（58.2%）であったほか、100 人以上～250 人未満をピーク（63.2%）として大規模校ほど該当率が下がる傾向が見られた。

これに対して「実施を検討するつもりはない」の該当率が特に高いカテゴリを見ると、中高一貫校（46.7%）、私立校（32.7%）、750 人以上～1000 人未満のやや大規模校（52.4%）などとなっており、おそらく財政的な余裕はあると思われるものの、学校の方針として実施しない意向であることを示すものであろう。

図表 4.26 芸術鑑賞会（演劇以外を含む）今後の実施意向（非実施校対象）

		1. 学校の 計画として 時間が確保 できれば実 施を検討し たい	2. 費用負 担が軽くな れば実施を 検討したい	3. 他の先 生や保護者 の同意や理 解が得られ れば実施を 検討したい	4. 学校側 の業務が簡 素化されれ ば実施を検 討したい	5. 劇団や 作品の情報 が得やすく なれば実施 を検討した い	6. 実施を 検討するつ もりはない	7. その他
全体	407	45.0	45.5	11.5	18.2	8.1	27.3	7.6
学校区分								
高校：全日制	277	46.2	44.0	12.6	19.1	4.7	29.2	5.4
高校：定時制	55	34.6	58.2	7.3	12.7	12.7	23.6	9.1
中高一貫校	15	26.7	40.0	0.0	13.3	0.0	46.7	13.3
特別支援学校	60	53.3	41.7	13.3	20.0	21.7	16.7	15.0
設置者								
国公立	358	44.4	45.3	12.3	18.2	8.7	26.5	7.8
私立	49	49.0	46.9	6.1	18.4	4.1	32.7	6.1
生徒数								
100人未満	108	38.0	53.7	5.6	12.0	10.2	17.6	13.9
100人以上～250人未満	68	47.1	63.2	10.3	26.5	19.1	22.1	2.9
250人以上～500人未満	76	50.0	40.8	17.1	17.1	9.2	26.3	10.5
500人以上～750人未満	66	54.6	40.9	22.7	18.2	3.0	25.8	4.6
750人以上～1000人未満	63	33.3	27.0	7.9	17.5	0.0	52.4	4.8
1000人以上	26	57.7	34.6	3.8	26.9	0.0	26.9	0.0
地域								
東北 ※岩手,福島	18	55.6	50.0	5.6	11.1	16.7	33.3	5.6
関東 ※群馬,埼玉,神奈川	90	40.0	26.7	8.9	15.6	4.4	41.1	6.7
中部 ※石川,岐阜	30	43.3	36.7	10.0	23.3	10.0	26.7	13.3
近畿 ※滋賀,京都,兵庫,奈良,和歌山	81	42.0	46.9	16.0	16.0	6.2	29.6	8.6
中国 ※鳥取,山口	52	53.8	50.0	11.5	23.1	9.6	15.4	7.7
四国 ※徳島,香川,愛媛,高知	77	45.5	57.1	11.7	16.9	7.8	22.1	3.9
九州 ※長崎,熊本,大分,宮崎,鹿児島	59	45.8	55.9	11.9	22.0	11.9	18.6	10.2

※n数以外の数値はすべて%

最後に芸術鑑賞会（演劇）実施校を対象に、芸術鑑賞会（演劇）実施の阻害要因になっている点を尋ねた結果を紹介する。この設問では9つの項目それぞれについて4択（「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」）で尋ねており、図表 4.27 では肯定側の該当率を合算した値を示している。

全体では「6. 費用負担が大きいので企画・実施に制約を受ける」（60.1%）、「4. 先生の間で情報交換をする場が少ない」（53.2%）、「3. 情報が多すぎて選ぶのが大変である」（41.4%）などの順に該当率が高かった。

学校区分では特別支援学校がどの項目を見ても他の学校区分より該当率が高い傾向があり、情報面・費用面・生徒数などあらゆる面で実施に制約を感じていることが改めて浮き彫りになった。また定時制高校も、特別支援学校ほど(数字の大きさ自体は) 顕著ではないが、費用面や情報不足の面で制約を感じている状況が見受けられた。

図表 4.27 芸術鑑賞会（演劇）の阻害要因

	n数	1 (31.5%)	2 (36.4%)	3 (41.4%)	4 (53.1%)	5 (23.2%)	6 (60.1%)	7 (24.7%)	8 (3.9%)	9 (22.8%)
		不足している劇団等の情報が不	が不足している作品に関する情報	ぶのが大変情報が多すぎて選	換をする場が生が少ない情報交	自校の裁量で決めるのが内容を	けるで企画・費用負担が大きい	するのには生徒鑑賞会を開催	るのが難しい保護者の理解を得	時間（9）を割きにくい活動のため
全体	461	31.5	36.4	41.4	53.1	23.2	60.1	24.7	3.9	22.8
学校区分										
高校：全日制	377	31.6	35.5	43.8	53.3	22.6	61.5	23.9	4.0	22.3
高校：定時制	11	36.4	45.5	18.2	36.4	27.3	63.6	54.6	9.1	18.2
中高一貫校	37	18.9	18.9	37.8	46.0	21.6	43.2	16.2	0.0	21.6
特別支援学校	36	55.6	61.1	27.8	63.9	30.6	61.1	33.3	5.6	30.6
設置者										
国公立	369	35.8	39.3	43.4	53.9	24.9	61.2	26.3	4.3	23.6
私立	92	19.6	25.0	33.7	50.0	16.3	55.4	18.5	2.2	19.6
生徒数										
100人未満	33	51.5	48.5	18.2	42.4	30.3	60.6	48.5	6.1	18.2
100人以上～250人未満	45	40.0	44.4	31.1	57.8	31.1	73.3	62.2	6.7	28.9
250人以上～500人未満	101	25.7	32.7	45.5	50.5	23.8	74.3	40.6	4.0	23.8
500人以上～750人未満	129	31.8	38.0	43.4	53.5	20.9	55.8	20.2	2.3	22.5
750人以上～1000人未満	81	35.8	37.0	55.6	56.8	28.4	54.3	3.7	6.2	22.2
1000人以上	72	26.4	27.8	33.3	54.2	12.5	45.8	0.0	1.4	20.8
地域										
東北 ※岩手,福島	48	39.6	43.8	37.5	52.1	14.6	56.3	29.2	6.3	20.8
関東 ※群馬,埼玉,神奈川	117	28.2	32.5	45.3	53.0	17.9	59.8	21.4	4.3	25.6
中部 ※石川,岐阜	72	31.9	34.7	43.1	58.3	27.8	47.2	26.4	5.6	22.2
近畿 ※滋賀,京都,兵庫,奈良,和歌山	125	32.8	37.6	39.2	52.0	27.2	66.4	25.6	2.4	23.2
中国 ※鳥取,山口	6	16.7	33.3	16.7	33.3	0.0	83.3	0.0	0.0	33.3
四国 ※徳島,香川,愛媛,高知	15	20.0	26.7	20.0	53.3	33.3	46.7	6.7	13.3	20.0
九州 ※長崎,熊本,大分,宮崎,鹿児島	78	38.5	39.7	46.2	52.6	25.6	65.4	29.5	1.3	19.2

※n数以外の数値はすべて%（「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の合算）

補論1. 定時制高校・特別支援学校以外の小規模校の状況

本章1節から6節にかけての集計・分析では、学校区分や設置者によって芸術鑑賞会を取り巻く状況に大きな違いがあることが浮かび上がった。具体的には定時制高校や特別支援学校において、芸術鑑賞会の機会が必ずしも十分に享受されていない状況であり、また他方では大規模な私立学校など、潤沢な予算を使った鑑賞会が実施されている高校も存在する実態である。また無視できない結果が現れたのが学校規模との関係である。象徴的なのが演劇の芸術鑑賞会に対する生徒1人当たりの公演負担額であり、図表 4.23 に示した通り、一部の地域ではあるが生徒数が少ない学校ほど高額な公演料を負担している傾向のあることが明らかとなった。

こうした学校規模と芸術鑑賞会の関連については、縷々述べた通り定時制高校や特別支援学校の存在が大きな背景要因となっている。というのは第1章で紹介した通り、100人未満の小規模校のうち3/4近くが定時制高校と特別支援学校で占められているためだ正確には32.1%が定時制高校、42.1%が特別支援学校。図表 1.13 参照）。また逆に1000人以上の大規模校では59.0%が私立高校である。したがってこれまで分析結果の解釈をするにあたっては学校規模の問題は学校区分および設置者を大きな背景要因として解釈してきたのである。

しかし小規模な学校の抱える課題をそれらの要因だけで解釈し尽くすことはできるだろうか。おそらく答えは「否」である。なぜなら今回の調査で得られた小規模校には、中山間地域や離島など人口の少ない地域の学校も

多分に含まれるからである。実際に調査サンプルから全日制の国公立高校かつ生徒数 100 人未満の学校を集計してみると図表 4.28 の通りになる。

表を見ると市域にある学校と町村にある学校がほぼ半々であり、一見すると先ほど述べたほどの僻地ではない印象を受けるであろう。しかし市域といってもあくまで住所上のそれであり、実際には平成期に周辺の市町村と合併したかつての町村が多く含まれている。その好例は山口県と愛媛県である。どちらも住所上は市域に所在する学校が多いが、実はそのいずれも分校であり、最寄りの JR の駅から車・バスで 1 時間前後かかる山間部や瀬戸内海に浮かぶ離島の学校も見られる。

また逆に、町村と言っても現実には大都市周辺のベッドタウンとして存続しているような自治体である可能性もあるが、所在地を見る限りそのようなケースは少数派であり、回答者の特定を避けるため学校名や住所を紹介することはできないのだが、表にあげられた学校の多くはやはり中山間部や離島などに所在している。

図表 4.28 全日制公立高校で生徒数 100 人未満の学校

	該当校数	うち市域に所在	うち町村に所在	うち分校	各県該当校 1 校当たりの生徒数平均
岩手県	7校	1校	6校	0校	69.7人
福島県	6校	1校	5校	1校	55.2人
群馬県	3校	0校	3校	0校	62.7人
埼玉県	1校	0校	1校	0校	77.0人
兵庫県	2校	2校	0校	0校	70.0人
奈良県	1校	0校	1校	0校	60.0人
鳥取県	2校	0校	2校	0校	90.0人
山口県	5校	4校	1校	4校	47.2人
徳島県	2校	1校	1校	2校	81.5人
愛媛県	6校	4校	2校	5校	60.7人
高知県	2校	2校	0校	1校	52.0人
長崎県	5校	3校	2校	0校	48.6人
熊本県	3校	2校	1校	2校	47.7人
大分県	2校	2校	0校	1校	65.0人
鹿児島県	5校	3校	2校	0校	77.0人
計	52校	25校	27校	16校	

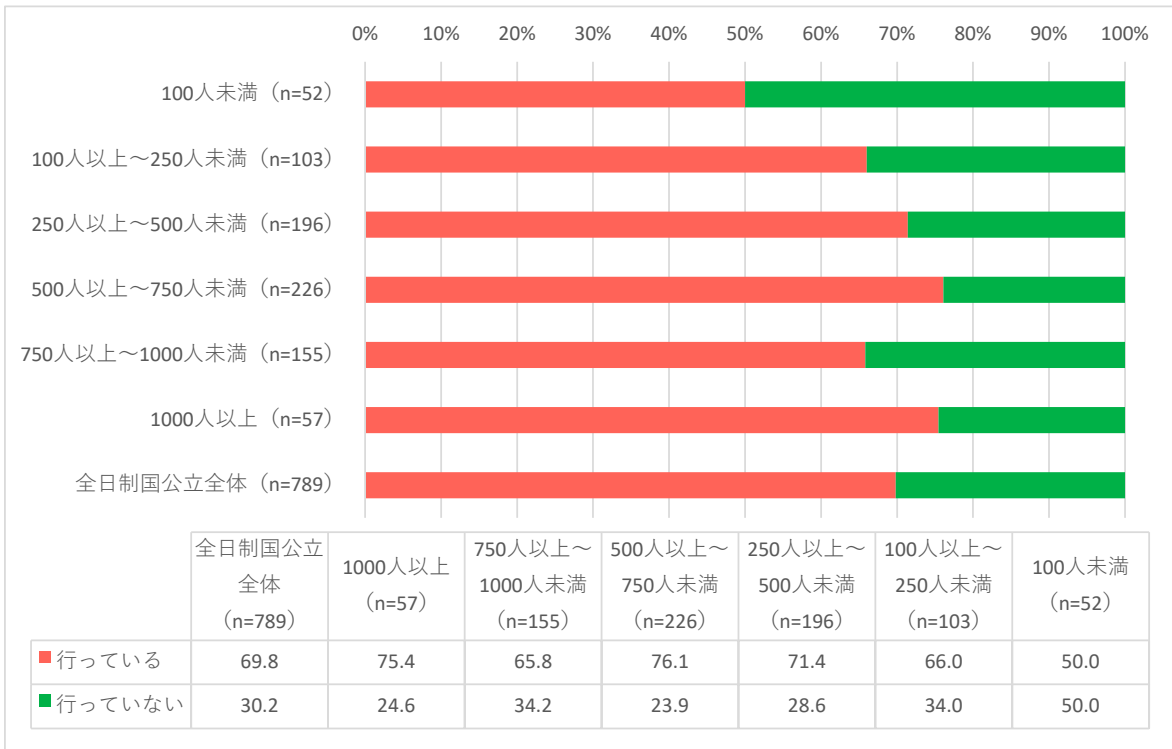
このような実情を鑑みると、こうした小規模校には芸術文化へのアクセスに関して定時制高校や特別支援学校とは異なった形での不利があると考えられることから、演劇の普及におけるニーズや格差を探究しようとする本報告書の観点からは、その状況をぜひとも明らかにする必要がある。

そこでこの補論 1 では全日制の国公立高校（国立高校はサンプル中 1 校だけなので実質的にはほぼ公立高校であるが）に絞って、学校規模と芸術鑑賞会にかかわる各種質問結果との関連を分析する。定時制高校と特別支援学校を除くのは既に述べているとおり、小規模校の中でもこれら 2 つの学校区分を背景としない学校の傾向を検討したいためである。また中高一貫校や私立高校を除くのは、中規模・大規模校との比較対照を考えた際に、これらを含んでしまうと規模の要因と公立・私立の要因が混在してしまい、ここでの検討目的に合致しない分析結果になってしまいかねないからである。今回除外する学校区分・設置者による傾向はこれまでの節ですでに多くを論じているため、繰り返すが本補論では全日制・国公立の中での規模による傾向を検討したい。なお、記述の煩雑化を避けるため、全ての質問項目にわたって集計・分析することは避け、学校規模とのかかわりで意義のある知見を導き出せる質問項目に絞って分析を行う。

(1) 芸術鑑賞会（演劇以外を含む）の実施状況

図表 4.29 は芸術鑑賞会（演劇以外を含む）の実施有無を比較集計したものである。集計対象の全日制・国公立高校の全体（789校）では69.8%が実施しており、基本的には（750人以上～1000人未満を例外として）規模が大きいくほど実施率が高い。中小規模の方に注目すると、100人以上～250人未満の区分では実施率66.0%で全体平均とあまり変わらないにもかかわらず、100人未満の区分では実施率50.0%と大幅に下がる。

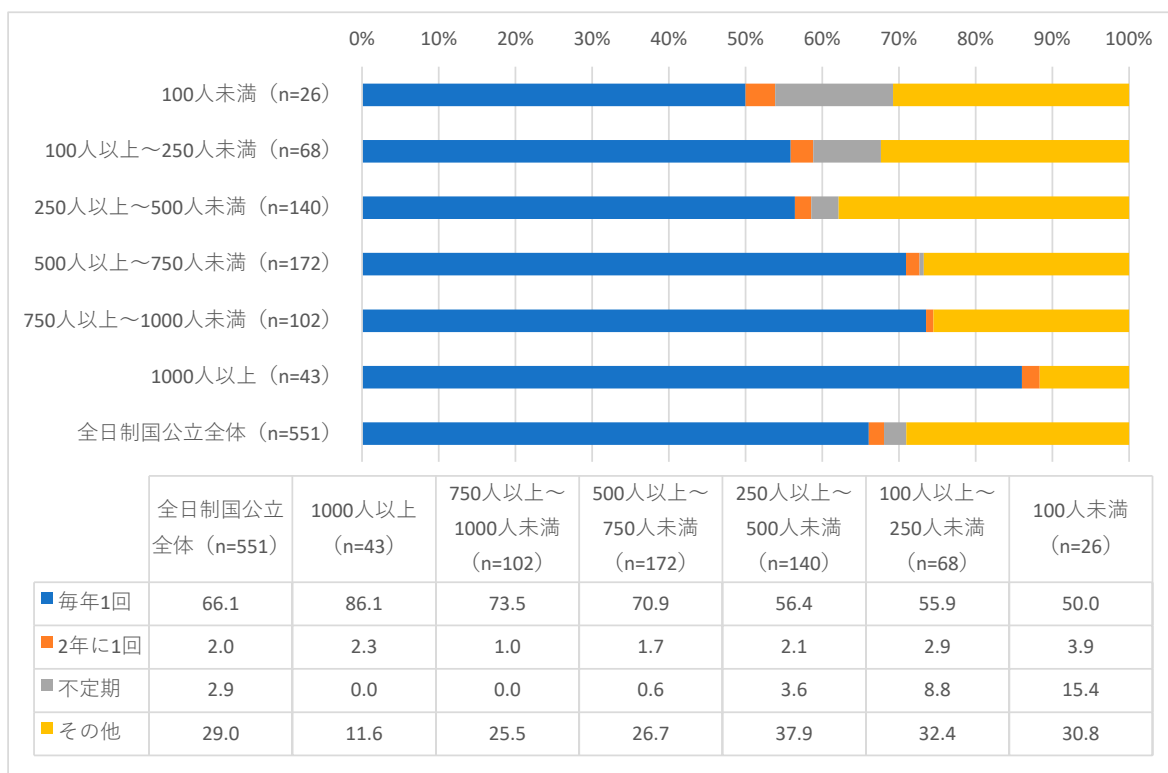
図表 4.29 芸術鑑賞会（演劇以外を含む）の実施有無



次に、芸術鑑賞会（演劇以外を含む）を行っている学校（全体で551校）を母数として実施頻度を比較したのが図表 4.30 である。全体では66.1%が毎年1回実施しており、この水準以上の頻度になったのは500人以上～750人未満の区分より上の大規模校であった。しかしそれ以下の区分になると、250人以上～500人未満で毎年1回が56.4%と大きく高頻度の割合が下がり、100人未満では50.0%まで下がる。ちなみに「その他」の中身は「3年に1回」「3年に1～2回」であるが、100人未満の区分では「その他」の割合も下がり、代わって「不定期」が15.4%となる。

以上の通り、芸術鑑賞会の実施有無・頻度いずれで見ても大規模校と中小規模校には格差があり、100人未満の小規模校では芸術鑑賞会の機会が特に乏しい状況にあることが明らかになった。

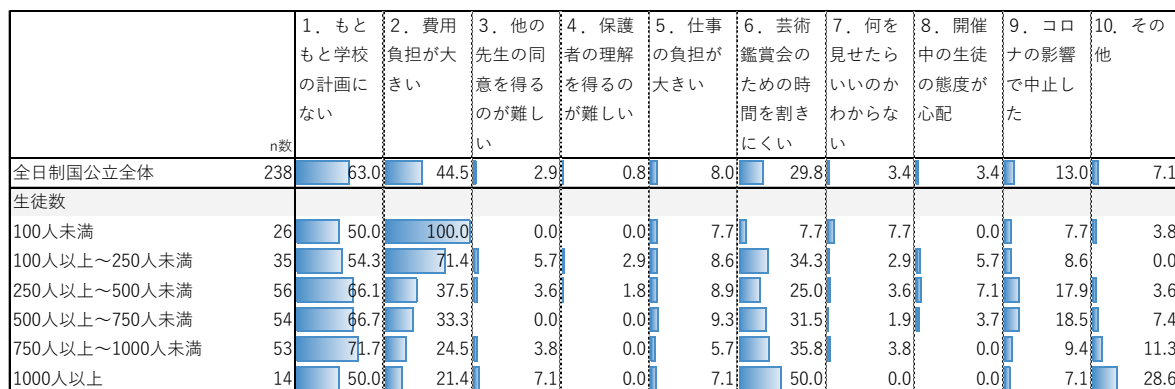
図表 4.30 芸術鑑賞会（演劇以外を含む）の実施頻度



では、芸術鑑賞会（演劇以外を含む）を行っていない理由はどのようなものであろうか。回答対象者全体では「1.もともと学校の計画にない」（63.0%）、「2.費用負担が大きい」（44.5%）、「6.芸術鑑賞会のための時間を割きにくい」（29.8%）などの該当率が高く、「9.コロナの影響で中止した」は13.0%であった。

生徒数別で明瞭な傾向がうかがえるのは項目1,2,6で、「1.もともと学校の計画にない」と「6.芸術鑑賞会のための時間を割きにくい」では概ね大規模校ほど該当率が上がる傾向が見られた。一方「2.費用負担が大きい」では小規模校ほど該当率が高く、母数が小さいため一般化できない数字ではあるが、100人未満の区分では回答者のすべてが該当していた。後ほど公演料負担の箇所でも言及するが、予算上の制約・負担が小規模の学校にとりわけ重くのしかかっていることが見て取れる結果である。

図表 4.31 芸術鑑賞会（演劇以外を含む）を行っていない理由（複数回答）



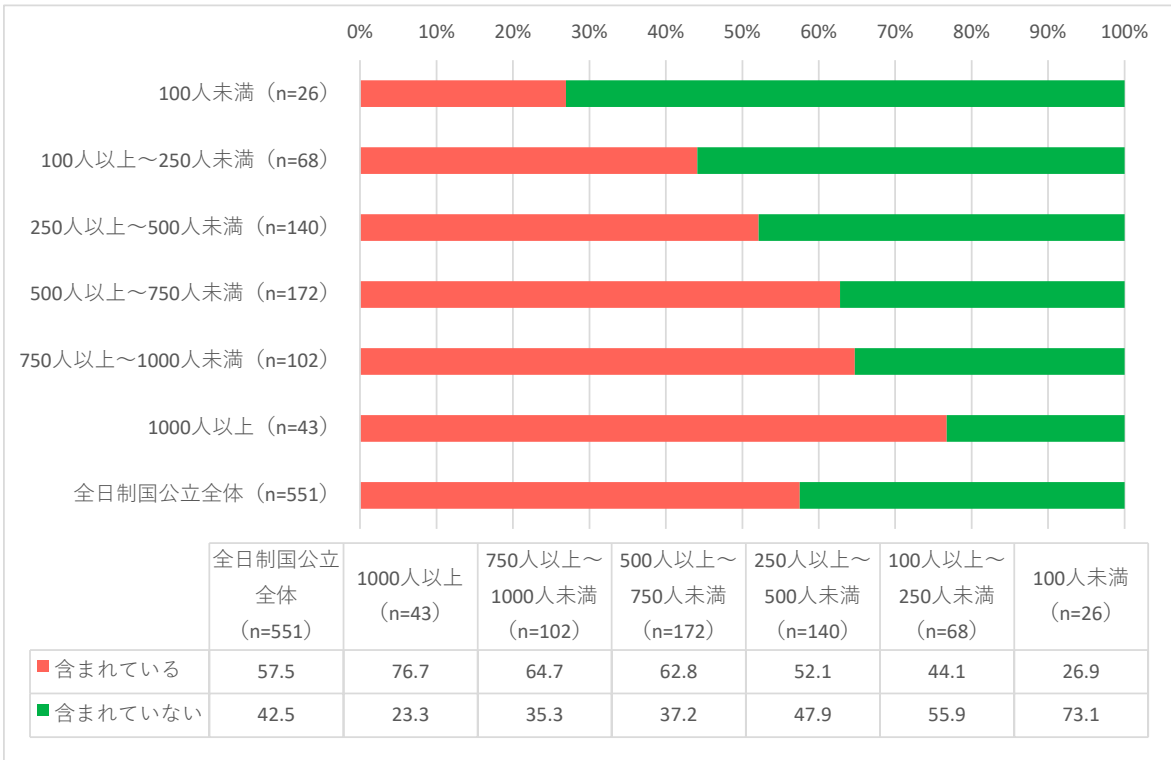
※n数以外の数値はすべて%

(2) 芸術鑑賞会（演劇）の実施状況

過去3年間に実施した芸術鑑賞会のジャンルに演劇が含まれているか否かについて比較した(図表 4.32)。回答対象全体では 57.5%が演劇の芸術鑑賞会を実施しており、芸術鑑賞会（演劇以外を含む）と同様に生徒数が多いほど実施率が高くなる傾向が見られる。全体水準を超えるのは 500 人以上～750 人未満の区分より上であり、250 人以上～500 人未満もやや劣るが 50%以上に達している。

しかし 100 人以上～250 人未満では 40%台に下がり、100 人未満ではわずか 26.9%の実施率であった。

図表 4.32 芸術鑑賞会（演劇）の実施有無



では、実施ジャンルにおいて学校規模による傾向はあるのだろうか。図表 4.33 で 17 ジャンルの比較を行ったところ、演劇以外に生徒数との関連傾向が明瞭なのはミュージカルと落語・演芸で、どちらも概ね大規模校ほど該当率が高くなる傾向にあった。

100 人未満の小規模校で他の区分より該当率が高かったのは、人形劇・影絵 (7.7%)、室内楽 (30.8%)、バレエ・ダンス (7.7%)、合唱 (3.8%、ただし 1000 人以上の 4.7%よりは低い)、歌舞伎・文楽 (3.8%、ただし 1000 人以上の 4.7%よりは低い)、能・狂言 (11.5%、ただし 500 ～ 750 人の 11.6%よりは低い)、民俗芸能 (7.7%、ただし 1000 人以上の 9.3%よりは低い) と、多岐にわたる。ただし母数が 26 校であるためパーセンテージの変動幅が大きいことが影響している可能性がある点には注意が必要である(この点では 1000 人以上の区分も同様)。

ちなみに 100 人未満では「その他」が 15.4% (4 校) と該当率が高いが、自由回答を見ると「絵画鑑賞」、「イリュージョン」、「手品」、「過去 3 年間はコロナ禍で実施できず」であった。

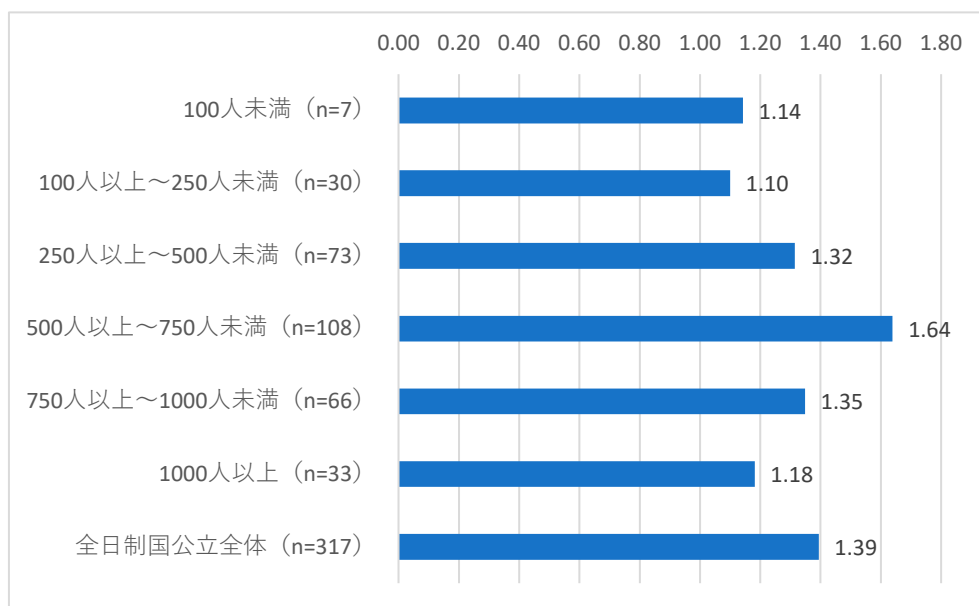
図表 4.33 過去3年間の芸術鑑賞会 上演ジャンル (複数回答)

	100人未満 (n=26)	100人以上～ 250人未満 (n=68)	250人以上～ 500人未満 (n=140)	500人以上～ 750人未満 (n=172)	750人以上～ 1000人未満 (n=102)	1000人以上 (n=43)	全日制国公立 全体 (n=551)
1. 演劇	23.1	35.3	45.7	51.2	52.0	62.8	47.5
2. 人形劇・影絵	7.7	1.5	0.0	1.7	1.0	0.0	1.3
3. ミュージカル	7.7	10.3	14.3	14.5	17.6	23.3	14.9
4. バレエ・ダンス	7.7	7.4	2.1	2.3	1.0	2.3	2.9
5. オーケストラ	11.5	10.3	17.1	15.7	19.6	9.3	15.4
6. オペラ	3.8	4.4	2.1	1.2	2.9	4.7	2.5
7. 室内楽	30.8	17.6	8.6	18.6	17.6	18.6	16.3
8. 合唱	3.8	1.5	0.7	1.2	2.9	4.7	1.8
9. ポピュラー音楽	15.4	14.7	21.4	15.1	20.6	7.0	17.1
10. 伝統音楽	15.4	25.0	12.9	16.3	13.7	27.9	16.9
11. 歌舞伎・文楽	3.8	0.0	1.4	1.7	1.0	4.7	1.6
12. 能・狂言	11.5	1.5	7.9	11.6	9.8	4.7	8.5
13. 日本舞踊	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
14. 落語・演芸	30.8	32.4	27.9	33.7	35.3	37.2	32.5
15. 民族芸能	7.7	0.0	5.7	4.1	5.9	9.3	4.9
16. 映画	0.0	1.5	2.1	0.6	4.9	0.0	1.8
17. その他	15.4	5.9	7.9	6.4	9.8	7.0	7.8

※n数以外の数値はすべて%

続いて演劇の芸術鑑賞会に関して過去3年間の開催頻度を比較してみよう。図表 4.34 を見ると、全体平均が1.39回であるのに対し、100人未満が1.14回、100人以上～250人未満が1.10回など、小規模校において開催頻度の低いことが見て取れる。もっとも、規模の大小と回数の多寡は明瞭に関連しているとは言えず、ピークは500人以上～750人未満(1.64回)であった。ただ、集計母数(ここでは演劇の芸術鑑賞会を行っている学校)がかなり限られてきているため、100人未満の区分は一般化できる知見とは言えない。あくまで参考値と考えられたい。

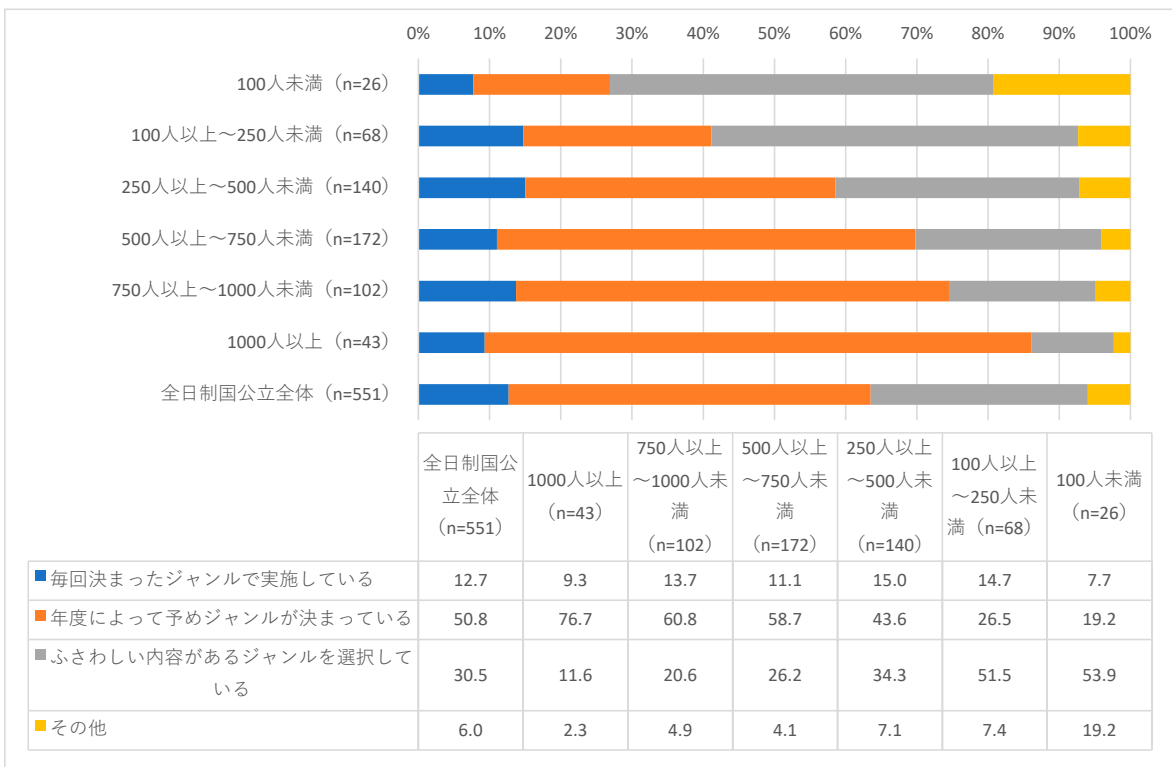
図表 4.34 過去3年間における芸術鑑賞会(演劇)の実施回数 ※平均値



(3) 劇団・作品の決定方法

質問順がやや戻るが、芸術鑑賞会（演劇以外を含む）を実施している学校を対象に尋ねた、毎年度のジャンル選択方法を見たものが図表 4.35 である。全体としては「年度によって予めジャンルが決まっている」（50.8%）、「ふさわしい内容があるジャンルを選択している」（30.5%）と続くが、前者の比率は学校規模が大きいほど高まっているのに対し、後者の比率は小規模校ほど高まる傾向があり、100人未満の区分では前者が19.2%、後者が53.9%となっている。つまり大規模な学校ほど毎年あるいは年度ごとに決まったジャンルで実施する傾向があるのに対し、小規模校ほどジャンルが固定されておらず、毎年度内容によってジャンルを選んでいる状況がうかがわれるのである。

図表 4.35 芸術鑑賞会（演劇以外を含む）のジャンル選択方法

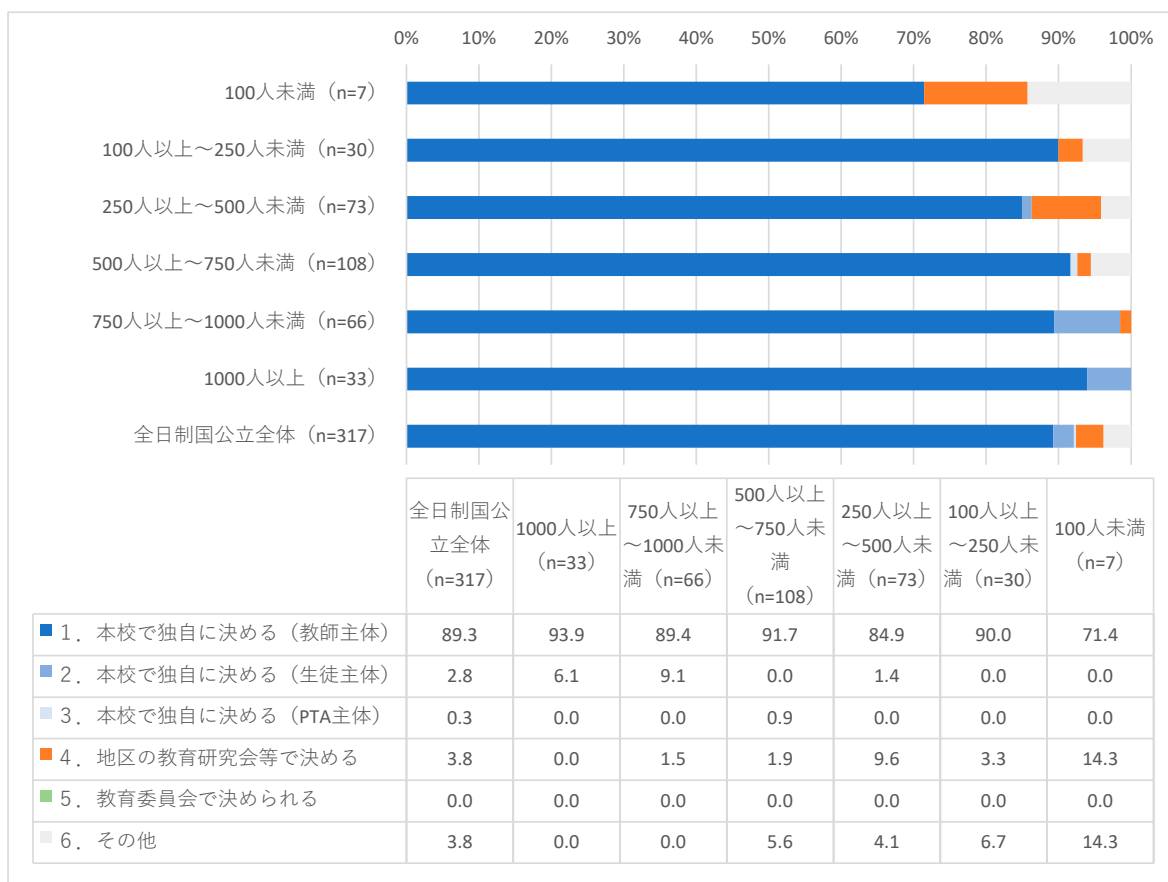


※数値はいずれも%、回答対象は芸術鑑賞会（演劇以外を含む）を実施している学校

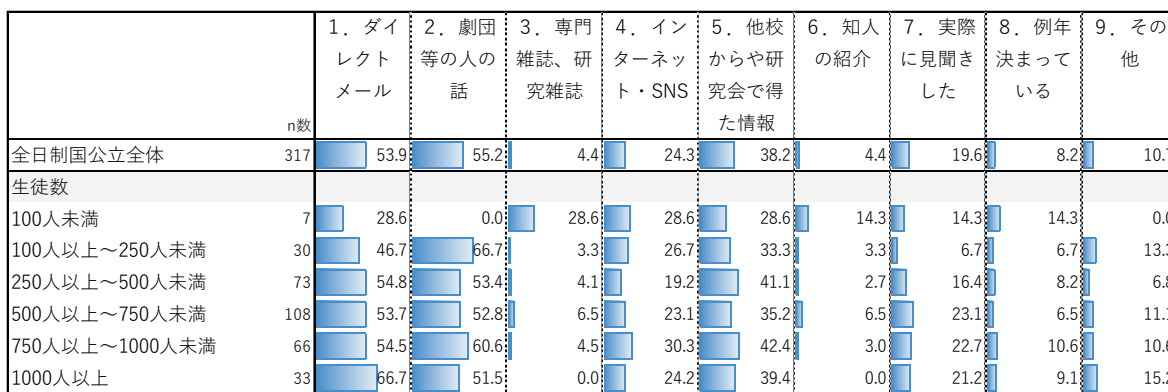
演劇の芸術鑑賞会を実施している学校を対象とした質問により、内容の決定主体を比較集計した（図表 4.36）。全体としては「本校で独自に決める」の3区分を合わせた割合が9割を超え、750人以上～1000人未満より上の大規模校では特にその比率が高い。これに対して「地区の教育研究会等で決める」の割合が高いのは100人未満14.3%（ただし7校中1校）、250人以上～500人未満の9.6%（73校中7校）であった。100人未満の区分はあくまで参考値と考えるべきだが、「その他」の自由回答には「地元の中学校と協力して決める」といった回答もあることから、規模の問題を解消するために小中も含む近隣の学校との合同開催となっている可能性があり、内容決定にあたっては外部との協議が欠かせない状況が考えられる。開催形態については後ほど改めて触れる。

次に演劇の作品・団体を選ぶ際に参考にしている情報について見ると（図表 4.37）、学校規模との関連が明らかと思われるのは「1.ダイレクトメール」、「5.他校からや研究会で得た情報」、「7.実際に見聞きた」の3項目であり、いずれも概ね規模が大きいほど該当率が高まる傾向が見られた。これももちろん100人未満の区分は参考値と考えなければならないが、学校の立地・規模によるある種の情報格差が生じている可能性がうかがわれる。

図表 4.36 芸術鑑賞会（演劇）の内容決定主体



図表 4.37 劇団・作品選考の際に参考とする情報（複数回答）



※n数以外の数値はすべて%

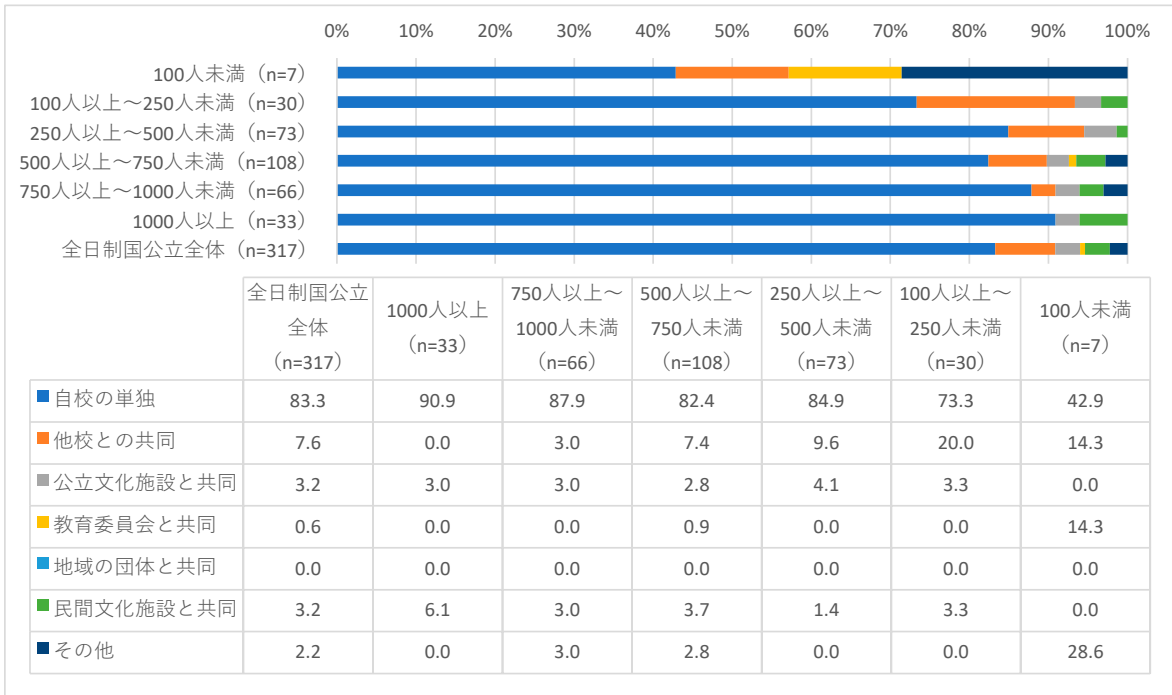
(4) 開催の形態、場所、会場の準備

演劇の芸術鑑賞会の開催形態について比較集計結果を図表 4.38 に示した。全体及び「250人以上～500人未満」より上の区分では80～90%が「自校の単独」と回答しているのに対し、100人未満の区分ではその比率が50%未満に下がり、他校・教育委員会・その他の比率が多くなっている。値そのものは一般化できないが、内容決定にあたって外部主体との協議が行われていたことと併せ考えれば、自校独自の催しというよりは他校などと共同での地域的催しとして芸術鑑賞会が行われている可能性は高いと思われる。

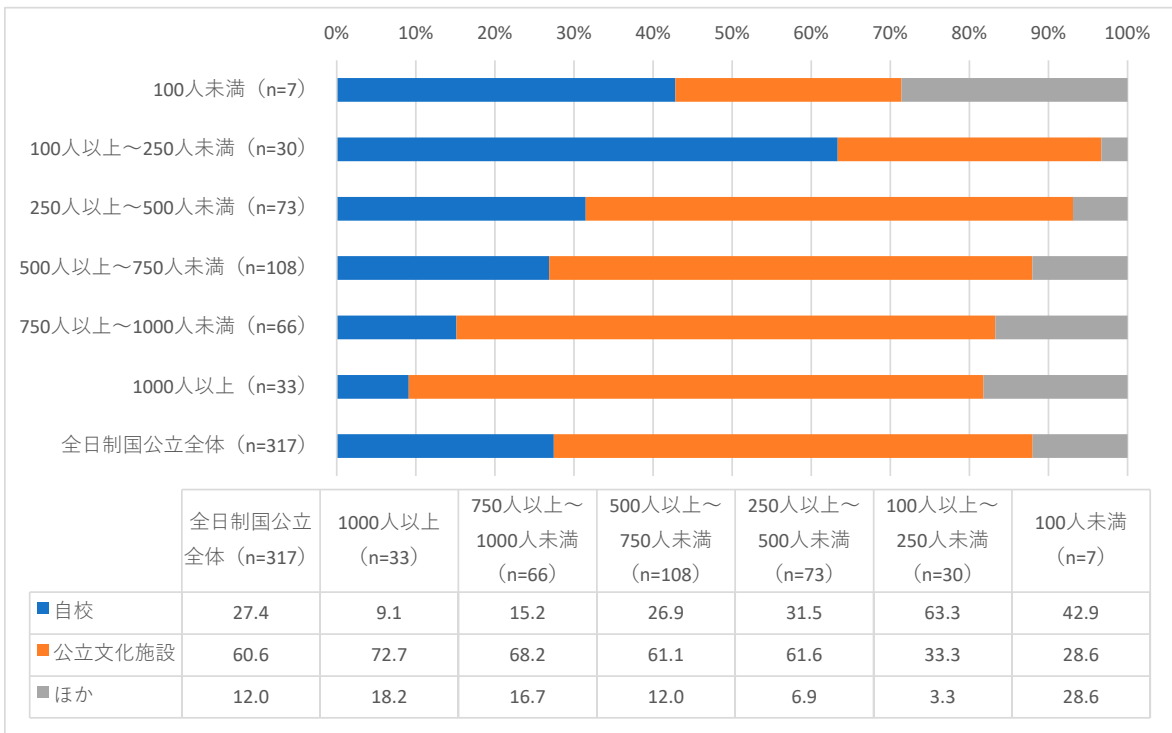
次に芸術鑑賞会（演劇）の開催場所を見ると（図表 4.39）、全体では公立文化施設が6割を占め、1000人以上から250人以上～500人未満までその割合は概ね変わらないのに対し、それ以下の区分では公立文化施設の比率が下がり、代わって自校の比率が高めとなっている。100人未満の区分の場合、これまでの質問項目の分析

を踏まえると外部との共同開催である可能性が高いと考えられる割に、近隣に適切な会館・ホールが得られないためであろうか、場所としては自校を提供しなければならない状況にあることが示唆される。他方、会場を準備した主体としては、100人未満の区分では自校の比率が他の区分より小さく、代わって劇団（7件中1件）、他校（7件中1件）、教育委員会（7件中1件）など外部主体が多めとなる。図表4.39の結果と整合的に解釈するならば、場所を自校で提供しつつ準備は外部主体の手助けを得ているということになるだろうか。ただ、これも確実視できる知見ではないため、更なる実態把握が必要である。

図表 4.38 芸術鑑賞会（演劇）の開催形態

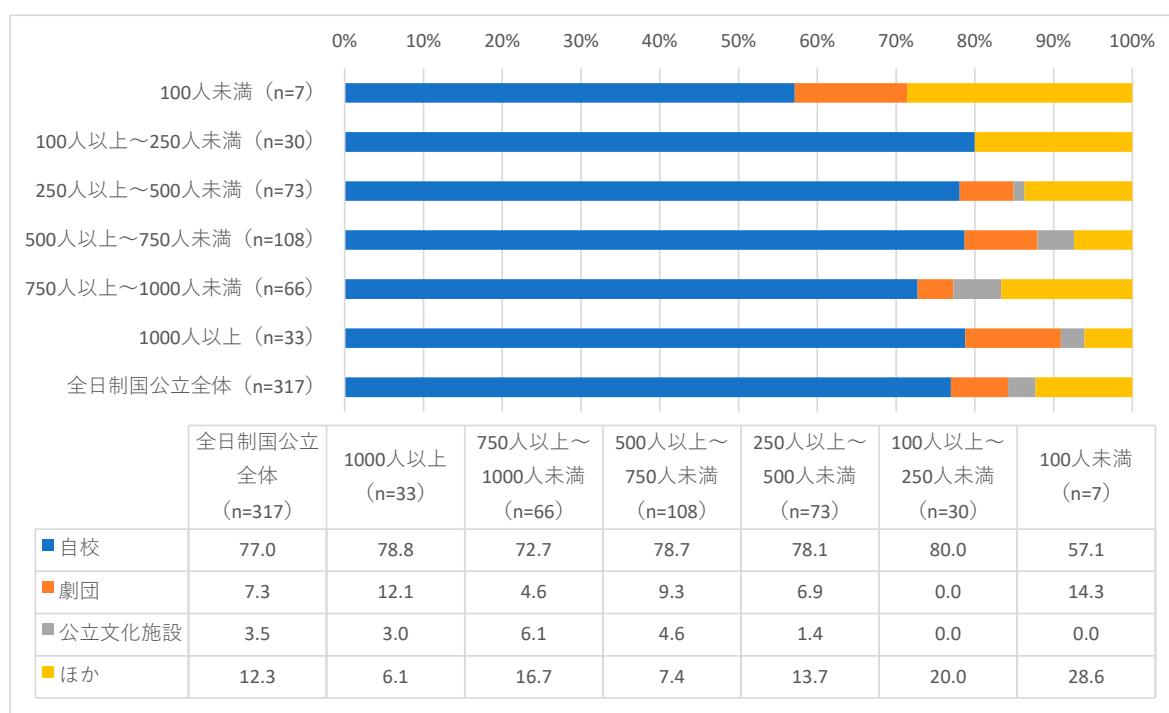


図表 4.39 芸術鑑賞会（演劇）の開催場所



※本来の選択肢のうち該当率の低い「他校」「民間文化施設」「その他」は「ほか」にまとめた。

図表 4.40 芸術鑑賞会（演劇）の開催場所を準備した主体



※本来の選択肢のうち該当率の低い「他校」「民間文化施設」「教育委員会」「地域の団体」「その他」は「ほか」にまとめた。

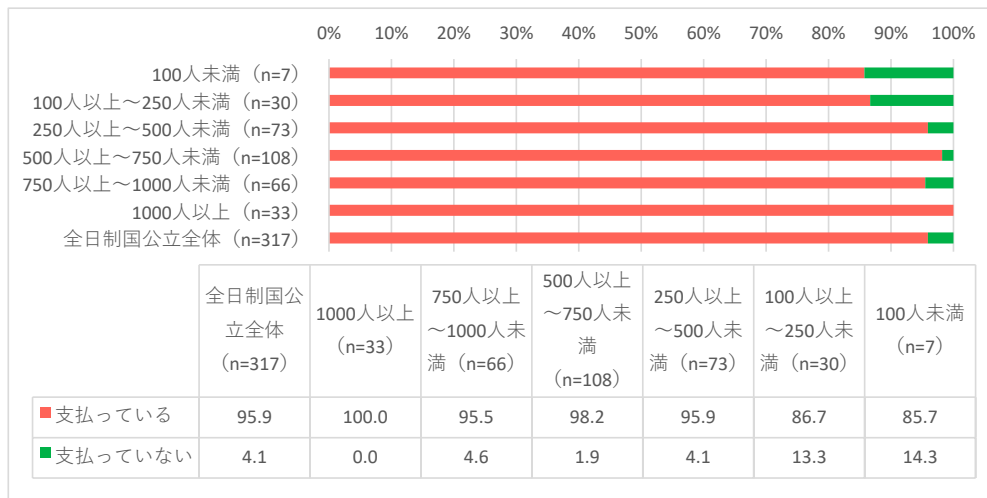
(5) 公演料負担の状況

公演料負担の有無を比較集計したのが図表 4.41 である。全体としては 95%前後が公演料を支払っているが、100人以上～250人未満より下の小規模校ではその割合が 85%前後に下がっている。ただし実数としては 1 校～4 校程度の差であり誤差と解釈すべき範囲である。

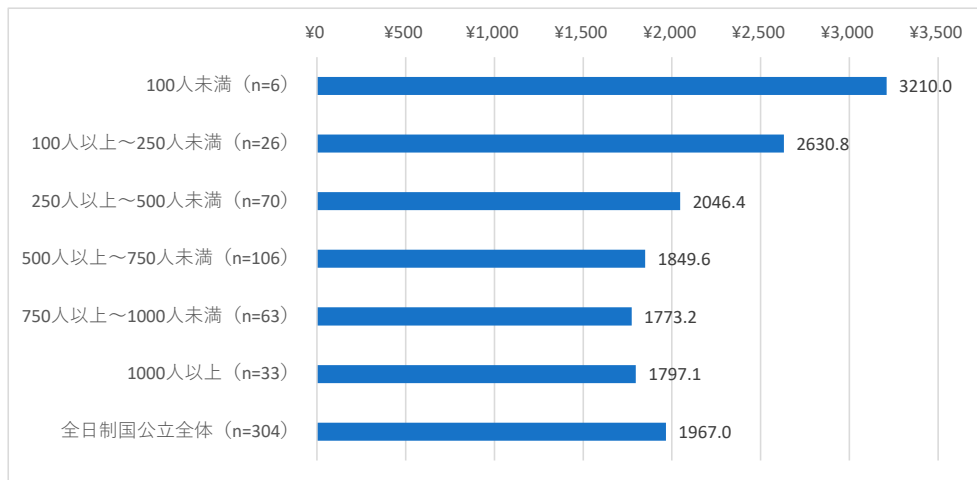
しかし次の公演料負担を見ると、学校規模による差は誤差として見過ごすには大きい。全体平均が 1967.0 円で、1000人以上から 250人以上～500人未満の区分までは全体平均との差は 100 円以内に収まっているのに対し、100人以上～250人未満では 2630.8 円で全体平均との差は 663.8 円、100人未満では 3210.0 円となり全体平均との差は 1243.0 円にも及んでいる。なお、6 校の金額を個々に見ると、5760 円、4500 円が各 1 校、3000 円が 2 校、2500 円が 1 校、500 円が 1 校であった。500 円の学校は何らかの共同事業ないし助成事業の枠組みの中での最小限の負担とみられるが、それ以外の学校は自己負担の割合が高いことがうかがわれる。

これもまた数字そのものを鵜呑みにすることは禁物だが、傾向として学校規模による格差がある可能性は高いように思われる。舞台芸術の機会を得ることがより難しく、その分本来なら費用面での補助が最も必要とされる僻地の学校が、全国的に見て最も高い水準の公演料を負担しなければならないとするならば、これは大いに憂慮すべき状況であろう。

図表 4.41 芸術鑑賞会（演劇）への公演料支払いの有無



図表 4.42 芸術鑑賞会（演劇）への公演料負担（生徒1人あたり）※平均値



(6) 芸術鑑賞会（演劇）への意向

まず演劇の芸術鑑賞会を行っている学校を対象とした質問の比較集計結果を図表 4.43 に示す。学校規模との関連は明瞭に表れており、「従来と変わらない」とした学校は大規模校ほど多いのに対し、小規模校ほど「費用等の制約の範囲内でできるだけ実施する」と回答している。100人未満の区分はパーセンテージの増減が過大になりがちだが、これまでの分析結果と照らし合わせてある程度妥当な結果だと思われる。

次の図表 4.44 は芸術鑑賞会（演劇以外を含む）の非実施校に尋ねた結果である。こちらでも小規模校における「費用負担が軽くなれば実施を検討したい」の該当率の高さが注目される。「実施を検討するつもりはない」については（1000人以上を例外として）概ね大規模校ほど該当率が高く、裏を返せば小規模校での実施意向は必ずしも低いわけではないと考えられるため、なおのこと実施の障害になっている費用面の課題解決が今後の演劇鑑賞会の普及を考えるにあたって鍵となるであろう。

補論1の最後に、学校側で演劇の芸術鑑賞会の阻害要因と認識している項目について比較検討する。図表 4.45 を見ると、小規模校ほど該当率が高い傾向を示しているのは「(6) 費用負担が大きいので企画・実施に制約を受ける」、「(7) 芸術鑑賞会を開催するには生徒数が不十分」、「(1) 劇団等の情報が不足している」であった。項目 6・7 についてはこれまで縷々述べてきた内容と重なる部分があり、これ以上の贅言は避けたい。劇団の情報に関しては、前掲の図表 4.37 で見たように各種の参考情報が十分行き届いていない点と関連しているように思われるが、「(2) 作品に関する情報が不足している」は他の区分とさほど変わらない水準であることから、集計母数が少ないための誤差の可能性もある。

図表 4.43 芸術鑑賞会（演劇）今後の実施意向（実施校対象）

	n数	1. 鑑賞教室をいっそう積極的に実施する	2. 費用等の制約の範囲内でできるだけ実施する	3. 従来と変わらない	4. 鑑賞教室は減らしていく	5. 鑑賞教室は実施しない	6. 未定
全体	317	2.8	31.9	59.3	1.0	0.0	5.1
生徒数							
100人未満	7	0.0	57.1	28.6	0.0	0.0	14.3
100人以上～250人未満	30	0.0	46.7	40.0	0.0	0.0	13.3
250人以上～500人未満	73	2.7	38.4	52.1	0.0	0.0	6.9
500人以上～750人未満	108	2.8	31.5	59.3	1.9	0.0	4.6
750人以上～1000人未満	66	6.1	25.8	65.2	1.5	0.0	1.5
1000人以上	33	0.0	12.1	87.9	0.0	0.0	0.0

※n数以外の数値はすべて%

図表 4.44 芸術鑑賞会（演劇以外を含む）今後の実施意向（非実施校対象）

	n数	1. 学校の計画として時間が確保できれば実施を検討したい	2. 費用負担が軽くなれば実施を検討したい	3. 他の先生や保護者の同意や理解が得られれば実施を検討したい	4. 学校側の業務が簡素化されれば実施を検討したい	5. 劇団や作品の情報が得やすくなれば実施を検討したい	6. 実施をつもりはない	7. その他
全体	238	45.0	42.9	13.4	18.9	4.6	29.4	5.9
生徒数								
100人未満	26	15.4	76.9	3.8	7.7	11.5	11.5	11.5
100人以上～250人未満	35	45.7	71.4	11.4	22.9	5.7	20.0	0.0
250人以上～500人未満	56	55.4	39.3	16.1	19.6	7.1	25.0	8.9
500人以上～750人未満	54	55.6	38.9	24.1	16.7	3.7	25.9	5.6
750人以上～1000人未満	53	34.0	20.8	7.5	18.9	0.0	54.7	5.7
1000人以上	14	57.1	21.4	7.1	35.7	0.0	21.4	0.0

※n数以外の数値はすべて%

図表 4.45 芸術鑑賞会（演劇）の阻害要因

	n数	1. 足る劇団等の情報が不足している	2. 鑑賞作品に関する情報が不足している	3. 変な情報が多い	4. 先生が少ない	5. 学校の裁量で決められる内容が難しい	6. 企画・費用・実施に制約を受け	7. 芸術鑑賞会を開催	8. 難しい	9. 保護者の理解を得	10. 時間を割く活動のため
全体	317	34.1	37.2	45.7	53.9	24.0	61.5	24.6	4.1	23.3	
生徒数											
100人未満	7	57.1	42.9	14.3	28.6	28.6	71.4	57.1	0.0	0.0	
100人以上～250人未満	30	40.0	40.0	26.7	56.7	36.7	76.7	73.3	6.7	26.7	
250人以上～500人未満	73	26.0	32.9	49.3	52.1	28.8	71.2	39.7	5.5	24.7	
500人以上～750人未満	108	31.5	38.0	44.4	51.9	18.5	55.6	18.5	2.8	25.0	
750人以上～1000人未満	66	39.4	39.4	59.1	59.1	28.8	56.1	4.5	4.5	22.7	
1000人以上	33	39.4	36.4	39.4	57.6	9.1	54.5	0.0	3.0	18.2	

※n数以外の数値はすべて%（「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の合算）

補論2. 平成15年度調査との比較

本調査（令和5年度調査）では、平成15年度（2003年度）に劇団協が実施した「学校における舞台芸術活動実態に関するアンケート」との比較を想定し、多くの質問項目を踏襲した。本節では両調査共通の質問項目について比較結果を紹介する。

(1) 平成15年度調査の概要

平成15年度調査の概要は次の通りである。同調査では小学校・中学校・高等学校の比較を行うことが主眼とされており、高等学校のみを対象とした本調査とは調査趣旨が異なっている。また、本調査では協力が得られた府県および学校区分の全体に調査を実施したのに対して、平成15年度調査では全国約4万校のすべての学校リストから学校区分（小・中・高の3カテゴリ）によって層化して無作為抽出する方法を採っている。これら2つの点で平成15年度調査と本調査では調査方法が異なっており、両調査のサンプル構成にも無視できない差異がある（図表4.47～4.50）。したがって、結果をそのまま過去20年の変化とみなすことはできないが、同一の質問項目で得られた調査的事実としては一定の価値があると考えられることから、1つの参考として紹介したい。

図表 4.46 平成15年度調査の概要

項目	概要
調査対象	全国の小学校・中学校・高等学校
抽出方法	学校リスト(全40439校)からの層化無作為抽出
調査方法	郵送質問紙調査
質問項目	芸術鑑賞会(ジャンル問わず)の実施有無、上演ジャンル、演劇鑑賞教室の実施有無、開催形態、公演料など、計43問+回答者情報(学校区分・設置者・生徒数など)
調査時期	2003年6月13日～2003年8月15日
配布票数	全国10,000校(小学校2,411校、中学校4,850校、高校2,739校)
回収票数	2,523校(回収率25.2%、高校は450校,16.4%)
有効票数	2,523校、高校はうち450校

図表 4.47 サンプルの地域構成比較

	北海道	東北	関東	中部	近畿	中国	四国	九州 沖縄
H15 (n=414)	7.0%	13.3%	21.0%	19.5%	16.7%	6.6%	2.9%	7.5%
本調査 (n=1278)	0.0%	9.4%	24.4%	11.7%	24.1%	6.3%	9.2%	15.0%

※平成15年度調査は全日制高校のみの集計結果。

図表 4.48 サンプルの学校区分比較

	全日制	定時制	中高一貫校	特別支援学校
H15 (n=450)	92.0%	8.0%	10.2%	—
本調査 (n=1278)	73.3%	8.6%	6.5%	11.6%

※平成15年度調査ではカテゴリ重複(例：全日制かつ中高一貫など)があるため合算で100%とならない。

図表 4.49 サンプルの設置者比較

	国立	公立	私立
H15 (n=450)	0.5%	79.7%	19.8%
本調査 (n=1278)	0.1%	82.9%	17.1%

※平成 15 年度調査は全日制高校のみの集計結果。

図表 4.50 サンプルの生徒数比較

	100 人未満	100 ～ 299 人	300 ～ 499 人	500 ～ 799 人	800 ～ 999 人	1000 人以上
H15 (n=414)	8.9%	7.7%	9.2%	30.9%	22.5%	20.8%
本調査 (n=1278)	17.3%	18.1%	17.0%	22.9%	13.5%	11.3%

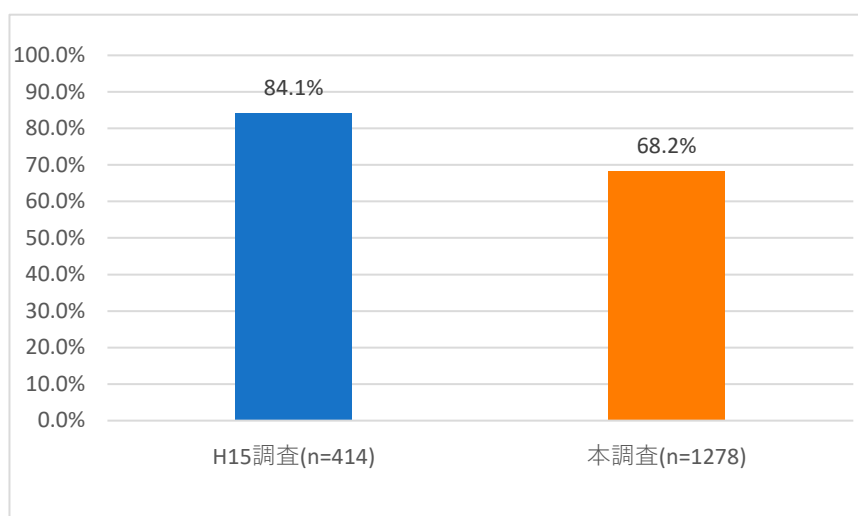
※平成 15 年度調査は全日制高校のみの集計結果。 ※ここでは本調査の生徒数区分を H15 年度調査にあわせた。

(2) 芸術鑑賞会（演劇以外を含む）の実施状況

芸術鑑賞会（演劇以外を含む）の実施の有無について尋ねた結果の比較が図表 4.51 である。平成 15 年度調査では全日制高校の 84.1% が「行っている」と回答したのに対し、本調査では回答対象者全体で 68.2% にとどまった。（全日制高校だけで見た場合は 70.4%；4 章 1 節の図表 4.1 を参照）。

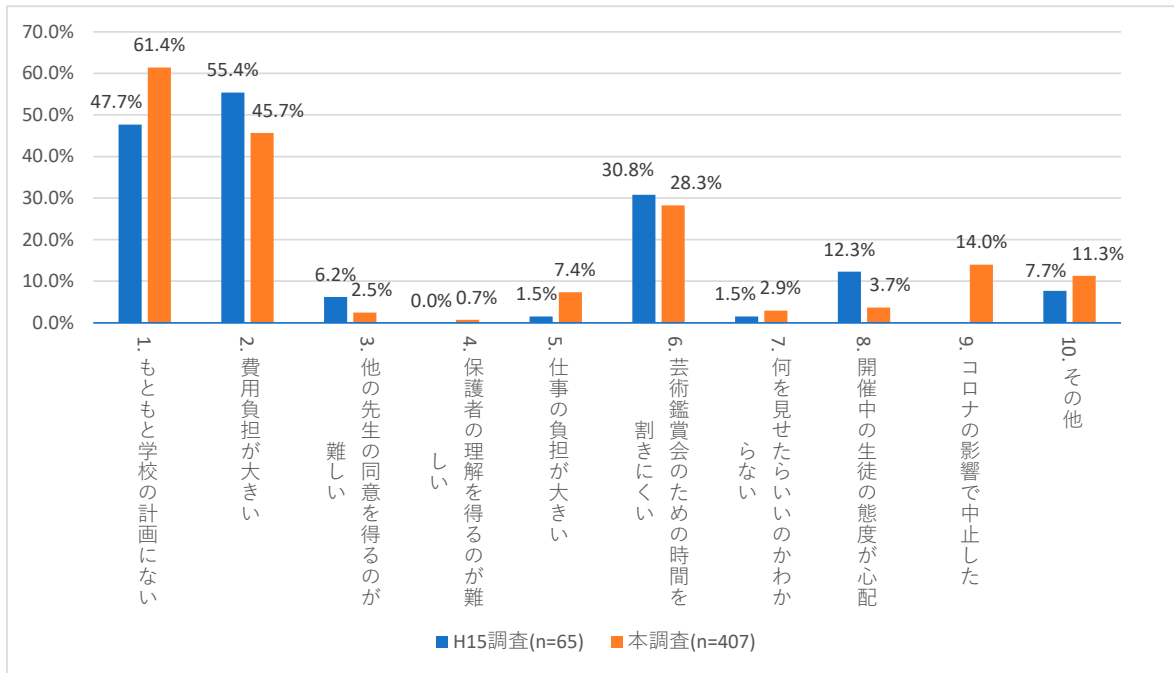
芸術鑑賞会を行っていない学校にその理由を尋ねた結果が図表 4.52 である。「もともと学校の計画にない」「費用負担が大きい」「芸術鑑賞会のための時間を割きにくい」が上位にあるのは同じだが、1 位と 2 位の順序は入れ替わっており、現在では「もともと学校の計画にない」が最も多い理由となっている。そもそもの実施率が低下していることと併せて考えると、この 20 年ほどの間に芸術鑑賞会を取りやめ、あるいは縮小する学校が出てくる中で、そのまま実施しない（学校の計画に入れない）方向で定着してしまった可能性が考えられる。仮にそうした傾向があるとしたら、「コロナの影響で中止した」が非実施校の 14.0% に上った点も無視できない結果である。そうした学校が今後芸術鑑賞会を再開する余地があるのか、そのためにどのような施策が必要かなど、検討すべき課題となるであろう。

図表 4.51 芸術鑑賞会（演劇以外を含む）を実施している学校の割合



※平成 15 年度調査は全日制高校のみの集計結果

図表 4.52 芸術鑑賞会を行っていない理由（複数回答）

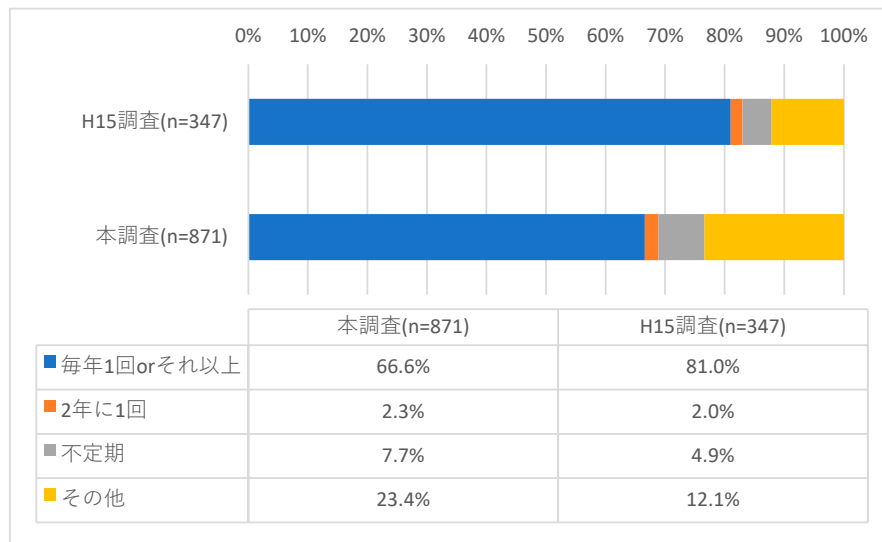


※平成15年度調査は全日制の普通高校のみの集計結果。

「コロナの影響で中止した」はコロナ禍の概念が存在しなかった平成15年度調査では尋ねていない。

芸術鑑賞会（演劇以外を含む）を行っている学校に対して、その頻度を尋ねた結果が図表 4.53 である。平成15年度調査から本調査にかけ、「毎年1回かそれ以上」の割合が81.0%から66.6%に低下し、「不定期」ないしは「その他」の割合が多くなっている。

図表 4.53 芸術鑑賞会（演劇以外を含む）の開催頻度



※平成15年度調査は全日制高校のみの集計結果

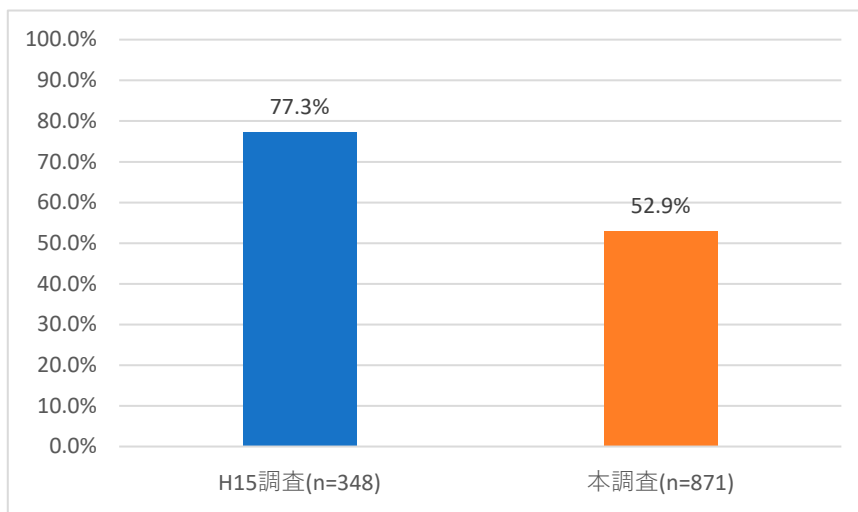
※平成15年度調査のn数が他の集計結果と1件ずれているが、参照した報告書に記載されていた数値をそのまま掲載した（回答が得られなかったのか誤字によるのかは不明）。

(3) 芸術鑑賞会（演劇）の実施状況

芸術鑑賞会（演劇以外を含む）を行っている学校に対して、調査時点から過去3年以内の実施ジャンルの中に演劇が含まれるか否かを尋ねた結果が図表 4.54 である。平成15年度調査では芸術鑑賞会実施校のうち77.3%が演劇を実施していたが、本調査では52.9%（公演ジャンルを選択させた別の質問では43.7%）にとどまっていた。

では代わりに別のジャンルが伸びたのかを確認するため、過去3年間に実施したジャンルを複数回答で尋ねた結果を見ると、平成15年度調査よりも該当率が高かったのは「バレエ・ダンス」、「オーケストラ」、「室内楽」、「伝統音楽」、「落語・演芸」の5ジャンルであった(図表4.55)。ただし、いずれも演劇ほど顕著な数値の違いはなく、また5ジャンル以外は軒並み本調査の方が低い数字となっていることから、演劇の代わりに何かが伸びているということでもなく、全体的にジャンル選択が絞られつつあることを示しているのではないかと考えられる。

図表 4.54 芸術鑑賞会(演劇)を実施している学校の割合



※平成15年度調査は全日制高校のみの集計結果

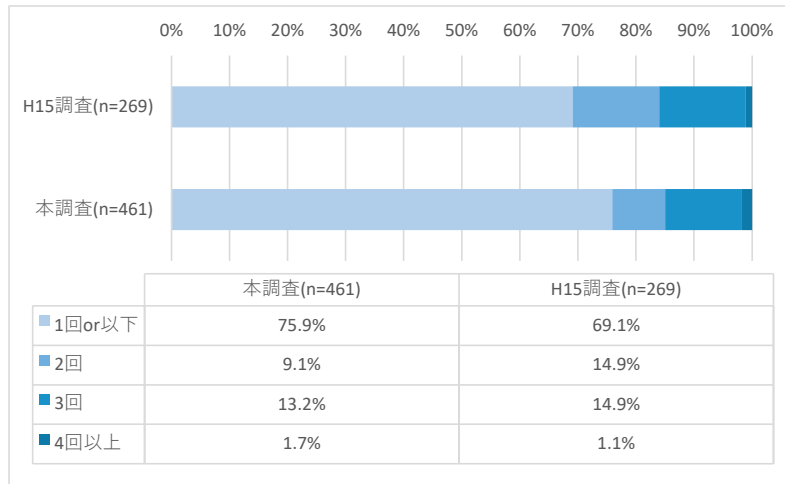
図表 4.55 過去3年間で実施した芸術鑑賞会のジャンル

	H15調査 (n=348)	大小比較	本調査 (n=871)
1. 演劇	77.3%	>	43.7% (本来は52.9%)
2. 人形劇・影絵	1.4%	≒	1.4%
3. ミュージカル	20.7%	>	16.8%
4. バレエ・ダンス	2.9%	<	3.3%
5. オーケストラ	13.2%	<	15.4%
6. オペラ	6.3%	>	3.4%
7. 室内楽	15.5%	<	19.5%
8. 合唱	3.4%	>	2.6%
9. ポピュラー音楽	18.1%	>	16.8%
10. 伝統音楽	15.5%	<	16.3%
11. 歌舞伎・文楽	6.0%	>	4.1%
12. 能・狂言	12.1%	>	8.6%
13. 日本舞踊	0.6%	>	0.0%
14. 落語・演芸	22.7%	<	27.3%
15. 民族芸能	15.2%	>	5.1%
16. 映画	10.9%	>	4.1%
17. その他	9.5%	>	7.7%

※本調査(R5)の演劇の数値が図表4.36と異なるが、これは「芸術鑑賞会(演劇)の実施有無」と「過去3年間の上演ジャンル」を別々の質問で尋ねたため誤差が生じたものと考えられる。平成15年度調査の際には「芸術鑑賞会(演劇)の実施有無」だけを尋ねる質問は設けず、「過去3年間の上演ジャンル」での該当率をそのまま「芸術鑑賞会(演劇)の実施有無」の識別に援用している。

次に芸術鑑賞会（演劇）を実施している学校に、その頻度を尋ねた結果が図表 4.56 である。平成 15 年度調査でも「（過去 3 年間で）1 回かそれ以下」が 69.1% に上っており、元から 3 年に 1 度（どの学年も在学中に最低 1 度鑑賞する）が主流であったものと思われるが、本調査ではその傾向が増していることがうかがわれた。

図表 4.56 過去 3 年間ににおける芸術鑑賞会（演劇）の開催頻度



※平成 15 年度調査は全日制高校のみの集計結果

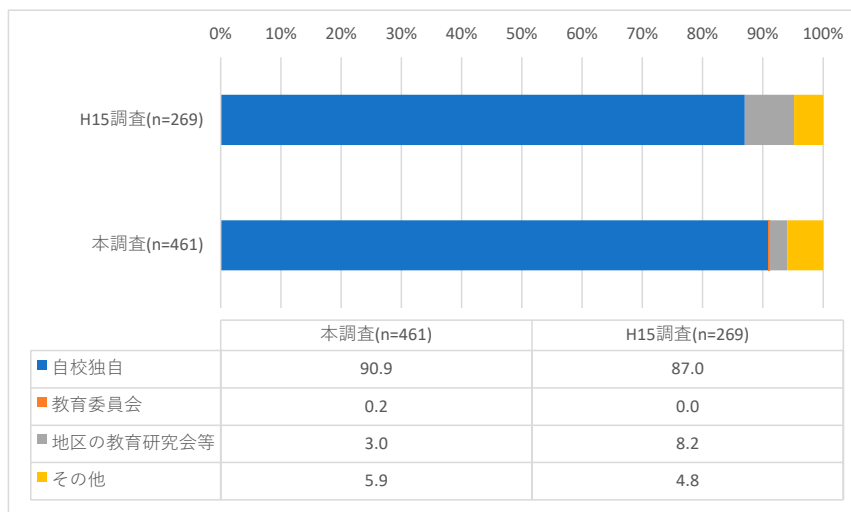
(4) 劇団・作品の決定方法

芸術鑑賞会（演劇）に関して作品や劇団の選定がどのようになされているか、2 つの調査で共通に尋ねている。

まず劇団・作品を決定する主体について見ると（図表 4.57）、どちらの調査でも「自校で独自に決める」と回答した割合が 9 割前後を占めた。両調査での違いとしては「地区の教育研究会等」と答えた割合が、平成 15 年度調査では 8.2% だったのに対し、本調査では 3.0% と少なかった点である。

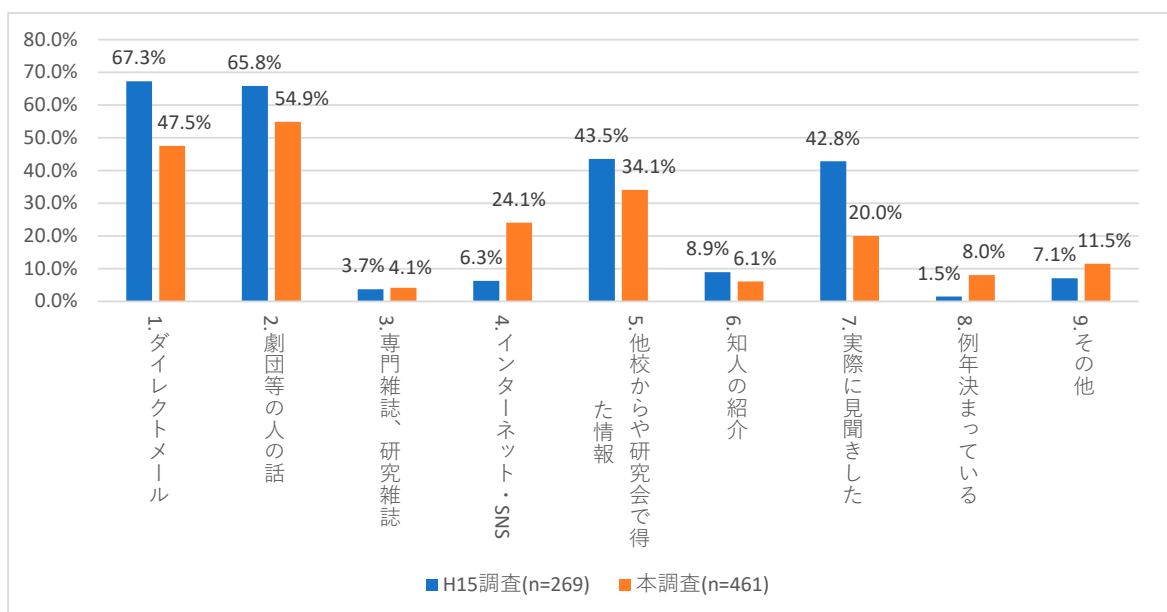
次に劇団・作品選びの際に参考にする情報を複数回答で尋ねた結果を見ると（図表 4.58）、「ダイレクトメール」（H15：67.3%、本調査：47.5%）と「劇団等の人のお話」（H15：65.8%、本調査：54.9%）、「他校からや研究会で得た情報」（H15：43.5%、本調査：34.1%）までが上位 3 つを占める点は変わりなかったが、H15 年度調査で 4 番目だった「実際に見聞きした」は 42.8% から 20.0% へと 20 ポイント余り下落し、とって代わるように「インターネット・SNS」が 6.3% から 24.1% へと浮上した。インターネットの比重の高まりは時代の変化を如実に反映したものと思われる。

図表 4.57 芸術鑑賞会（演劇）の内容決定主体



※平成 15 年度調査は全日制高校のみの集計結果

図表 4.58 劇団・作品選考の際に参考とする情報

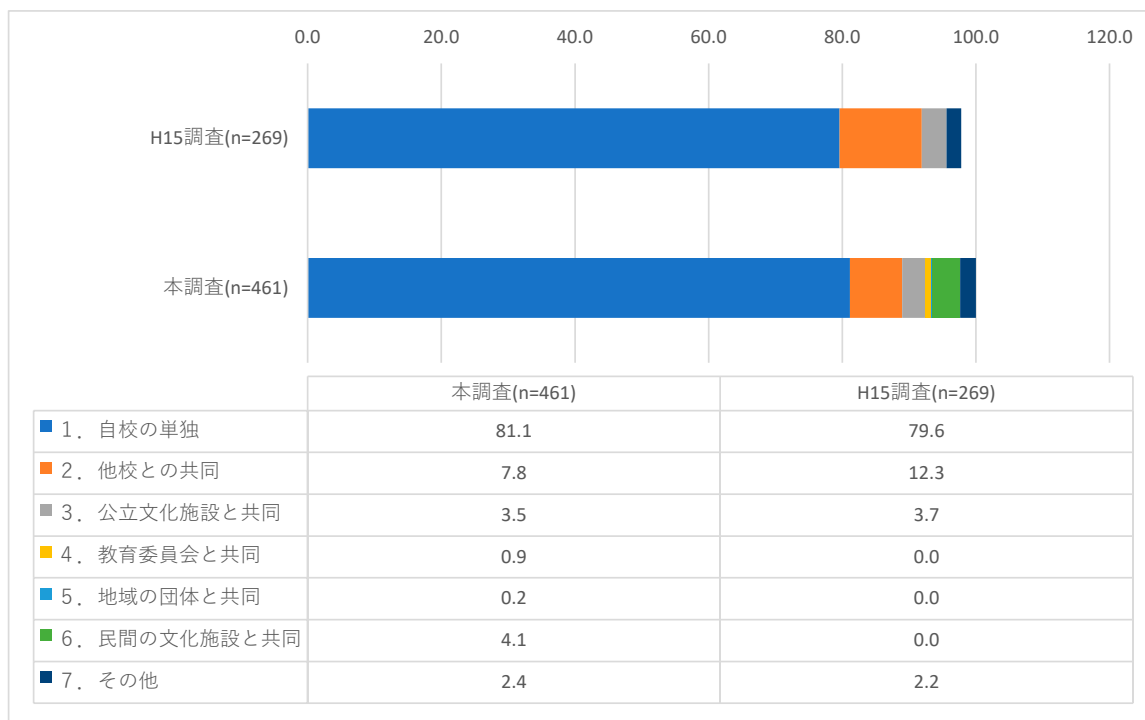


※平成15年度調査は全日制高校のみの集計結果

(5) 開催の形態、場所、会場の準備

芸術鑑賞会（演劇）の開催形態を見ると（図表 4.59）、どちらの調査でも「自校の単独」が8割前後でほとんど変化はない。ただ、数値がはっきり確認できる範囲では「他校との共同」が12.3%から7.8%とやや減少傾向が見られた。

図表 4.59 芸術鑑賞会（演劇）の開催形態

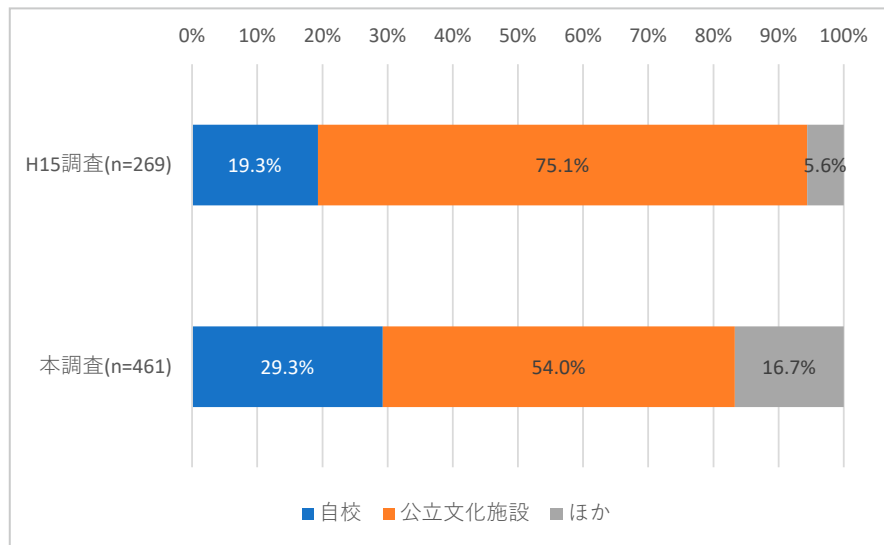


※平成15年度調査は全日制高校のみの集計結果。なお項目4～6は元資料から正確に判読できなかったためグラフには反映されていない（100%グラフではなく積み上げ棒グラフ）

次に芸術鑑賞会（演劇）の開催場所を見ると（図表 4.60）、平成 15 年度調査では「公立文化施設」が 75.1% と大多数を占めていたのに対し、本調査ではその割合が 54.0% にとどまった。代わりに伸びたのが「自校」であり、19.3%から 29.3%と 10 ポイント高くなっていった。ちなみに比較の便宜上、該当率の低かった項目は「ほか」とまとめたが、その内訳は「民間の文化施設」（13.0%）、「その他」（3.7%）である（4 章 4 節の図表 4.16 を参照）。

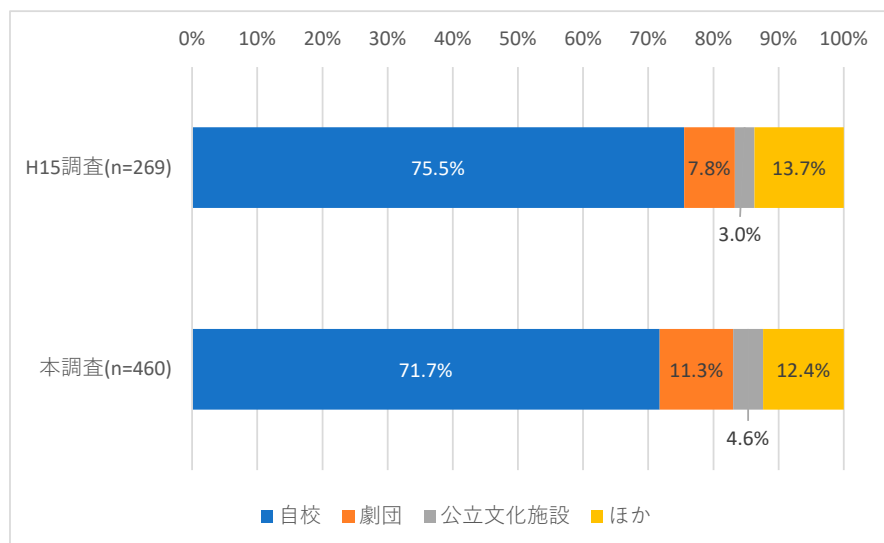
その開催場所を準備した主体について尋ねた結果が図表 4.61 である。どちらの調査でも「自校」が 7 割を超えることには変わらないが、本調査では平成 15 年度調査よりその割合がやや小さくなり、代わって「劇団」や「公立文化施設」の割合が増えていた（「劇団」は 7.8%から 11.3%、「公立文化施設」は 3.0%から 4.6%）。なおこちらでも、比較の便宜上いくつかのカテゴリを「ほか」にまとめた。詳細な中身は 4 章 4 節の図表 4.17 をご覧いただきたい。

図表 4.60 芸術鑑賞会（演劇）の開催場所



※本来の選択肢のうち該当率の低い「他校」「民間文化施設」「その他」は「ほか」にまとめた。
 ※平成 15 年度調査は全日制高校のみの集計結果

図表 4.61 芸術鑑賞会（演劇）の開催場所を準備した主体



※本来の選択肢のうち該当率の低い「他校」「民間文化施設」「教育委員会」「地域の団体」「その他」は「ほか」にまとめた。
 平成 15 年度調査は全日制高校のみの集計結果、本調査では一部学校から回答が得られなかった（本来は n=461 だが誤植ではない）。

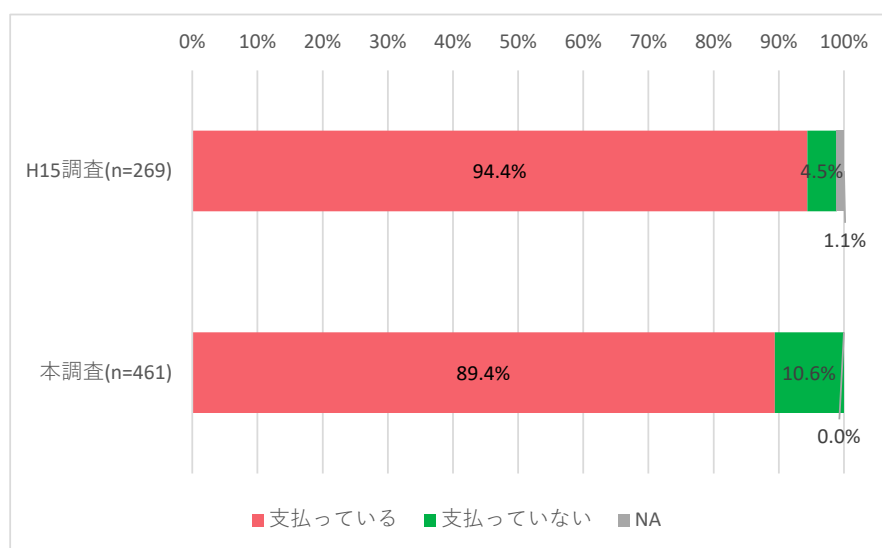
(6) 公演料負担の状況

芸術鑑賞会（演劇）の実施にあたって公演料を負担している学校の割合は、平成 15 年度調査で 94.4%、本調査で 89.4% であり、過去調査と比べて若干数値が小さいものの依然として 9 割前後の学校が公演料を負担している状況が明らかになった。

注目されるのは生徒 1 人当たりの負担金額で、平成 15 年度調査では 1442.9 円だったものが、本調査では 2098.5 円と、20 年前と比べて 600 円強高い値となっていた。ちなみに本調査の全日制高校の平均は 2090.1 円であり、全体集計と大きな相違はない。

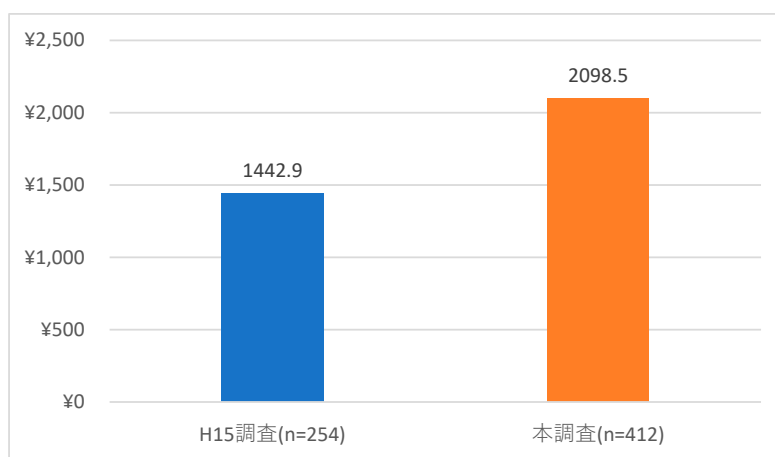
くどいようであるが、質問文で公演料の算出方法を厳密に教示していないためこの数値そのものは実態と必ずしも一致しない面があり、また経年比較の場合は長期的な物価変動なども考慮に入れなければならない。ただ、一般論として過去 20 年の間に材料費・人件費など各種経費が上がっている蓋然性は高いと思われる、その費用をだれがどのような形で負担するのか、学校や保護者・生徒がどの程度の負担水準まで許容できるのかなど、今後の議論の参考として 1 つの重要な知見だと思われる。

図表 4.62 芸術鑑賞会（演劇）への公演料支払いの有無



※平成 15 年度調査は全日制高校のみの集計結果

図表 4.63 芸術鑑賞会（演劇）への公演料負担（生徒 1 人あたり）



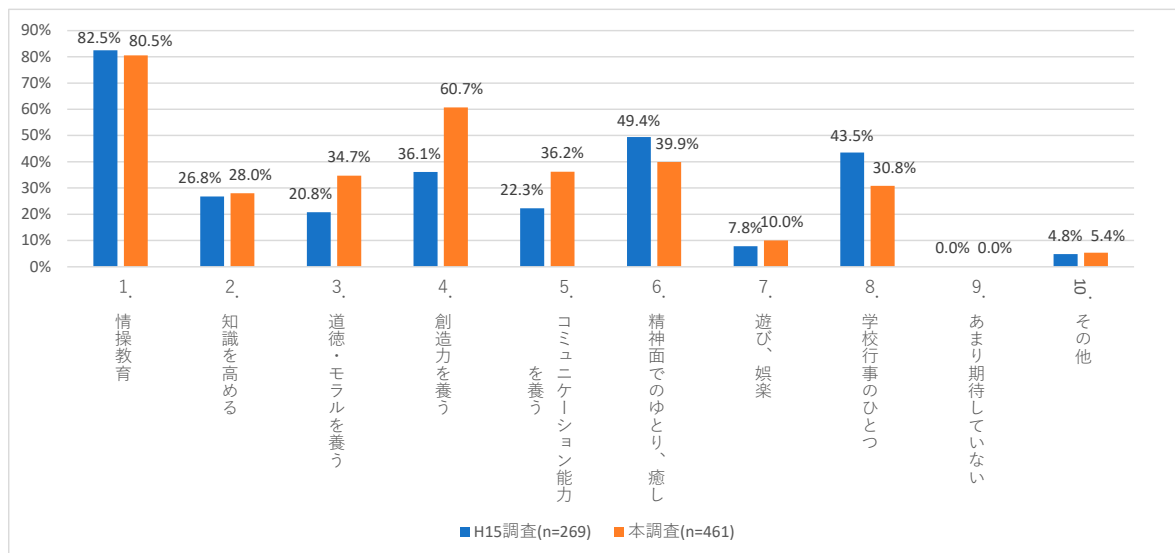
※平成 15 年度調査は全日制高校のみの集計結果

(7) 芸術鑑賞会（演劇）への意向

芸術鑑賞会（演劇）に対する期待としては、平成15年度調査では「情操教育」（82.5%）、「精神面でのゆとり、癒し」（49.4%）、「学校行事のひとつ」（43.5%）といった順に該当率が高く、これらは本調査でも比較的該当率が高い項目である（図表4.64）。しかしながら、本調査では「精神面でのゆとり、癒し」や「学校行事のひとつ」の該当率は平成15年度調査より小さくなっており、代わって伸びたのが「創造力を養う」（36.1%→60.7%）、「道徳・モラルを養う」（20.8%→34.7%）といった項目であった。なお、「コミュニケーション能力を養う」も該当率が上がっているようだが、この項目は平成15年度調査では「自己表現能力を養う」となっていたため厳密には比較できないが、青少年を取り巻く社会状況の変化や、芸術の担う役割への認識変化がうかがえる結果である。また、どちらの調査でも「あまり期待していない」は該当なしである。これは芸術鑑賞会（演劇）を実施している学校だけに尋ねているためバイアスのかかった結果ではあるが、演劇鑑賞への期待は決して小さいものではないことは確かだと思われる。

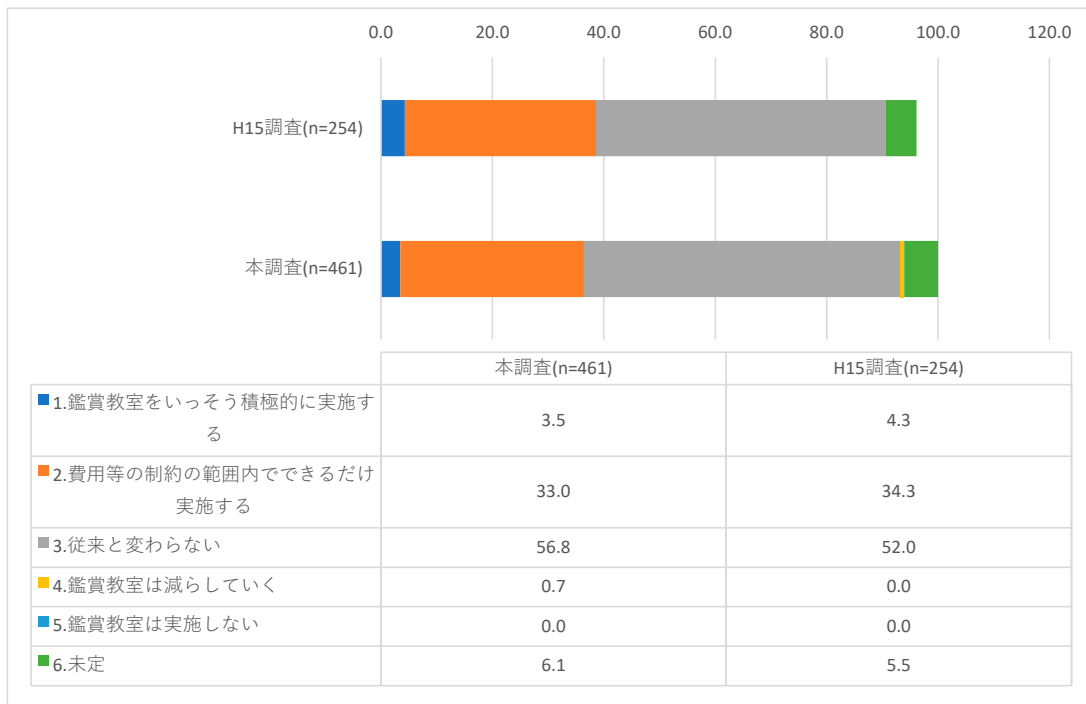
そこで今後の芸術鑑賞会（演劇）に対する意向はどのようなであろうか。これを見ると（図表4.65）、回答の構成は2つの調査でほとんど変わりがなく、「従来と変わらない」が5割強、「費用等の制約の範囲内でできるだけ実施」が3割強などとなった。

図表 4.64 芸術鑑賞会（演劇）に期待すること



※平成15年度調査は全日制高校のみの集計結果
 ※「5. コミュニケーション能力を養う」は平成15年度調査では「自己表現能力を養う」であった

図表 4.65 芸術鑑賞会（演劇）今後の実施意向

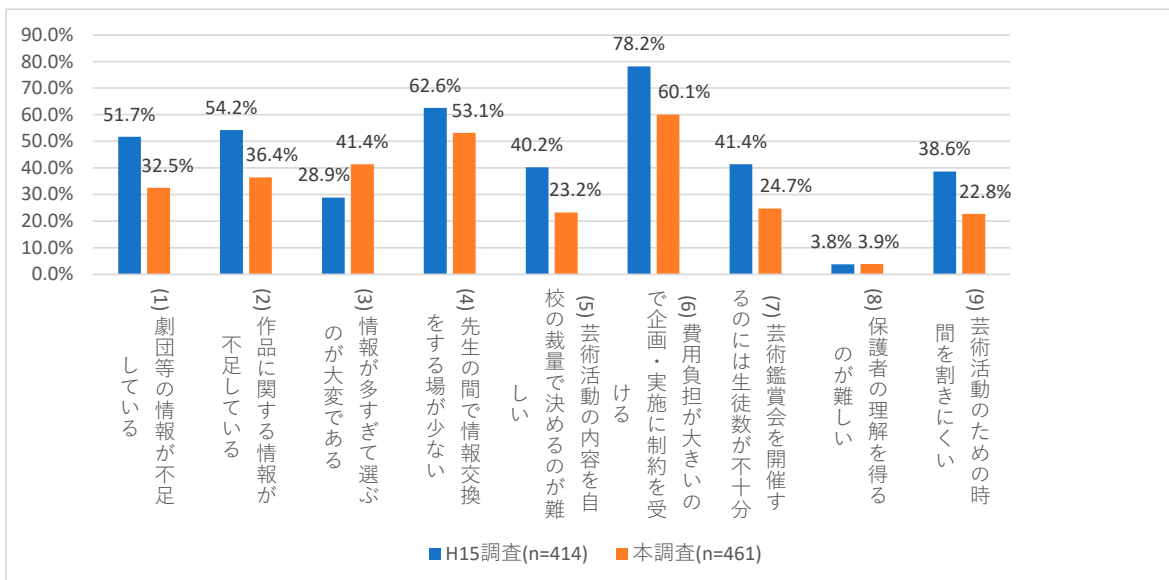


※平成 15 年度調査は全日制高校のみの集計結果、集計母数は公演料を負担している学校（n=254）と同一だが実際にそのようであるかは確認できなかった。また H15 調査の項目 4・5 は「1 割未満」と言及されているだけで具体的な数値が確認できなかった。100%グラフではなく積み上げグラフである点に注意。

補論 2 の最後に、学校側が芸術鑑賞会（演劇）の阻害要因と考えているものについての集計結果を紹介する。なお、平成 15 年度調査については演劇鑑賞教室だけでなく演劇ワークショップも含む「演劇」に関する芸術活動」について尋ねていることに注意されたい。

これを見ると、該当率そのものはほとんどの項目で小さくなっているが、「6. 費用負担が大きい」と「4. 先生の間で情報交換する場が少ない」がどちらの調査でもトップ 2 位を占め、芸術鑑賞会を実施する上での最大の阻害要因がこの 20 年であまり変わっていないことがうかがわれる。また本調査で数値があがったものとしては「3. 情報が多すぎて選ぶのが大変である」で、インターネットの普及などによって情報が豊富になった反面、情報過多に悩む学校も生じつつあることが見て取れた。

図表 4.66 芸術鑑賞会（演劇）の阻害要因



※平成 15 年度調査は回答した全高校（ただし全日制）を母数、本調査は芸術鑑賞会（演劇）を行っている学校を母数とした集計である

第5章

調査結果全体の振り返り

1. 鑑賞者アンケートと実施校アンケートより

2023年5月から12月にかけて行われた本事業の巡回公演に際して、実施校と鑑賞者向けアンケートを行ったが、幸いにも多数の学校・生徒からの回答を得られ、この種のアンケート調査としては比較的豊富なサンプルによる分析を行うことができた。ご協力いただいた学校ならびに生徒の皆さんに改めてご感謝申し上げたい。

第2章の鑑賞者アンケート結果から改めて知見を整理しよう。鑑賞者アンケートは回答者負担を極力少なくするため自由回答を含めてわずか5問の簡素な構成であったが、本格的な演劇に触れて生徒たちが受けた影響の一端をよく明らかにしたと思われる。

まず注目されるのは、巡回公演以前に演劇鑑賞経験があると答えた人が回答者(Q1の回答者は9,927人)のうち37.5%と比較的少数派にとどまっていたことである。これは小中学校における演劇鑑賞の機会が高校に比べて相対的に少ないことが1つの背景となっており、平成15年度に劇団協が行った小中高比較調査や日本児童・青少年演劇劇団協同組合が近年実施している全国の小学校に対する調査結果からも確認できる。今回の鑑賞体験がなかったとしたら多くの生徒が本格的な演劇に触れることの無いままその後の人生を過ごしていた可能性は決して荒唐無稽なものではなく、本巡回公演事業の意義の大きさを改めて示すデータと言えよう。

作品に対し「大変満足」「満足」と答えた生徒は回答者(Q2の回答者は9,935人)の77.6%に上り、親しい友人や家族への作品の推奨度を10段階評価で尋ねたところ10段階評価の7点以上をつけた生徒が65.8%(Q3の回答者は9,942人)に上り、平均得点は7.26点となった。それぞれの劇団がテーマや脚本・演出など学校公演に合わせた工夫を凝らして臨んだこととその水準の高さが正しく評価された結果であろう。

より具体的に公演から感じたことを尋ねてみると、鑑賞者(Q4の回答者は9,959人)の71.4%が「ライブ(生)の表現の迫力や魅力を感じた」と、また38.5%が「違う考え方、価値観があることを感じた」と回答し、演劇という表現方法や演目に込められたテーマをきちんと感じ取っていたことが明らかとなった。また興味深いことに、演劇への興味や俳優・演技・音楽・スタッフなど担い手への興味をかきたてられた生徒も少なからずおり、単に「面白かった」といった一過性の楽しみだけではない印象を与えたことがうかがわれた。これらの結果は、巡回公演事業が将来にわたる演劇鑑賞者の裾野を広げていく普及的な役割を確実に果たしていることを示していると考えられる。

さて、次に第3章で取り上げた実施校アンケートの結果に触れたい。こちらも巡回公演に対する肯定的な評価が多く寄せられた。

巡回公演の意義については、「本物の芸術に生で触れる機会の創出」を挙げた学校が59校中56校と圧倒的多数に及び、鑑賞場所の希望についての質問でも52校が本格的な設備や機材が整った会館・ホールでの鑑賞を希望するなど、「本格的な演劇体験をさせてあげたい」という学校側の熱意が強く感じられた。また「会館使用料を負担していただき助かった」など、巡回公演のスキームに対する評価の声も聞かれた。総じて巡回公演に対する理解やニーズは高いと言える。

他方でアンケート結果からは巡回公演に対する課題や要望も浮き彫りになった。最大の課題は実施予算の確保であり、いま1つの課題は情報提供・情報共有のあり方に関するものであった。

これらの要望事項を見ると、劇団や演目の決定までにあたっては情報がある程度一本化して情報過多による学校側の負担を極力避けることが求められる一方、実施にあたっては逆にテーマや演目、当日の段取りなどきめ細やかに情報共有していく必要があることが示唆される。

2. 「学校における芸術鑑賞会に関するアンケート」について

巡回公演の実施校と鑑賞者向けアンケートとは別に、演劇の芸術鑑賞会に対する高校全般の実態やニーズを明らかにするため、2023年7月から2024年1月にかけて「学校における芸術鑑賞会に関するアンケート」を実施した。本調査では全国45都道府県の教育委員会に調査協力を打診し、このうち協力が得られた23府県の2,100

校に対して実査が行われ、有効回答 1,278 票を得ることができた。平常の教務・校務で多忙を極める中、ご協力いただいた教育委員会ならびに高等学校・特別支援学校の関係者の皆さまには改めて深甚なる感謝を申し上げる。

回答校の構成を見ると、地域分布が近畿以西にやや偏るほか、府県ごとに協力可能な学校区分が異なったことから学校区分・設置者の構成にも全国の実態に比べると若干の偏りがある。また無作為抽出調査ではないため、サンプルから日本全国の高校の姿を推定することも困難であり、あくまで回答が得られた地域ならびに学校区分における結果として解釈する必要がある。

しかしながら配布票数のうち 63.1% から有効回答を得ることができた点や、結果的ではあるが大都市やその近郊地域と人口の少ない地方に至るまである程度にわたってカバーできた点、そして公的統計以外の各種社会調査から漏れがちな定時制高校や特別支援学校からも多くのサンプルを得ることができた点で、本調査データには一定の価値があると考えられる。データの信頼性・一般性に限界があることは確かであるが、今後の議論とさらなる調査研究に向けた一助としてぜひご活用いただきたい。

3. 「学校における芸術鑑賞会に関するアンケート」の全体集計結果

本調査では 20 問にわたり、以下の内容について質問を行った。第 4 章の節構成の繰り返しになるが改めて掲載する。まずは回答校全体での単純集計結果をまとめることによって本調査によって得られた芸術鑑賞会の状況を概観しよう。

1. 芸術鑑賞会（演劇以外を含む）の実施状況
2. 芸術鑑賞会（演劇）の実施状況
3. 劇団・作品の決定方法
4. 開催の形態、場所、会場の準備
5. 公演料負担の状況
6. 芸術鑑賞会（演劇）への意向

まず演劇以外を含む芸術鑑賞会の実施状況については、全回答者（1,278 校）の 68.2% が実施しているとの回答であり、実施校（871 校）における実施頻度は毎年 1 回が 66.6%、「その他」に回答した 23.4% の多くが「3 年に 1 回」または「3 年に 1～2 回」と回答していた。芸術鑑賞会の非実施校（407 校）において実施していない理由を複数回答で尋ねたところでは、「もともと学校の計画にない」（61.4%）、「費用負担が大きい」（45.7%）といった回答が多数に上った。

次に演劇の芸術鑑賞会の実施状況について、芸術鑑賞会の実施校（871 校）のうちの 52.9% が実施しているとの答え、他の芸術ジャンルの中でも演劇の実施率が最も高かった。演劇の芸術鑑賞会を実施している学校（461 校）に対し実施頻度を尋ねたところ、過去 3 年間の平均で 1.48 回となり、毎年 1 回かそれ以下の構成比は 75.9% であった。

劇団及び作品の決定にあたっては、自校独自（教師主体）で決めるとした学校が演劇実施校（461 校）中の 88.1% に上り、生徒主体・PTA 主体と合わせるとその比率は 90.9% にも上る。参考にする情報（複数回答）としては「劇団等の人の話」（54.9%）、「ダイレクトメール」（47.5%）、「他校からや研究会で得た情報」（34.1%）、「インターネット・SNS」（24.1%）などが挙げられた。

演劇の芸術鑑賞会の開催形態は「自校単独」が実施校（461 校）の 81.1% に上り、開催場所を準備した主体としても自校が 71.7% であった。一方で実際に開催する場所として自校を選んだ学校は 29.3% にとどまり、最多は公立文化施設（54.0%）であった。つまり、公演の企画運営は自校の力で行いながら、場所としては会館やホールを借りて行う形態が多いということである。

演劇の芸術鑑賞会における公演料負担については、実施校（461 校）の 89.4% が支払っていると答え、生徒 1 人当たりの平均負担金額は 2098.5 円であった。ただし質問文において金額の厳密な算出方法が明示されてい

いことから、この数字そのものは実情とは必ずしも一致しない可能性がある。なお、一定額で区分した際の最頻金額は1000～1999円で、この区分の金額に該当した学校は公演料を負担している学校(412校)のうち51.7%を占めた。

今後の芸術鑑賞会(演劇)に対する意向としては、回答者(461校)の56.8%が「従来と変わらない」としつつも、33.0%は「費用等の制約の範囲内でできるだけ実施する」と答えており、費用負担がネックとなる可能性が示された。Q14で尋ねた芸術鑑賞会(演劇)への阻害要因の認識においても、回答者(461校)の60.1%が費用負担の問題を挙げ、9項目中最も該当率が高い項目となった。

4. 芸術鑑賞会における様々な格差

本報告では、学校区分(全日制、定時制、中高一貫、特別支援学校)、設置者(国公立、私立)、学校規模(生徒数による6段階区分)、地域(8地方区分)により、学校の属性や地域により芸術鑑賞会の実施にあたってウイークポイントとなる部分があるか、何らかの格差が存在するのかを検討した。その結果、多くの質問項目にわたって全日制高校・私立高校と定時制高校・特別支援学校との間に無視できない格差が存在することが明らかになった。

まず大きな差が見られたのが芸術鑑賞会(演劇以外を含む)の実施率である。「行っている」と回答したのが全体で68.2%、全日制高校が70.4%、中高一貫校が81.9%なのに対し、定時制高校は50.0%、特別支援学校は59.5%であり、実施率の高い学校区分との落差は20%内外に達した。同様の格差は演劇の芸術鑑賞会の実施率でも見られた。この結果が示すのは、芸術鑑賞会がそもそも行われているかという入口の段階で学校区分による格差が存在する事実である。もちろん事実と言っても、サンプル構成の偏りがあるため日本全国の実際の数字とはずれる部分があるのだが、かといって実態から大きくかけ離れたものとも思われず、憂慮すべき結果である。

もう一つ特筆すべきは公演料負担に関するものである。まず公演料負担の有無を見ると、全体では89.4%であり、全日制・定時制・中高一貫の3区分はいずれも100%近い値であった。これに対して特別支援学校で負担している学校は(演劇実施校の)11.1%とかなり少ない。これは文化庁の「文化芸術による子供育成推進事業(ユニバーサル公演事業)」など特別支援学校に重点を置いた助成制度があることが大きな背景になっていると考えられ、その意味では福祉的な施策の効果が見て取れる結果である。しかし忘れてならないのは、芸術鑑賞会の実施にこぎつけることさえできない学校が特別支援学校全体の約4割存在している事実であり、その意味では特別支援学校の中にもある種の格差が存在していると言えるかもしれない。

公演料負担に関する分析を進める中では、学校区分とは異なる格差の存在も浮かび上がってきた。それは地域格差というべきもので、中山間部や離島など僻地の小規模な学校において演劇鑑賞会の実施に伴う公演料負担がより大きいという状況であった。元々100人未満の小規模校には定時制高校と特別支援学校が合わせて75%近く含まれていることから、小規模校の傾向はほぼ2つの学校区分の傾向と重なっていた。しかし、公演料負担を地域別・規模別に集計してみると、東北や九州において学校規模が小さいほど公演料負担が高くなっていたのである。これは小規模校≒定時制&特別支援学校という見立てでは説明ができない。そこで、両区分を除き、また特異な傾向を持つ私立学校を除いた、全日制高校に絞って学校規模による比較集計を行った。

その結果は驚くべきものであり、全日制的小規模校もまた、芸術鑑賞会の実施率、その実施頻度、公演料負担額などあらゆる面で、定時制高校や特別支援学校に匹敵する不利を抱えている実態が明らかになった。芸術鑑賞会の実施率で言えば、生徒数100人未満の学校は芸術鑑賞会(演劇以外を含む)が50.0%(全体は69.8%)、演劇の芸術鑑賞会が26.9%(全体は57.5%)となっており、全体の実施率よりかなり低い。また生徒1人当たりの公演料負担は100人未満の学校で平均3210.0円(全体は1967.0円)とこちらも差が大きい。

なぜこのような結果があらわれたのであろうか。実は、定時制・特別支援学校を除いた全日制的100人未満の高校(52校)の内訳を見ると、その約半数が東北・中四国・九州などの町村に所在しており、住所情報を見るとそのほとんどが中山間部や離島にある学校であった。また残り半分の市域にある学校も、平成の大合併で「市」に編入されたような地域が多く含まれ、分校の割合も高いのである。言うまでもなく、こうした地域は交通アクセ

スが悪く、会館・ホールなどのインフラも不十分である可能性が高い。したがって舞台芸術の公演を行おうとしても実施のハードルが高く、学校を対象とした公演事業もなかなか困難なのであろう。本来ならばそうした不利益こそ是正されてしかるべきなのだが、実際には全国的に見て最も高い水準の公演料を負担しなければならない状況なのである。

以上のような様々な格差に対して、どのような手を打つことができるのかが問われるところであらう。

5. 平成 15 年度調査からの変化

本調査の前身として、劇団協では平成 15 年度にも全国の小中高校を対象に「学校における舞台芸術活動実態に関するアンケート」を行っている。2つの調査を比較する中で浮かび上がってきた知見についても簡単に整理しておきたい。

1つ目の重要な知見は、芸術鑑賞会の開催機会が減っている可能性についてである。芸術鑑賞会（演劇以外を含む）の実施率は 84.1%から 68.2%へと大幅に低下しており、開催頻度も少なくなる傾向が見受けられた。またその中で演劇を行っている学校も 77.3%から 52.9%ないし 43.7%へと低下し、頻度も同じく低下傾向であった。2つの調査のサンプル抽出方法や実際得られたサンプル構成が異なることから、これを短絡的に「減少」と捉えないうち注意する必要があるが、「ゆとり教育から学力重視へ」というこの間の教育行政の変化や、それによる学校側負担の増加といった趨勢の中で、芸術鑑賞会そのものの機会が縮小しつつあることは十分考えられることである。子どもたちの精神的成長の機会がだんだん失われつつある可能性を示したものとして、危惧されるべき結果だと言えるのではないだろうか。

重要な知見の2つ目として公演費用負担の問題があげられる。本調査では平成 15 年度調査よりも公演料を負担している学校の割合はやや低い結果であったが、生徒 1人当たりの負担金額で見ると平成 15 年時点の平均 1442.9 円から平均 2098.5 円へと約 45% 高くなっていた。これもまた両調査の方法論の違いや質問文の曖昧さ、また物価上昇率など様々な影響する原因が考えられるが、芸術鑑賞会（演劇）の阻害要因として費用負担が最大の要因であること、また今後の意向としても「費用等の制約の範囲内」をあげる学校が比較的多いことなどに鑑みると、見過ごすことのできない結果であらう。今後同様の調査研究の機会があれば、実際の数値に近い回答が得られる形でより精緻に検証する必要があるのではないかと考えられる。

6. 調査結果の総括

巡回公演を行った学校及び鑑賞者生徒へのアンケートでは、本格的な演劇に触れる機会である巡回公演の意義が高く認識されており、鑑賞効果についても肯定的に評価されていることが明らかとなった。予算の確保が最大の懸念事項になっているほか、劇団・演目選択にあたっての情報提供のあり方や実施に向けての意思疎通のあり方など改善点も多いが、巡回公演事業の必要性・有効性は学校・生徒双方にとって基本認識と言っても良い状況であらう。

23 府県の高校・特別支援学校を対象としたアンケートでも、芸術鑑賞会（演劇）に対して情操教育、精神面でのゆとり・癒し、創造力・コミュニケーション能力の涵養など様々な面でその意義を認める学校が多い。認識としてそうであるだけでなく、実施校ではその 3/4 以上が毎年芸術鑑賞会を開催し、また 6 割近くは今後も従来通り行っていく方向性だと回答していた。これらの結果はすでに芸術鑑賞会を実施している学校を対象とした質問から得られた結果であるから、鑑賞者・実施校アンケートと同様に結果が肯定側に上振れている可能性は否定できない。とは言え、芸術鑑賞会を経験した学校においてその効果が広く認められ定着していることは認めて良い成果ではあろう。

だが調査からは、定時制高校や特別支援学校を含む小規模校が芸術鑑賞会の脆弱な部分であることも浮かび

上がってきた。これらはいずれも芸術鑑賞会の実施率において全日制高校や私立高校、大規模校などと比べて落差があり、芸術鑑賞会の実施にこぎつけること自体に困難を抱えていた。また特に僻地の小規模校では、大きな規模の学校に比べて生徒1人当たりの負担額はより高額となっており、費用面が芸術鑑賞会実施のネックになっている可能性がうかがわれた。

芸術鑑賞会の現状と、それが抱える脆弱性や懸念材料が明らかになったことにより、私たちは一歩進んで「では何をなすべきか」を論じることができる地点に歩を進めることができたと思われる。それは別の場所に譲るが、議論の出発点として以下のことだけは述べておきたい。

それは演劇が人の感受性や価値観に強く働きかけ、創造・共感・自己表現・(他者との) 共生・社会性など多彩な人間的能力を開花させる力を持っていることであり、青少年期に本格的な生の演劇を体験することは、その人格形成にとって及ぼす効果が非常に大きいことである。そして実際に触れてみた生徒や学校関係者の間でこの演劇の力が大いに評価され、今後も期待されていることである。これらは関係者にとっては言うまでもない前提と感じられるであろうが、今回の3つの調査を通じて様々な角度からそのエビデンスがもたらされた点が本調査の1つの成果である。

しかしその一方、本調査で示唆された様々な課題を解決していくためには、現場関係者だけの工夫や努力だけでなく、国や自治体など多様な社会的アクターへの働きかけ・協働も必要になると考えられる。本報告を基に、より多くの関係者の知恵とパワーが結集され、演劇界のさらなる前進につながることを願うものである。

おわりに

「すべての学校に演劇を！」実現するために

田辺素子（(公社) 日本劇団協議会教育事業部部長）

平成 15 年度の調査は、学校完全 5 日制の導入により芸術鑑賞会の実施状況がどのように変化しているかを把握することを主眼に実施したと記憶している。この間 20 年を振り返ると、東日本大震災をはじめとした幾つもの甚大な自然災害や、インフルエンザ・コロナウィルスの流行、少子化、学校改革、市町村合併や老朽化による公共ホールの閉館など、様々な危機と環境変化があり、それらが本調査の結果にもつながっていると思われる。

学校における芸術鑑賞に関する同様のアンケート調査には、過去幾度か関わってきたが、現場との差を感じる結果が示されることも多かった。つまり「芸術鑑賞は減っておらず学校行事としても重要な位置づけとなっている」と結論づけられていたのである。この原因はおそらく、全国的に調査した場合でも無作為抽出した場合でも、手のかかるアンケートに回答して下さるのは、担当の先生がいる＝芸術鑑賞を実施している学校になりがちだったためではないかと思う。

そこで、今回の「学校における芸術鑑賞会に関するアンケート」では、教育委員会のご協力を得る形をとり、できるだけ 100%に近い回収率での実態把握を目指すこととした。当初は、サンプリング的に 10 都道府県程の協力獲得を目指したが、学校現場も「働き方改革」の真ただ中にあることから、協力獲得は難航した。そこで、対象を広げて協力依頼を進めたところ、結果的には当初目標の倍以上にあたる 23 府県のご協力を得ることができた。

その結果は、報告書にお示した通りであり、地域・回収率には偏りが生じているものの、専門的には高い回収率とみなせるらしいこと、そして、何よりも実感に近い結果を得ることができ、まずはホッとしている。改めて、ご多忙の中、ご協力頂いた教育委員会・学校の先生方に心からお礼を申し上げたい。

さて、その調査報告・分析を見ると、「学校における芸術鑑賞会に関するアンケート」で「芸術鑑賞会（演劇）の今後の実施意向」を問うたところ、平成 15 年度調査・本調査ともに「従来と変わらない」「費用等の制約の範囲内でできるだけ実施する」が上位 2 つとなっており、合わせて 90% 近くとなっている。にもかかわらず、20 年を経て、（サンプルや調査方法の違いこそあれ）実施割合は減少傾向を示しているのである。生徒数は今後も減少していく見込みであることから、生徒一人当たりの負担増の限界等も考え合わせると、「費用の制約の範囲内での実施」という回答も深い憂慮を伴う回答と言え、ある一定の上演料がかかる演劇というジャンルは、ますます選択されなくなるのではないかという強い危機感を覚えた。

また、調査研究とは別に、今年度初めて巡回公演を視察しあう機会を設けた。視察からは、上演団体が様々な制約（仕込みバラシ時間の制約・上演時間の制約・上演料の減少による制約とそれに伴う公演班人数の削減・体育館上演などの会場の制約）の中で、安全性を担保しながら良質な公演を青少年に届けているということが改めて確認できた。しかし、実施校の減少による効率性の低下や諸物価の高騰、加えて前述の様々な制約の中で、学校巡回公演に取り組む劇団もまた減少してきており、今後もその傾向が続くことが懸念される。

そして本調査では、小規模校ほど上演内容を決定するための情報が不足しているということが判明したが、小規模校=上演料が少なく成立しづらい学校を劇団側も切り捨てていかざるを得ない状況になっており、それがまた格差を生み出す一因となっていることに忸怩たる思いがある。

一方で、鑑賞者（生徒）アンケートが示すように演劇鑑賞の効果は大きい。演劇は、他のジャンルの舞台芸術と違い、広義で「人間とは何か？」を提示する・考察する機会を提供するものである。よって、「違う考え方、価値観があることを感じた」という回答の多さは、社会に出ていく前の青少年にとって自己肯定感の醸成に繋がり、まさに「生きる力」を得ていくための重要な体験だと考える。そして、これからの社会を構成していく青少年にとって求められているのは、寛容性と多様性であり、学力偏重の教科学習だけでは得られない貴重な体験でもある。また、演劇というジャンルそのものやその担い手の人々に注目して鑑賞した生徒が少なからずいたことは、今後の演劇ジャンルの担い手を育成する上で、これもまた重要な効果であると言えるのではないだろうか。

本調査からは、「すべての学校に演劇を」届けるための厳しい現状が明らかとなったわけだが、「全ての学校に演劇を」を実現するためには、現在実施している学校が継続していくこと・実施していない学校を実施校に変えることが必要である。そのために、まずは最大の阻害要因となっている「費用負担を減らす」こと。そのための、国・地方自治体等による公的支援の更なる充実を強く望む。また、公共ホールの存在価値を高めるためにも、全国各地の公共ホールが地元の青少年の鑑賞機会を保障するための措置を強く望む。社会に出る前の鑑賞体験は、将来の観客育成にもつながることから、使用料や教師の負担を減らすために公共ホール自らが主催者となって欲しい。

また、統括団体としては、こういったエビデンスとともに現場の声を国および関係諸団体に届け、具体的な提言を行っていくこと、また、本調査から浮かび上がってきた学校に対する情報提供方法や巡回公演実施のための人材育成など、個々の劇団が単独では解決できない諸課題の解決に取り組むことが果たすべき役割であると考え。格差是正のため、小規模校での公演実現のためのリサーチ・方策の検討には、令和6年度から早急に手をつけていきたい。

全国の高校生に演劇を届けるためには、学校・劇団・統括団体のみならず、劇場や国、自治体等、多くの関係者の皆様のご理解とご協力が必要不可欠である。本調査報告書が、皆様と一つのエビデンスを共有し、次の一歩へ繋がるものとなれば幸いである。

寄稿

観劇体験、すすめましょう

東京都立保谷高等学校校長（全国高等学校演劇協議会会長） 平林正男

コロナ禍でしばらく実施できていなかった本校の演劇鑑賞教室ですが、都教育庁の事業を活用する形で2023年の3月に久しぶりに実施しました。日程と会場手配の都合から、本校の体育館を劇場にする形での開催となったので、演劇鑑賞の環境としてはいま一つだったかと思いますが、ふだん体育の授業や部活動で使っている体育館が劇場に変わる姿を見られたのは貴重な体験でした。参加した生徒からは、空間がハレの場になったことへの驚きの感想も聞かれました。本校では伝統的に文化祭のときに3年生がクラス劇の発表に取り組んでいるので、〈役者さんが表情豊かに演じる様子を目の当たりにできて参考になった〉〈舞台上でセリフをしゃべっていない人たちもそれぞれ考えて動いているのがわかった〉〈後ろの方の席だったけれど、声がとてもよく聞こえた〉などという、自分たちの劇づくりに取り入れる視点を持って観ている生徒がたくさんおりました。

実は、自ら進んで劇場に出かける高校生には、あんまり会ったことがありません。演劇部の生徒ですら、自分が演じるのは楽しく進んでやるけれど、他人のお芝居をじっくり集中して観るのには慣れていない人が多いように感じます。また、劇場に足を踏み入れることへのためらい、不安もあるように思います。私自身も、かつての勤務校のそばにあった小劇場に初めて入るとき、地下深く（地下二階）の会場に向かう階段の入口から妖しさを感じてなかなか入れなかったことを思い出します。そしていま、大人も子どもも、動画を見られる端末を手にしています。通学通勤の電車内では、自分の好みの作品をイヤホンつけて見入っている姿をたくさんみかけます。いつか、劇場は感染症拡大の温床だと目の敵にされたのも〈個視・個聴〉の時代が進んだ原因の一つかもしれません。

けれどやはり、演劇鑑賞を共通体験するのはとても意義あることです。時間と場所を共有して、同じ作品を見る。その級友が、ちょっと自分と違う切り口の感想を抱いたことによる発見がある。カメラが一つの視点でとらえた映像を見せられるのではなく、その時その場にいる自分からしか見られない視線で作品に向かい合える。役者の声量や息遣い、空間の温度や匂いまで自分の身体で感じ取る、これらのことは、ライブの場、劇場体験でしかできないことです。さらに、演劇は、言葉で紡がれた作品が多いことから、鑑賞体験のあとに、戯曲として残されたものにあたるなどしながら、その上演について改めてふりかえる、かみしめる、咀嚼することもできます。級友や、自分自身との対話を深めることができます。

こんな、妖しい魅力あふれる観劇を、高校時代に大人に連れていかれる学校行事として体験しておくことはとても貴重です。先述の地下二階の小劇場には演劇部の生徒を連れて足しげく通うようになり、彼らの卒業公演をその劇場で行ったのはステキな思い出です。

參考資料

鑑賞者(生徒)用アンケート(2023年)

今回鑑賞した作品名: _____

Q1 今回の鑑賞会より前に、演劇(ミュージカルを含む)を鑑賞したことはありましたか？

① ある (⇒タイトル: _____ いつ頃: _____)

② ない

Q2 今回の作品の満足度を教えてください。

①不満

②やや不満

③ふつう

④満足

⑤大変満足

Q3 親しい友人や家族に、この作品をオススメしたいと思いますか？(10段階で回答してください。)

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
 思わない |-----| 非常にそう思う

Q4 鑑賞後に感じたこととして、該当するものがあれば○をつけてください。(いくつでも)

- ①ライブ(生)の表現の迫力や魅力を感じた ②演劇への興味がわいた
 ③音楽への興味がわいた ④俳優や演技への興味がわいた
 ⑤スタッフへの興味がわいた ⑥違う考え方、価値観があると感じた
 ⑦作品について誰かに感想を話したくなった ⑧その他(_____)

Q5 作品の感想(印象に残った場面や、感じたこと、良かった点など)を聞かせて下さい。

主催:公益社団法人日本劇団協議会・文化庁 「高校生のための巡回公演」

鑑賞者(生徒)用アンケート(2023年)

オンラインでの回答は、以下の URL からご回答ください。

アドレス ⇒ <https://onl.la/9wBu2jD> QRコード ⇒



<リンク先での設問は、以下の通りとなっています。>

今回鑑賞した作品名: _____

Q1 今回の鑑賞会より前に、演劇(ミュージカルを含む)を鑑賞したことはありましたか？

- ① ある (⇒タイトル: _____ いつ頃: _____)
② ない

Q2 今回の作品の満足度を教えてください。

- ①不満 ②やや不満 ③ふつう ④満足 ⑤大変満足

Q3 親しい友人や家族に、この作品をオススメしたいと思いますか？(10段階で回答してください。)

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
思わない |-----| 非常にそう思う

Q4 鑑賞後に感じたこととして、該当するものがあれば○をつけてください。(いくつでも)

- ①ライブ(生)の表現の迫力や魅力を感じた ②演劇への興味がわいた
③音楽への興味がわいた ④俳優や演技への興味がわいた
⑤スタッフへの興味がわいた ⑥違う考え方、価値観があると感じた
⑦作品について誰かに感想を話したくなった ⑧その他(_____)

Q5 作品の感想(印象に残った場面や、感じたこと、良かった点など)を聞かせて下さい。

実施校アンケート(2023年*)

日本劇団協議会では、高等学校における芸術鑑賞会の実施状況を踏まえ、より円滑・効果的な展開を図ることを目的にアンケートを実施しております。よろしければ、以下のアンケートにご協力ください。

Q1 貴校における芸術鑑賞会の開催頻度を教えてください。(※文化祭等の発表会を除く)

- ① 毎年1回 ②2年に1回 ③()年に1回 ④不定期 ⑤その他()

Q2 芸術鑑賞会として、近年(直近5年程度)実施されたジャンルを教えてください。(複数回答可)

- ① 演劇 ②音楽 ③伝統芸能 ④ その他()

Q3 実施するジャンルの選択方法について、教えてください。

- ① 毎回決まったジャンルで実施している ②年度によって、予めジャンルが決まっている
③ ふさわしい内容があるジャンルを選択している ④その他()

Q4 芸術鑑賞会の実施意義として、重視されていることを教えてください。(複数回答可)

- ①本物の芸術に生で触れる機会の創出 ②生徒間の文化体験格差の是正
③多様な価値観に触れる機会の創出 ④感受性や表現力の向上
⑤学校生活の思い出づくり ⑥その他()

Q5 演劇の芸術鑑賞会を実施される際、作品選定において重視されていることを教えてください。(複数回答可)

- ①作品テーマ、題材 ②教科との関連 ③対象学年にふさわしい内容であるか
④質の高さ ⑤費用面 ⑥上演時間
⑦過去実施での団体実績 ⑧その他()

Q6 演劇の芸術鑑賞会を実施される際、どちらの会場を希望されますか。理由とともに教えてください。

- ①体育館(理由:)
②近隣会館・ホール(理由:)

Q7 実施にあたり、お困りのことがあれば教えてください。(複数回答可)

- ①候補団体や作品に関する情報の不足 ②予算の確保 ③日程・時間の確保 ④会場の確保
⑤実施に向けた体制や連絡調整 ⑥その他()

Q8 芸術鑑賞会の実施後、生徒さんについて感じられた変化があれば、教えてください。(複数回答可)

- ①文化芸術への興味関心の向上 ②コミュニケーション頻度の増加や変容
③新たな一面の発見 ④その他()

Q9 その他、芸術鑑賞会の実施に関するご意見・ご要望等がありましたら、お聞かせ下さい。

()

<送付先・問い合わせ先> 〒160-0023 東京都新宿区西新宿 6-12-30 芸能花伝舎 3F
公益社団法人日本劇団協議会 中原宛 TEL(03)5909-4600 Mail:nakahara@gekidankyo.or.jp

文化庁委託事業 令和5年度「文化芸術による子供育成推進事業
-統括団体による高校・過疎地域等学校派遣モデル事業-

学校における芸術鑑賞会に関するアンケート

公益社団法人 日本劇団協議会

〒160-0023 東京都新宿区西新宿6-12-30

芸能花伝舎3F

私ども日本劇団協議会では、1974年から継続して、全国の高校生を対象とした鑑賞機会の創出に取り組んできております。今年度「文化庁委託事業」の一環として、全国各地の現状・ニーズをとらえるための調査研究を進めております。皆様のお声をお聞かせいただき、今後の制度設計・政策提言に生かしていきたいと考えておりますので、ご多忙のところ大変恐縮ですが、是非とも本アンケートにご協力くださいますよう宜しくお願い申し上げます。

質問には下記の要領に従ってお答えください。お答えいただいた内容はすべて統計的に集計処理いたしますので、回答者の方のご回答内容やお名前、学校名を公表することは決してございませんので、ご安心ください。

ご記入にあたってのお願い

- このアンケートは、貴校で舞台芸術の鑑賞教室などをご担当されている先生または管理職の先生から必ずご回答をお願い致します。
- 複数の課程がある場合は、別々に回答してください。ただし、通信制は回答する必要はありません。
- ご回答に当たっては、2020年度から2022年度の実施状況についてご回答ください。
- ご回答は当てはまる番号を○で囲んでいただくか、文字や数字をご記入していただく形式です。質問文の末尾に（○は一つだけ）とあれば1つだけ、（○はいくつでも）とあればいくつでも当てはまる番号を○で囲んでお知らせください。
- 回答項目で“その他（ ）”に該当する場合は、（ ）内になるべく具体的にご記入ください。
- ご回答の記入は質問の番号順にお答えください。質問によっては一部の方だけにお伺いするものがあります。質問の中にお答えいただく方を指定しておりますのでその指示にそってお進みください。
- ご回答にあたり、ご不明な点や質問がございましたら、別紙問い合わせ先までご連絡ください。

【ご回答内容を統計的にまとめる上で必要となりますので、貴校の概要について以下、お知らせください。】

フリガナ		
学校名		
所在地		() 都・道・府・県 () 市・区・町・村
ご記入者名		
学校の種類	区分	1. 高等学校（全日制） 2. 高等学校（定時制） 3. 中・高一貫校 4. 特別支援学校
	設置者	1. 国立 2. 公立 3. 私立
生徒数		約 () 人

Q1. 貴校では芸術鑑賞会を行なっているでしょうか。(○は一つだけ)

1. 行なっている→Q2へ 2. 行なっていない→直下のSQ1とSQ2のみご回答ください。

SQ1. 芸術鑑賞会を行なっていない理由をお知らせください。(○はいくつでも)

1. もともと学校の計画にない 2. 費用負担が大きい 3. 他の先生の同意を得るのが難しい
 4. 保護者の理解を得るのが難しい 5. 仕事の負担が大きい 6. 芸術鑑賞会のための時間を割きにくい
 7. 何を見せたいのかかわからない 8. 開催中の生徒の態度が心配 9. コロナの影響で中止した
 10. その他 ()

SQ2. 今後のご意向についてお知らせください。(○はいくつでも)

1. 学校の計画として時間が確保できれば実施を検討したい 2. 費用負担が軽くなれば実施を検討したい
 3. 他の先生や保護者の同意や理解が得られれば実施を検討したい
 4. 学校側の業務が簡素化されれば実施を検討したい
 5. 劇団や作品の情報が得やすくなれば実施を検討したい 6. 実施を検討するつもりはない
 7. その他 ()

Q2. 貴校での芸術鑑賞会の開催頻度をお知らせください。(※文化祭等の発表会を除く)(○は一つだけ)

1. 毎年1回 2. 2年に1回 3. 不定期 4. その他(具体的に)

Q3. 芸術鑑賞会を開催するにあたって、実施するジャンルの選択方法についてお知らせください。(○は一つだけ)

1. 毎回決まったジャンルで実施している 2. 年度によって、予めジャンルが決まっている
 3. ふさわしい内容があるジャンルを選択している 4. その他 ()

Q4-1. 貴校で過去3年間に開催された芸術鑑賞会の作品種類の中に、「演劇」は含まれていますか。

1. 含まれている 2. 含まれていない→Q4-2を回答して終了

Q4-2. 貴校で過去3年間に開催された芸術鑑賞会のすべての作品種類をお知らせください。(〇はいくつでも)

- | | | | |
|-------------|-----------|------------|------------|
| 1. 演劇 | 2. 人形劇・影絵 | 3. ミュージカル | 4. バレエ・ダンス |
| 5. オーケストラ | 6. オペラ | 7. 室内楽 | 8. 合唱 |
| 9. ポピュラー音楽 | 10. 伝統音楽 | 11. 歌舞伎・文楽 | 12. 能・狂言 |
| 13. 日本舞踊 | 14. 落語・演芸 | 15. 民族芸能 | 16. 映画 |
| 17. その他 () | | | |

Q5. 過去3年間に実施した「演劇」の芸術鑑賞会の合計回数をお知らせください。(具体的に)

過去3年間の「演劇」鑑賞教室の開催回数 () 回

Q6. 「演劇」の芸術鑑賞会の内容は、どのように決めておられますか。(〇は一つだけ)

- | | |
|---------------------|--------------------|
| 1. 本校で独自に決める(教師主体) | 2. 本校で独自に決める(生徒主体) |
| 3. 本校で独自に決める(PTA主体) | 4. 地区の教育研究会等で決める |
| 5. 教育委員会で決められる | 6. その他 () |

Q7. 「演劇」の作品や劇団を決める際にどのような情報を参考になさいますか。(〇はいくつでも)

- | | | |
|----------------|------------------|--------------|
| 1. ダイレクトメール | 2. 劇団等の人の話 | 3. 専門雑誌、研究雑誌 |
| 4. インターネット・SNS | 5. 他校からや研究会で得た情報 | 6. 知人の紹介 |
| 7. 実際に見聞きした | 8. 例年決まっている | 9. その他 () |

Q8. 学校教育における「演劇」の芸術鑑賞会にはどのようなことを期待されておられますか。(〇はいくつでも)

- | | | |
|-------------|------------------------------------|----------------|
| 1. 情操教育 | 2. 知識を高める | 3. 道徳・モラルを養う |
| 4. 創造力を養う | 5. コミュニケーション能力を養う
(自己表現能力、他者理解) | 6. 精神面でのゆとり、癒し |
| 7. 遊び、娯楽 | 8. 学校行事のひとつ | 9. あまり期待していない |
| 10. その他 () | | |

Q9. 実施の際の鑑賞対象学年をお知らせください。(〇はいくつでも)

- | | | | |
|------------|--------|--------|--------|
| 1. 全学年 | 2. 1年生 | 3. 2年生 | 4. 3年生 |
| 5. その他 () | | | |

Q10. 「演劇」の芸術鑑賞会の開催形態は、次のうちどれですか。(○は一つだけ)

- | | | | |
|-------------|---------------|--------------|-------------|
| 1. 自校の単独 | 2. 他校との共同 | 3. 公立文化施設と共同 | 4. 教育委員会と共同 |
| 5. 地域の団体と共同 | 6. 民間の文化施設と共同 | 7. その他 () | |

Q11. 「演劇」の芸術鑑賞会の実施場所はどこですか。(○は一つだけ)

- | | | | |
|------------|-------|-----------|------------|
| 1. 自校 | 2. 他校 | 3. 公立文化施設 | 4. 民間の文化施設 |
| 5. その他 () | | | |

Q12. Q11でお答えになった会場を用意したのは、下記のどちらでしたか。(○は一つだけ)

- | | | | |
|------------|----------|-----------|------------|
| 1. 自校 | 2. 他校 | 3. 公立文化施設 | 4. 民間の文化施設 |
| 5. 教育委員会 | 6. 地域の団体 | 7. 劇団 | |
| 8. その他 () | | | |

Q13. 「演劇」の芸術鑑賞会で、貴校は劇団等または文化施設等に公演料を支払っていますか。(○は一つだけ)

- | | |
|----------------|-----------------|
| 1. 支払っている→SQ2へ | 2. 支払っていない→SQ1へ |
|----------------|-----------------|

SQ1. 【Q13で「2. 支払っていない」に○を付けた方に伺います。】

その理由についてお知らせください。(○はいくつでも)

- | | |
|----------------|----------------------|
| 1. 教育委員会が負担した | 2. 教育委員会以外の公的機関が負担した |
| 3. 公立文化施設が負担した | 4. 民間の文化施設が負担した |
| 5. 地域の団体が負担した | 6. PTAが負担した |
| 7. その他 () | →SQ2-1へ |

SQ2. 【Q13で「1. 支払っている」に○を付けた方にお伺いします。】

生徒が負担した金額は1人当たりおよそいくらでしたか。(具体的に)

生徒1人当たり () 円負担

SQ2-1. 「演劇」の芸術鑑賞会に関して、貴校の今後の方針をお知らせください。(○は一つだけ)

- | | |
|----------------------|-------------------------|
| 1. 鑑賞教室をいっそう積極的に実施する | 2. 費用等の制約の範囲内でできるだけ実施する |
| 3. 従来と変わらない | 4. 鑑賞教室は減らしていく |
| 5. 鑑賞教室は実施しない | 6. 未定 |

Q14. 貴校で「演劇」の芸術鑑賞会を実施する際に困難を感じられることはありますか。

以下の(1)～(9)までの意見について、「そう思う」から「そう思わない」までのいずれかに○を付けてください。

(○はそれぞれ一つだけ)

	1. そう思う	2. どちらかといえばそう思う	3. どちらかといえばそう思わない	4. そう思わない
(1) 劇団等の情報が不足している	→ 1	2	3	4
(2) 作品に関する情報が不足している	→ 1	2	3	4
(3) 情報が多すぎて選ぶのが大変である	→ 1	2	3	4
(4) 先生の間で情報交換をする場が少ない	→ 1	2	3	4
(5) 芸術活動の内容を自校の裁量で決めるのが難しい	→ 1	2	3	4
(6) 費用負担が大きいため企画・実施に制約を受ける	→ 1	2	3	4
(7) 芸術鑑賞会を開催するには生徒数が不十分	→ 1	2	3	4
(8) 保護者の理解を得るのが難しい	→ 1	2	3	4
(9) 芸術活動のための時間を割きにくい	→ 1	2	3	4

お忙しいところ、ご協力誠にありがとうございました。

令和5年度
実施公演概要
(7 団体・7 作品)

・

鑑賞者（生徒）
アンケートの声



写真左より/平野 萩、藤本伸江、児玉しし丸、もげ、牧野和彦
撮影/三重県立四日市高等学校総務部

劇団うりんこ 『わたしとわたし、ぼくとぼく』

[作・演出] 関根信一

[出演] 児玉しし丸、小原ひろみ、まきのかずひこ、藤本伸江、杉浦耶麻人、むらつばきはるな(以上、うりんこ)
/平野 萩、もげ

[ステージ数/公演地] 16校 10ステージ/岐阜県、愛知県、三重県、滋賀県、京都府

[制作] 劇団うりんこ

◆鑑賞者(生徒アンケート)感想より(抜粋)

- すごく自然な演技で話がずっと入ってくるような感覚で見ることが出来ました。また、これを見て他人とどう接するべきかを改めて考える機会になりました。
- 現代に重要なひとりひとりが輝ける多様性をテーマにした作品に興味を持って鑑賞することが出来ました。
- 人の心の中のことは外からじゃ分からないけど、それを理解する事が大切だと改めて思った。表情や声から感情を読み取れて面白かった。
- 話づらく意見が対立する題材だったが、劇を通して感じることで自分の考えがどういうものなのか明確になったため良い機会だった。
- ステージが変わらないのに、場面の移り変わりがよく分かって躍動感が感じられた。少ない人数だけど圧倒された。
- 私も当事者なので共感するところがあってとても感動しました。また、友達に話しやすくなりました。ありがとうございました。
- あなたが幸せになることが1番大切だという言葉に元気をもらいました。これから私の性がどう変化したとしても、ありのままの自分を受け入れて私が幸せになれる道を選んでいきたいと思いました。
- 生の演技を初めて見たのですごいと思ったし、LGBTQの事もどんな感じか具体的に演技されていたのでより身近に感じました。また、大人になってお金が貯まったらミュージカルなどの演劇を見に行きたいと思いました。
- 自分は自分でいいのだと肯定して貰えるような素晴らしい演劇でした。俳優の方たちの演技の迫力も凄く見入ってしまいました。



写真左より/富山直人、沖まどか、大石哲史
撮影/前澤秀登

オペラシアターこんにゃく座 オペラ『さよなら、ドン・キホーテ!』

[作・演出] 鄭義信 [作曲・音楽監督] 萩京子

[出演(5～7月)] 沖まどか、小林ゆず子、梅村博美、高野うるお、北野雄一郎、大石哲史、富山直人、吉田進也(以上、オペラシアターこんにゃく座) / 大坪夕美(5月/ピアノ)、服部真理子(6～7月/ピアノ)

[出演(9～11月)] 沖まどか、飯野薫、岡原真弓、佐藤敏之、北野雄一郎、大石哲史、富山直人、壹岐隆邦(以上、オペラシアターこんにゃく座) / 服部真理子(9～11月/ピアノ)

[ステージ数/公演地] 10校10ステージ/栃木県、岐阜県、静岡県、京都府、岡山県、熊本県

[制作] オペラシアターこんにゃく座

◆鑑賞者（生徒アンケート）感想より（抜粋）

- ・オペラを生で見るとは初めてで映像では感じられないような迫力や魅力に見入ってしまった。コメディ要素もあり楽しむことが出来た。
- ・オペラは「ずっと演者さんが歌って、しかもゆっくりした音楽に悲しめの伴奏」というイメージがかなり強くて今回の鑑賞も正味あまり前向きではなかったけど、しっかりと鑑賞者に向けたメッセージ性もあってかつ自分が思っていた「オペラ像」とは全く違って面白かった。あれだけ大きなホールに良く響く声が出せていて普通にすごいと思った。
- ・一つのオペラに色々な現代の問題が入っていてとても考えさせられる良いオペラでした！個人的には馬のコンビが最高でした！また会いたいです！
- ・登場人物との掛け合いが面白く思わず笑ってしまう場面や、見ていて楽しくなるような演出の中で、少し寂しく、悲しくなるような場面や今の時代にも繋がる差別的な内容も含まれておりとても深く考えさせられる内容でした。
- ・すごく重たいお話なのに重くなりすぎない演技がすごかったです。演技が素敵すぎてめちゃめちゃ引き込まれました。すごく面白かったです。マイクを使っていないのに声が響いているところとかピアノの音色、歌のハモリ方とか全部がすごすぎてかっこよかったです。素敵な公演ありがとうございました。
- ・どの場面もとても迫力があって見ていて舞台の世界観に吸い込まれていく感じがして素敵な演劇でした。また違う作品も見たいなと思いました。



写真左より/矢野貴大、林田悠佑
撮影/鈴木ヨシアキ

青年劇場 『きみはいくさに征ったけれど』

[作] 大西弘記 [演出] 関根信一

[出演] 島野仲代、中川為久朗、福原美佳、秋山亜紀子、高山康宏、矢野貴大、林田悠佑、池田咲子(以上、青年劇場)

[ステージ数/公演地] 4校5ステージ/石川県、京都府、大阪府

[制作] 青年劇場

◆鑑賞者(生徒アンケート)感想より(抜粋)

- ・戦争についてのお話かと思ったけど、現代を生きる私たちにとっても分かりやすくなっていたのですごく感動しました。役者さんの演技の迫力や言葉一つ一つに心を動かされ、とても充実した時間でした。
- ・命について考えられるととてもいい機会でした。演技が本当に上手で感情移入が凄かったです。10代の私たちにぴったりの題材だったなと思いました!
- ・生きるということを改めて知ることができたし、周りの友達や家族と話せるときにいっぱい話して後悔がないように生きたいと思えました。
- ・一つ一つのセリフにこめられているものを、しっかり感じる事ができたし、役者さんが心を込めて言っているのだなと思いました。演劇を初めて見たけど、あんなに迫力があるとは思ってもいなかったし、緊張感などもしっかり感じられたので良かったです。
- ・実際にプロの演劇を見てみると、自分たちが行うようなものとは、格が違って人物の感性が流れこんでくるような感じがしたし、気付いたら劇の中に入っているかのような気持ちで見ることができた。
- ・舞台上に道具がいすしかなかったのに、音やセリフ、動きでどんな場面なのかを想像することができるのがすごいと思ったし、面白かったです。生きることは、しんどくて大変なことも多いけど、ポジティブに色々なことに挑戦して楽しく生きたいと感じました。
- ・主人公が最後、頑張ろうとしていたところが印象に残った。頑張って生きていかないとだめだなと感じた。ずっと悲しいような内容じゃなくて、おもしろい場面があったりして、とても良かった。



写真左より／洪美玉、雨宮大夢、永野愛理、堀光太郎

東京演劇アンサンブル 『音楽劇 消えた海賊』

〔作〕 広渡常敏 〔演出〕 公家義徳 〔音楽〕 林光

〔出演〕 雨宮大夢、小田勇輔、永濱 渉、仙石貴久江、永野愛理、原口久美子、洪美玉、町田聡子、三木元太、
和田 響き、山崎智子、浅井純彦（以上、東京演劇アンサンブル）／二宮 聡、堀光太郎

〔ステージ数／公演地〕 10 校 10 ステージ／岩手県、栃木県

〔制作〕 東京演劇アンサンブル

◆鑑賞者（生徒アンケート）感想より（抜粋）

- ・最初の俳優さんが次々と出てくるところが印象的だった。生徒や先生に質問を投げかけていて、全員参加型だったのがすごく楽しかった。演劇を見ることが初めての近かったので、面白いのか不安だったけど、生の迫力と考えさせられる内容が見ていて面白かった。
- ・「若さ」や「美しさ」の価値観を歌や演技で表すところが印象に残りました。命令形のない言葉を使う海賊たちは、自分たちのロマンや希望を貫き通したことがとても感動しました。もう一度見たいと強く思いました。
- ・劇場で見る演劇は初めてで、迫力にとっても驚いた。キャストの方々の演技は、とてもすばらしく、大変、勉強になる部分が多かった。「大道具・小道具の移動」も動きの一部にしている、その自然さに驚き、感動した。照明、音響、役者、観客が一体となった劇は、舞台に引きずり込まれるようだった。
- ・生徒が参加する場面があって、自分も作品に入ったような感覚で楽しかった。感情が表された歌がよくできて、わかりやすかった。
- ・理想主義と現実主義のぶつかるシーン（命令文を無くすか無くさないかのシーン）にそれぞれの考え方や、メッセージが伝わった。自由とは何かで、考えを巡らす（自由意志など）決断を下すことに、海賊らしさを感じた。
- ・階段状の骨組みの大道具を移動させて船に見せるのがすごかった。あのせまい舞台上を広く感じさせる演技力と身体能力がすごいと思った。
- ・終わり方がとても印象的だった。タイトルの『消えた海賊』の意味が最後にわかって、考えさせられた。人によって、解釈が変わる作品だと思った。



写真左より/笹岡洋介、星野子熊、森路敏、しもじい、平田正治
撮影/成毛章浩

東京芸術座 『12人の怒れる男たち』

[作] レジナルド・ローズ [訳] 額田やえ子 [演出] 杉本孝司

[出演] 笹岡洋介、しもじい、手塚政雄、山村勇人、神谷信弘、鈴木健一朗、星野子熊、森路敏、松並俊祐、平田正治、脇秀平、小川拓郎、古川伴睦(以上、東京芸術座)

[ステージ数/公演地] 8校 10 ステージ/北海道、群馬県、福井県、静岡県、熊本県

[制作] 東京芸術座

◆鑑賞者(生徒アンケート)感想より(抜粋)

- ・扉から入って来た時から、演技のはずなのに、日常生活を純粹に送っているみたいで、水を飲んだり、鼻をかんだりするのも、本当にやっているようで驚いた。舞台セットが変わらない演劇を初めて見たが、ずっと惹き込まれた。物語が進むにつれ、証言がどんどんひっくり返って行って、見ていてすごく面白かった。
- ・演劇が始まったときに、周りの声が聞こえなくなるくらい引きこまれて、見るのに夢中でした。演劇中も、みなさんの行動力が強く感じ、演劇力もとてつもなく感じました。
- ・多数の意見に流されず、自分の意見を持つ大切さを感じた。生の演技を見て、人ってこんな演技ができるんだと感じた。テレビやDVDなどで見るのもおもしろいが、今度見に行きたいと思うほど、おもしろかった。1時間45分という長い時間、セリフを覚えて演技をする人たちに心を打たれた。
- ・本当に本当に、人一人ひとりにプライドもあって、経験からなる様々な想いが苦しいほどに伝わってきた。最後の最後まで、有罪と主張していた男性の気持ちを思うだけで、いっぱいいっぱいな心になりました。スタッフ全員が本当に素晴らしい演劇で、力強さ、想いなどが、身にしみるような本当に良い作品だったと思う。
- ・1人が暴言を吐いて、叫びまわっている時の10人が、ぱらぱらと立ち上がって背を向けるシーンで、その背中から、様々な気持ちが伝わってくるようだった。12人それぞれが異なる価値観を持っていて、せまい部屋が舞台となっているが、この世界全体にある偏見や差別、思想の対立などの大きな問題が見えた。互いに尊重して他人と接することの難しさを感じた。



写真左より/中島沙結耶、早坂聡美、宮崎愛美、齊藤美香、佐藤 凜
撮影/成毛章浩

劇団銅鑼 『いのちの花』

[原作] 向井愛実著「いのちの花」 瀧晴巳著「世界でいちばんかなしい花 それは青森の女子高生たちがペット殺処分ゼロを目指して咲かせた花」

[脚本] 畑澤聖悟 [演出] 齊藤理恵子

[出演] 馬淵真希、佐藤響子、野内貴之、池上礼朗、早坂聡美、大竹直哉、中島沙結耶、宮崎愛美、佐藤 凜、齊藤美香（以上、銅鑼）

[ステージ数/公演地] 13校 13ステージ/群馬県、東京都、神奈川県、石川県、福井県、長野県、岐阜県、愛知県、大阪府

[制作] 銅鑼

◆鑑賞者（生徒アンケート）感想より（抜粋）

- ・後で調べたら、このプロジェクトは実在するものであることがわかり、非常に感銘を受けました。キャッチーな語り口が多くありながらも、その裏にある日本の知り得ぬ部分まで丁寧に描かれていて、この観劇を経験したことが誇りに思えるような内容でした。
- ・動物の命について深く考えさせられた作品だった。私達と同じ高校生でも動物のために朝早くから行動している方々がいると知ってすごいなと尊敬する気持ちが生まれた。愛護センターの場面では、本当にショックを受けている演技に驚いた。実際の高校生も非常に辛い思いをしたのだろうと思われる。いのちの花プロジェクト後も殺処分の件数は減っているものの、なくなっていないのが現実なので、命の大切さを誰かに伝えたいと思った。
- ・家に帰って家族に感想を話してしまうほどとても心を動かされました。
- ・ただ話を聞くだけでは伝わりづらかったり重すぎたりすることも、演劇という形にすることで伝わってくるがあった。
- ・大切な人に会いに行こうと思いました
- ・序盤の6時間授業は、パネルを通り抜けることによって違う場所にいることを想像させる演出で、ドラマなどにはない舞台ならではの感じが、とても好きでした。



写真左より/鈴木裕樹、遠藤浩子

わらび座 ミュージカル『北斎マンガ』

[脚本・演出] マキノゾミ [作曲] 八幡茂

[出演] 鈴木裕樹、遠藤浩子、千葉真琴、黒木友宜、内田勝之、川井田南、山田愛子、村中琉奈、三浦叶子（以上、わらび座）

[ステージ数/公演地] 8校8ステージ/宮城県、福島県、愛知県、三重県、岡山県、香川県

[制作] わらび座

◆鑑賞者（生徒アンケート）感想より（抜粋）

- ・初めのつかみの所がミュージカルとは思えないようなハイテンションでびっくりしました。曲調もポップな感じで演劇にとても引き込まれました。また、ストーリーもおもしろくて、伏線を探したりできて楽しかったです。秋田に行った時は見に行きたいと思いました。
- ・北斎の話と聞いて最初はしっかりとしたお堅い感じだと思いましたが、ミュージカルが始まると面白く北斎のことを学ぶことができました。あんなに動いているのに全く疲れを感じさせないのも、すぐく大道具が少ないにも関わらず分解組立により色々なものに変化させるのもおもしろいと思いました。
- ・ところどころでの歌唱シーンでのみなさんの歌唱力がすごかったです。ストーリーも分かりやすくてよかった。
- ・絵を描く人間としての、人生の歩み方や気持ちを演技にのせて表現することで、より心の中に響いてくるなと感じました。
- ・とても複雑な気持ちになるところやびっくりするところなど、とても気持ちが入りやすく物語が頭に入ってきやすかった。ライブでの迫力は思ったよりもすごくて気持ちが乗りやすかった。
- ・北斎先生の奥さんが、結婚した初めの頃は笑顔が少なかったけれど、だんだん笑顔が増えていく所が印象的でした。また、北斎先生の、年齢や体調の変化を声で表現している、演じ分けがすごかったです。
- ・葛飾北斎の生い立ちを詳しく知ることが出来たのでとても満足しました。私も葛飾北斎みたいに夢中になれるものを見つけないと思いました。



令和5年度 学校における地域活性化のための文化芸術子供鑑賞・体験事業
— 統括団体による高校・過疎地域等学校派遣モデル事業 —

『高校生のための巡回公演』

令和6年3月発行

発行 公益社団法人日本劇団協議会 事務局
〒160-0023 東京都新宿区西新宿 6-12-30 芸能花伝舎 3F
TEL：03-5909-4600 FAX：03-5909-4666
info@gekidankyo.or.jp

編集：境 千尋（芝居処 華ヨタ）
デザイン：西山昭彦（hylla）

令和5年度

学校における地域活性化のための文化芸術子供鑑賞・体験事業
—統括団体による高校・過疎地域等学校派遣モデル事業—

『高校生のための巡回公演』

調査研究報告書